

京阪式アクセント地域におけるアクセント変化の研究

山岡華菜子

本研究の目的と構成

本研究は、京阪式アクセントの諸地域におけるアクセント変化の実態を明らかにし、それを史的変遷の上に位置づけることを目的とするものである。

京阪式アクセントについての研究は、ここで改めて述べるまでもなくアクセント研究の中心をなしてきた分野である。それというのも、一つには京阪式アクセント地域の中心をなす京都アクセントが、種々の文献からその古い姿をうかがい知ることのできるものであるからで、そこから現代に至るまでの変遷を論じた先行研究は数多く存在する。しかしながら、京阪式アクセントの諸地域に範囲を広げてみると、その中にはこれまであまり注目されてこなかった地域が存在し、また、それほど取り上げられていないアクセント変化が観察される。本研究では、そのような地域のアクセントについて、筆者が得た調査結果を用いながら、その実態を明らかにすることを試みる。そして、それによってアクセント史上に残された空白を埋めることを目的とする。

研究に際して、まずは調査地域の選定と調査項目の設定をおこなった。序章では、それらの点について整理したうえで、京都アクセントについて、特に本研究に関わりの深い近世から現代にかけてのアクセント史をまとめることにする。

つづく第一章では、名詞のアクセント変化について論じる。本研究で具体的に述べるのは、二拍名詞と三拍名詞におけるアクセント変化である。ともに、現代の京阪式アクセントを記述する際によく取り上げられる問題であるが、本研究ではそれらの先行研究との比較をおこないながら、地域・世代ごとの特徴や語ごとの特徴について明らかにする。

第二章は、動詞活用形のアクセント変化について述べるものである。まず、アクセントを論じる際に無視することのできない文法的な現象である、一段動詞の五段化についてその実態を整理し、それとアクセントとの関わりを論じる。そして、動詞活用形のうち禁止形(終止形+助詞ナ)のアクセント変化を取り上げ、この変化が古い終止形から新しい終止形に置き換わるという単純な流れにはないことを明らかにする。また、アクセント史の上で論じられることの多い三拍動詞第2類の変化についても、筆者の調査結果から改めて考察をおこなう。

第三章では、形容詞と形容詞型活用をもつ付属語のアクセントについて述べる。三拍形容詞アクセントにおいては第1類が第2類に合同することがすでにさまざまところで指摘されているが、ここではその後にみられる変化にも注目し、地域差と世代差という観点から論じる。それにつづいて、形容詞型活用をもつ付属語のうち、比較的新しい語である推定をあらわす「らしい」と、古くから用いられる希望をあらわす「たい」について取り上げる。それぞれの語と前に接続する自立語のアクセントとの関係から、これらの付属語が有する特徴と、そこにみられる史的変遷について述べることにする。

終章では、第一章から第三章までの内容について、それぞれに述べたことを改めて整理す

ることによって、京阪式アクセントの諸地域にみられる変化とその特徴を明らかにすることを旨とする。

なお、末尾に「参考文献」を一括して記載し、各論のもととなった論文を「本研究と既発表論文との関係」のなかに掲げることとする。ただし、ここにまとめるに際しては多くの訂正補筆を加えていること、中には書き下ろしたものも含まれることをおことわりしておく。

目次

本研究の目的と構成	i
目次	iii
序章 研究対象と京都アクセント	1
1. アクセントについて	3
2. 京阪式アクセントの諸地域と調査地域	4
3. 京都アクセント	11
第1章 名詞のアクセント	17
第1節 二拍名詞第4類と第5類の合同傾向	
1. はじめに	19
2. 使用するデータについて	21
3. 調査結果	21
4. 変化傾向の違い	25
5. おわりに	29
第2節 三拍名詞第2類・第4類のアクセント変化	
1. はじめに	31
2. 使用するデータについて	32
3. 全体の傾向	33
4. 語による傾向の違い	34
5. 変化の方向とその理由	40
6. おわりに	43
第2章 動詞活用形のアクセント	45
第1節 一段動詞の五段化傾向とアクセント	
1. はじめに	47
2. 使用するデータについて	47
3. 五段化の程度と要因	48
4. アクセントの類別と五段化	53
5. おわりに	58
第2節 二拍および三拍動詞の禁止形アクセント	
1. はじめに	61
2. 使用するデータについて	62

3. 調査結果	62
4. 変化の時期とその原因	66
5. おわりに	69
第3節 三拍動詞第2類のアクセント変化	
1. はじめに	72
2. 使用するデータについて	73
3. 調査結果	74
4. 変化の原理	80
5. おわりに	84
第3章 形容詞ならびに形容詞型活用の付属語のアクセント	86
第1節 三拍形容詞のアクセント変化	
1. はじめに	88
2. 使用するデータについて	89
3. 調査結果	90
4. 変化の道筋と要因について	95
5. おわりに	98
第2節 付属語「らしい」のアクセント	
1. はじめに	100
2. 先行研究	100
3. 調査結果	103
4. 地域差とアクセントの変遷	109
5. おわりに	112
第3節 付属語「たい」のアクセント	
1. はじめに	114
2. 先行研究	114
3. 京阪式アクセント地域における調査結果	115
4. 〈タイ〉と前接語との関係	117
5. 「たい」のアクセント	122
6. おわりに	124
終章 京阪式アクセントの展開	127
1. はじめに	128
2. それぞれにみられるアクセント変化	128
3. 京都アクセントにおける変化	132
4. 地域による進行速度の違い	133

5. 変化の方向	140
6. 一段動詞の五段化と付属語アクセント	144
7. おわりに	145
【参考文献】	148
【本研究と既発表論文との関係】	152

序章 調査対象と京都アクセント

序章では、まず第1項で本研究におけるアクセントの捉え方を明確にした後、第2項で本研究が対象とする地理的な範囲と、研究対象とする語について述べる。京阪式アクセントの研究はこれまでに多くの研究者によってなされてきた。本研究ではその中であまり取り上げられてこなかった地域と、そこで現在広がりを見せるアクセント変化について論じるが、ここでは取り上げる地域について、その概要を述べる。そして、第3項で京阪式アクセント地域の中心をなす京都アクセントについて、とくに近世と現代を中心に整理する。本研究では京都アクセントではなく、周辺部のアクセントを取り上げることのほうが多いが、各論では京都アクセントと筆者が調査をおこなった地域のアクセントとを比較することがある。また、それぞれのアクセント変化を捉える際に、京都アクセントがいかに変化したかを把握することは不可欠である。そのため、ここでは本研究に関わる範囲でそのアクセントについて述べることにした。

1. アクセントについて

1.1 本研究におけるアクセントの定義と表記

本研究においては、金田一春彦（1974：5）や上野和昭（2011：3）などの定義に従い、アクセントとは「一つひとつの語について決まっている高低の配置」であるという立場をとる。そして、語の中で相対的に高く発音される拍をH、低く発音される拍をL、下降拍をF、上昇拍をRで書き表し、以降では先行研究におけるアクセントの記述も、支障のないかぎり本研究で使用する表記に書き改めることとする。

また、たとえばHLLというアクセントをH1型、LHLというアクセントをL2型などと呼ぶことがある。この場合は、「H」や「L」はその語が高く始まるか（高起式）低く始まるか（低起式）ということを示し、「1」や「2」などの数字は前から数えたときに何拍目までか（低起式の場合は、何拍目が）高く発音されるかということを示す。同様に、後ろから数えて何拍目までか高く発音されるかという点からその語のアクセントを示すことがあるが、そのときには-2型や-3型と呼ぶことにする。

本研究で取り上げるのは基本的に語単位のアクセントであるが、第1章で取り上げる名詞の場合、その語の後ろに従属式の助詞（「が・を・に・は」など）を伴うアクセントを表示することがある。また、第3章で「らしい」や「たい」のような付属語のアクセントを取り扱う際には、前の自立語と合わせて表記することがある。このような語と語との境界はハイフン（-）で示すことがあるが、これは必ずしも音調の区切りをあらわすものではない。また、第2章および第3章で論じる動詞や形容詞のアクセントについては、打消をあらわす「ん」や過去をあらわす「た」などに接続する形全体のアクセントを示す場合にハイフンは用いず、一まとまりの語相当として捉えることにする。

1.2 アクセントの捉え方

アクセントのもつ弁別的な機能として重要であるのは、京阪式アクセントの場合、①語の始まりが高いか低いか（高起式か低起式か）、②語の内部で高から低へ下がる場所があるかないか、③下がる場所があるとすればどこで下がるかという三つの点であり、服部四郎（1954）などはそれ以外について記述する必要はないという立場をとる。また、本研究におけるアクセントの定義、および本研究で用いるH・L・F・Rという表記は、基本的に「単語を構成するそれぞれの拍が高か低、あるいは上昇か下降といういずれかの音調を担う」という考えによるものである。この捉え方はふつう「段階観」と呼ばれるが、それとは異なる立場も存在する。いわゆる「方向観」や「核」観などがそれである。そして、現代諸方言のアクセントを観察する際にはこのような「方向観」や「核」観を取るほうが多数派であろう。一方で、「段階観」は川上泰（1953、2003ほか）などによって批判されてきた。たとえば現代における「カ（チカラ）」という語のアクセントについて、「チカラHLL」ではなく、「方向観」をとって「[チ]カラ」などと書き表すほうがふさわしいということである（この場合、「チ」と「カ」の間にアクセントの下がり目が存在する、上野善道2003など）。

筆者はこの「方向観」「核」観などについて、否定的な見方をしているわけではない。また、「段階観」について完全に賛同するという立場をとるわけでもない。ただし、本研究の目的ははじめに述べたとおりで、現代の京阪式アクセントの諸地域におけるアクセントの変化をとらえ、それを史的変遷の上に位置づけることにある。そのため、時代（世代）ごとにアクセントの比較をおこなうことを重視して、史的研究において用いられることの多いH・L・F・Rでアクセントを表記する。

2. 京阪式アクセントの諸地域と調査地域

2.1 京阪式アクセント地域について

本研究で「京阪式アクセント地域」という場合は、中井幸比古(2002a:56)が示した地図の範囲をさす(図1として引用、黒く示される地域が京阪式アクセントの地域である)。ただし、本研究の扱う地域は2.2に述べるとおり、京阪式アクセント地域と呼ばれる場所をすべて覆うわけではなく、ごく限られた地域である。特に、奈良県・滋賀県・三重県と愛媛県については本研究の対象に含まないため、そのアクセントについて述べることはほとんどない。このうち、三重県と愛媛県については、京阪式アクセント以外のアクセント

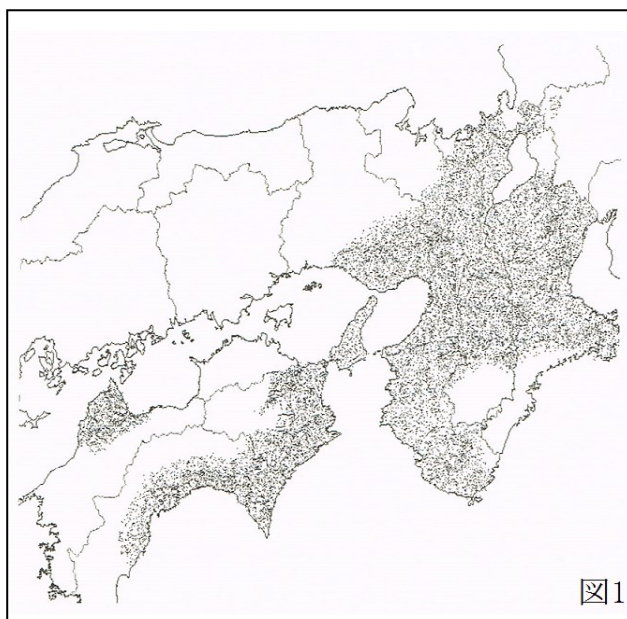


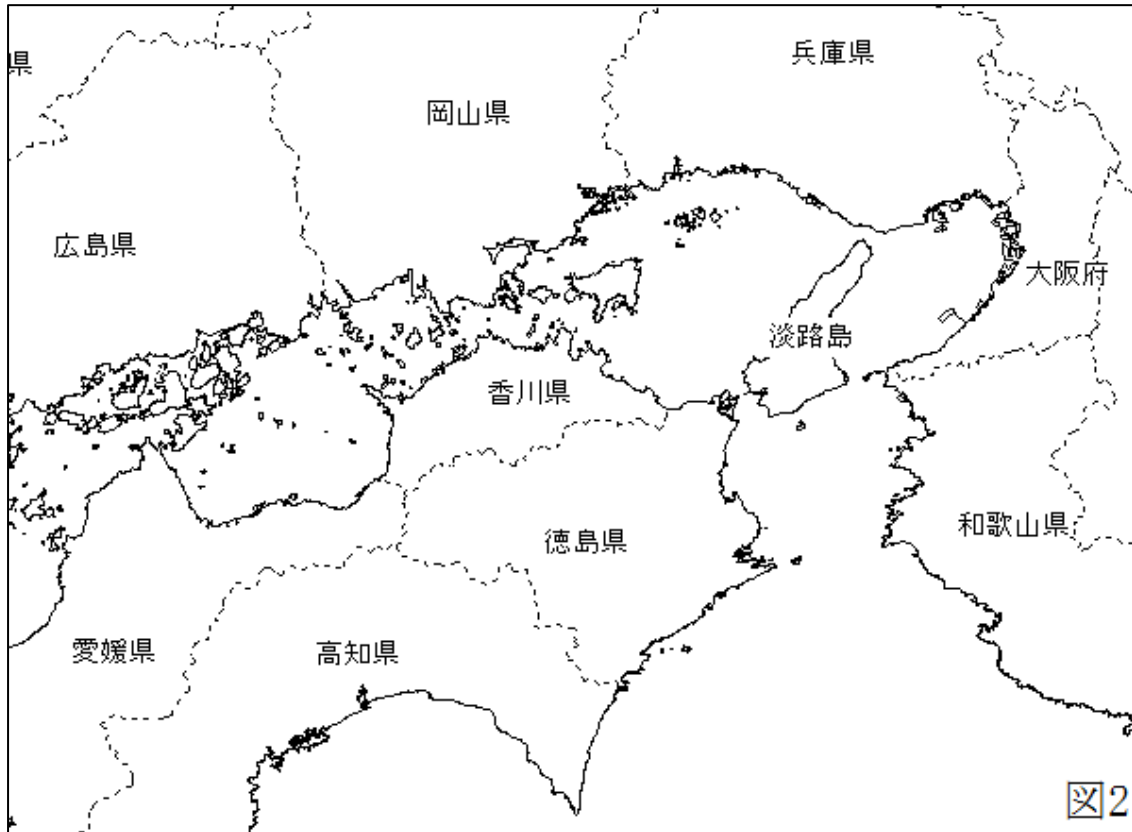
図1

システムとの関係を考慮する必要が生じるからである。たとえば三重県は名古屋と地理的に近く、アクセントなどについて述べる際にその観点が欠かせない(鏡味明克 1989 など)。また、愛媛県は讃岐式・京阪式・東京式など、アクセントの分布がきわめて複雑であり、まずその点について整理することが必要となる。本研究は京阪式アクセントの内部にどのような変化がみられるかという点を重視するため、他のアクセント体系が関わる地域については積極的に取り上げないことにした。

また、京阪式アクセント地域の中心をなす京都市および大阪市については、先行研究のデータを引用することはあっても調査地域とはしなかった。これらの地域のアクセントについて記述した先行研究がすでに多く存在するからであり、本研究で取り上げるのは、これまであまり注目されてこなかった地域である。これらをふまえた上で、以下では調査地域について詳細を述べる。

2.2 調査地域について

本研究で調査対象としたのは、図2に示した地図¹のうち、大阪府・和歌山県・兵庫県・徳島県・高知県という1府4県に含まれる14の地域である。ここでは、それぞれについて述べる。



2.2.1 兵庫県と徳島県

2.2.1.1 淡路島

京阪式アクセントの研究は古くから盛んにおこなわれており、先行研究もさまざまな観点のものが数多く存在する。しかしながら、その中でも瀬戸内海に浮かぶ数々の島々のうち、もっとも面積の広い兵庫県の淡路島については、方言を記録した田中萬兵衛（1950）や禰宜田龍昇（1986）、興津憲作（1990）などはあるものの、アクセントについて扱ったものとしては山名邦男（1965）のほか、高橋顕志（1982）や興津（1990）などの一部にみられる程度である。近年、中澤光平（2011、2014ほか）によって詳細な記述がなされたが、依然としてその研究の数は少ないといってよい。また、世代別のアクセントを記述したものについてはさらに少なく、淡路島のアクセントは地理的に本州と四国とを結ぶ位置にありながら、あまり取り上げられてこなかったというのが実情である。

筆者が最初に淡路島で調査をおこなったのは2009年のことで、その後2016年まで断続的にアクセントの調査を実施した。本研究で用いるのは、2011年および2012年におこなった淡路島内の七つの地域における調査結果と、2014年～2016年にかけておこなった二つの

地域における調査結果である。

2011年および2012年の調査にあたっては、田中萬兵衛（1950）の地図にあげられている淡路島内の全52地点から、事前調査をおこなって地域差があらわれやすい地点を七つ選んだ。その際、禰宜田（1986）による分類²も参考にし、それが網羅できるように配慮した。調査対象とした具体的な地域名は、岩屋・富島・郡家（以上、淡路市）・洲本・由良（以上、洲本市）・津井・福良（以上、南あわじ市）である。このうち、岩屋・富島・郡家・由良・福良は漁業が盛んな地域、洲本は古くからの商店街のある地域、津井は瓦生産が盛んな地域である。また、2015年および2016年にはこの中からさらに岩屋と福良を選び、追加調査をおこなった。

それぞれの調査地域の特徴について、以下にまとめる。

岩屋…淡路島の北端、本州からは明石海峡大橋を渡ったところに位置する地域である。橋だけでなく明石との間を結ぶ船が数多く運行されていて行き来がしやすいためか、岩屋に住む人々の中には明石にある高校に通う人や島外の職場に就職する人も多い。漁業が盛んにおこなわれている地域である。

富島…淡路島の西側の浦、旧北淡町にある地域で、現在は区画整理が進んでおり、海岸線の位置が変わったり新しい住宅が増えたりしている。数年前までは明石との間を結ぶ船が運行されていたが、現在は休止している。漁業が盛んにおこなわれている地域である。禰宜田（1986）において、特殊なアクセントが観察された地域として取り上げられている。

郡家…淡路島の西側、旧一宮町にあたる地域であり、漁業が盛んにおこなわれている。また、淡路市の西側における最南の地域で、禰宜田（1986）のアクセント分布図では北部アクセントと中部アクセントとの境目のように記述されている。

洲本…淡路島の東側、中央部に位置している。岩屋から福良までを結ぶ四国街道と呼ばれる道も通っており、江戸時代、阿波藩による淡路支配の拠点となった土地で、文化的にも経済的にも洲本を中心にして発展してきたとされている。現在も古い町並みが残り、古くから続く商店が軒を連ねている他、漁業も盛んにおこなわれている。かつては大阪との間を結ぶ船が運行していたが、現在は休止している。

由良…洲本の南に位置する漁村である。淡路支配の拠点は、当初この土地に置かれた。他地域とは狭い道でしかつながっておらず、現在でも洲本との間にある道が土砂崩れによって通行止めになることもあるという。そのためか、島内の他地域からは特殊な言葉を話す地域として認識されており、淡路島の方言について話す際には話題にのぼることが多く、高橋（1982）などにも取り上げられている。

津井…淡路島の南西に位置する、旧西淡町の地域である。江戸時代初期ごろから瓦の生産がおこなわれるようになり、現在もこの地域には数多くの瓦生産工場が並んでいる。また、津井には現在路線バスが通っていないのも特徴である。

福良…淡路島の南に位置する旧南淡町の地域である。徳島と淡路とを結ぶ海上交通の

要として発展してきた。現在も漁業が盛んにおこなわれているほか、観光地として多くの人を訪れる土地でもあり、他県からの観光客の姿を見るのが他地域に比べても多い。現在は徳島へ渡る船は運行されていない。

なお、それぞれの具体的な位置については、明石市・鳴門市と大阪府南部・和歌山県北部と合わせて図3に示した。



2.2.1.2 明石市と鳴門市

本研究の起点となったのは、淡路島のアクセントを記述することであった。ただし、淡路島の内部でのみ調査をおこなった場合、仮にその結果に地域差や世代差があらわれたとしても、その理由について考察することができないと考えた。そこで、本州の中でも淡路島と地理的に近く、関わりの深い明石市の明石港近辺と四国の中でも地理的に近い徳島県鳴門市鳴門町の亀浦港近辺を調査対象に加え、2011年から2012年にかけて同様の調査を実施した³。

2.2.2 大阪府と和歌山県

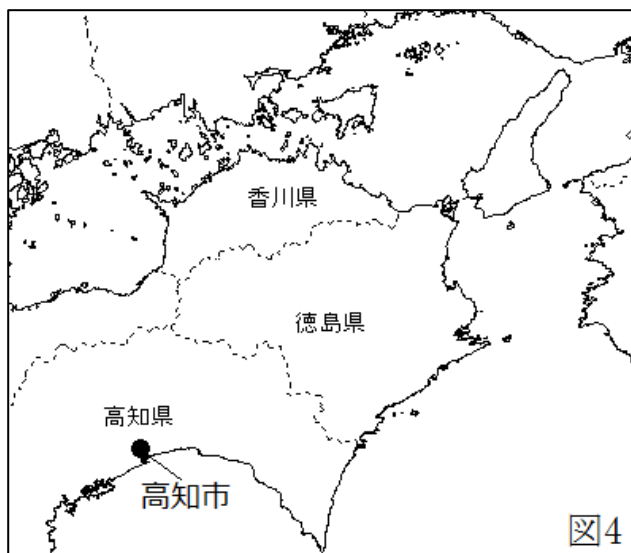
大阪府は京阪式アクセントの中心をなす地域であり、特に大阪市・東大阪市などのアクセントについては数多くの先行研究で記述がなされている。和歌山県についても、京都市や大阪市よりも古いアクセントを残すことから、中南部に位置する田辺市などのアクセントについては、佐藤栄作編（1989）・中井（2002ab）などによって研究がおこなわれている。しかしながら、その間に位置する地域、すなわち大阪府南部と和歌山県北部についてはあまり言及されない。そこで、筆者は大阪府南部と和歌山県北部で調査をおこなうことにした。調査地域を決める際には大阪の中心部との関係や淡路島との関係を考慮し、漁師町で地理的には中心部とさほど遠くないが、地域内部の結びつきが強いと考えられる岸和田市春木をまず選んだ。さらに、大阪府の最南端に位置する岬町の漁師町である深日、古くは淡路島と深い関係を持っていた和歌山県和歌山市加太、そして鉄道によって大阪の中心部との行き

来が盛んな和歌山県橋本市のうち恋野で調査をおこなうことにした。

これら四つの地域のうち、春木・加太・恋野においては2013年に調査を実施し、深日においては2013年と2015年に調査を実施した。

2.2.3 高知県

高知県は徳島県と同様に、すべてが京阪式アクセント地域に含まれるわけではなく、主に中・東部に京阪式アクセントが分布し、西部の幡多は東京式アクセントが分布する。大阪や京都などに比べると明らかに古いアクセントを残す地域として、高知市のアクセントを記した研究は数が多く、上にあげた佐藤編(1989)や中井(2002ab)などにも取り上げられている。筆者も当初はこれらの先行研究による調査結果を参照していたが、アクセントの比較をお



こなうにあたって、特に若い世代の実態を把握する必要があると感じたため、2014年～2016年に春木などと同じ調査票を用いて高知市内でアクセント調査を実施した。

なお、高知市の具体的な位置については、図4に示した。

2.2.4 調査地域のまとめ

以上のように、本研究では兵庫県淡路市の岩屋・富島・郡家、洲本市の洲本・由良、南あわじ市の津井・福良、兵庫県明石市(以下、「明石」と呼ぶ)、徳島県鳴門市鳴門町(以下、「鳴門」と呼ぶ)、大阪府岸和田市春木、大阪府岬町深日、和歌山県和歌山市加太、和歌山県橋本市恋野、高知県高知市(以下、「高知」と呼ぶ)という14の地域を主に取り上げて、それぞれのアクセントについて論じる。

ただし、各論で必ずしも上記すべての地域について取り上げるわけではなく、調査した中でアクセント変化に注目すべき点がみられた所を中心に取り上げることにする。たとえば、第1章では二拍名詞第4類・第5類のアクセントについて述べるが、その際には変化の途中段階であり、またその変化過程が大阪市などと異なる様相をみせる淡路島を中心に据える。

また、上記以外の地域のアクセントについても触れることがあるが、それについては各論で述べることにする。

2.3 調査協力者と調査方法

本研究では、次のような条件のもとで調査協力者を探した。

1. その地域で言語形成期を過ごしたこと
2. 現在も同じ地域に居住するかごく近い地域に居住すること
3. 地域内部の人々との関わりが深い職についていること
4. 男女は問わない

そして、年齢によって若年層（20代～30代）、中年層（40代～50代）、高年層（60代以上）の三つにわけ、それぞれ最低1人、可能であれば2人以上に対して調査をおこなった⁴。2人以上を調査する場合には、異なる年代（20代1人と30代1人など）になるように配慮した。

各地域における最終的な調査人数は、次のとおりである。

岩屋	高年層 5人	中年層 6人	若年層 3人
富島	高年層 2人	中年層 2人	若年層 2人
郡家	高年層 2人	中年層 2人	若年層 2人
洲本	高年層 3人	中年層 3人	若年層 2人
由良	高年層 2人	中年層 2人	若年層 2人
津井	高年層 2人	中年層 2人	若年層 2人
福良	高年層 2人	中年層 2人	若年層 2人
明石	高年層 2人	中年層 2人	若年層 2人
鳴門	高年層 2人	中年層 2人	若年層 2人
春木	高年層 1人	中年層 2人	若年層 2人
深日	高年層 3人	中年層 3人	若年層 2人
加太	高年層 2人	中年層 1人	若年層 1人
恋野	高年層 3人	中年層 2人	若年層 2人
高知	高年層 3人	中年層 4人	若年層 5人

調査はいずれも、調査票を用いた読み上げ形式とし、調査協力者と対面しておこなった。

2.4 調査する語と類別語彙

本研究で調査項目としたのは、以下のような語彙である。

- 一拍名詞：血、火、日 など
- 二拍名詞：風、石、山、海、雨 など
- 三拍名詞：魚、小豆、力、光、命、鳥、薬 など
- 二拍動詞：置く、着る、書く、見る、居る（オル） など
- 三拍動詞：上がる、開ける、動く、起きる、歩く など
- 二拍形容詞：よい（エエ）、濃い など
- 三拍形容詞：赤い、白い など

四拍形容詞：悲しい、嬉しい、おいしい など

付属語：らしい、たい、みたい・みたいだ、くらい、より、から など

複合名詞：新年度、夏祭り、麦畑、寄せ集め など

複合動詞：思い出す、起き上がる、立てかける、受け継ぐ など

本研究では、このうち地域差や世代差が特にみられ、なおかつアクセント史を論じる際に問題となる二拍名詞・三拍名詞、二拍動詞・三拍動詞、三拍形容詞、形容詞型活用の助動詞におけるアクセント変化を取り上げる。具体的な語形などの詳細については各論で示すが、外来語は調査項目に含めなかった。また、複合名詞⁵や複合動詞⁶以外の語については、原則として古典語に存在し現在も使用される語を対象とした。また、名詞・動詞・形容詞については、「早稲田語類」（秋永一枝ほか 1998、坂本清恵ほか 1998）を参照して、類別語彙でどのように分類されるかという点についても考慮し、調査する語を選んだ。たとえば、第1章第2節で取り上げる三拍名詞のうち、「青菜（アオナ）」はもともと「アオ」と「ナ」がつづいた形であるため複合語として扱われることもあるが、「早稲田語類」において三拍名詞第4類として分類されている。そこで、本研究でも「2拍+1拍の複合語」としてではなく、三拍名詞の調査項目として採用することにした。

このように類別語彙を用いたのは、本研究が京阪式アクセントの史的変遷を視野に含むからである。類別語彙は本来、国語学会編（1980：7）によれば「過去の文献、ならびに現代語諸方言の考察から、古い日本語において同じアクセントを持っていたと推定される語彙」のことである。すなわち、祖語に存在したと考えられるアクセントによって分けられたものである。ただし、実際には祖語までさかのぼることができなくとも、金田一春彦（1974：60）などは「過去のある時代のある方言でも、これら同じグループの語は、同じアクセントをもっていたのではないかと推定」し、そのような前提のもとで類別語彙を用いる。

本研究は祖語を意識するものではなく、あくまで現代の京阪式アクセントについて地域差や世代差からその変化を論じるものである。しかしながら、上のように同じ類に属する語がアクセント史の上で同様の変化をたどりながら現在に至るとすれば、類別語彙による分類をもとに調査語を定め、その動きを追うことはアクセントの変化を論じる上で有効な手立てであるといえるだろう。本研究はこのような立場のもと、類別語彙を用いることにする。

なお、類別語彙には「金田一語類」（金田一春彦 1974：62-73）と「早稲田語類」があるが、本研究では主に「早稲田語類」を参照する。また、「早稲田語類」では現代京都においてアクセントの対応をもたない語などに印が付されているが、本研究ではその印がついている語については調査対象としなかった。

2.5 調査結果の聞き取りについて

調査した語の聞き取りは、すべて筆者がおこなった。ただし、聞き取りだけでは判断が困難であった場合、補助的に音声解析ソフトを用いて解析をおこなった。音声解析には「praat」を使用し、ピッチと波形、音圧の3要素からアクセントを判断した。

また、調査協力者には複数回、同じ語の発音を依頼することがあった。原則として、一度目の発音をその語のアクセントとして採用することにしたが、同じ話者のアクセントに「ゆれ」があった場合、そしてそれがアクセント変化を論じる上で重要であると判断した場合には、本論の中で触れる。

3. 京都アクセント

本論に移る前に、京阪式アクセントの中心をなす京都アクセントについてまとめることにする。

京都アクセントについては既に数多くの研究者によって論じられており、文献を用いたものから現代語において調査をおこなったものまで、さまざまな観点の先行研究が存在する。先に述べたとおり本研究では京都アクセントについて、その世代差などを取り上げることとはほとんどないが、筆者のおこなったアクセント調査の結果と比較することがある。そのため、ここでは特に近世期から現代に至るまでの京都アクセントについて、各論に関わる範囲で、先行研究を参照しながら品詞ごと（名詞・動詞・形容詞）に概観する。さらに、3.2では現代京都における付属語アクセントを確認することにする。

なお、以下では近世期のアクセントについては秋永一枝ほか(1998)、坂本清恵ほか(1998)、上野和昭(2011)などを参照してまとめた。また、現代京都のアクセントについては佐藤栄作編(1989)、中井幸比古(2002ab)、田中宣廣(2005)などを参照した。

3.1 自立語のアクセント

3.1.1 名詞のアクセント

3.1.1.1 二拍名詞

類別	語例	近世		現代	
		単独	助詞接続	単独	助詞接続
1	風	HH	HH-H	HH	HH-H
2	石	HL	HL-L	HL	HL-L
3	山	HL	HL-L	HL	HL-L
4	海	LH	LH-H~LL-H	LH	LL-H(LH-L)
5	雨	LF	LF-L~LH-L	LF(LH)	LH-L

表1. 京都における二拍名詞のアクセント

表1は、二拍名詞のアクセントについてまとめたものである。表の左側が近世期の京都におけるアクセント、右側が現代京都におけるアクセントで、「助詞接続」は「が・を・に・は」のようないわゆる従属式の助詞が接続した場合のアクセントのことを指す。

近世期には、第1類の単独形がHH・助詞接続形がHH-H、第2類と第3類の単独形がHL・助詞接続形がHL-L、第4類の単独形がLH・助詞接続形がLH-H~LL-H、第5類の単独形がLF・助詞接続形がLF-L~LH-Lであった。現代においてもおおむね同様のアクセントであるが、第4類の助詞接続形がLL-Hであり、LH-Lもあらわれるという点と、第5類の単独形にLHのあらわれることがあるという点が異なる。すなわち、近世から現代に至るまで第1類

から第3類には変化がなく、第4類と第5類にはアクセントの変化が生じているということになる。

本研究では、この第4類・第5類のアクセントについて第1章第1節で取り上げる。

3.1.1.2 三拍名詞

類別	語例	近世		現代	
		単独	助詞接続	単独	助詞接続
1	魚	HHH	HHH-H	HHH	HHH-H
2	小豆	HHL	HHL-L	HLL	HLL-L
3	力	HLL	HLL-L	HLL	HLL-L
4	光	HHL	HHL-L	HLL	HLL-L
5	命	HLL	HLL-L	HLL	HLL-L
6	鳥	LHH~LLH	LHH-H~LLH-H	LLH	LLL-H
7	薬	LHL	LHL-L	LHL	LHL-L

表2. 京都における三拍名詞のアクセント

次に、三拍名詞のアクセントを表2に示した。二拍名詞と同じく、表の左側が近世期のアクセント、右側が現代におけるアクセントである。近世期には第1類の単独形がHHH・助詞接続形がHHH-H、第2類および第4類の単独形がHHL・助詞接続形がHHL-L、第3類および第5類の単独形がHLL・助詞接続形がHLL-L、第6類の単独形がLHH~LLH・助詞接続形がLHH-H~LLH-H、第7類の単独形がLHL・助詞接続形がLHL-Lである。現代のアクセントと比較すると、第1類・第3類・第5類・第7類には違いがないことがわかる。一方で、第6類はLHHからLLHへ変化しているが、これはアクセントの上昇する位置が一つ後ろにずれたものと解される。同じく、第2類・第4類はHHLからHLLへと変化しており、第3類・第5類と合同している様子が見られる。

ただし、大阪においては榎垣実(1957)や村中淑子(2005)などの先行研究で、第2類・第4類の語がHHLからHLL以外のアクセントに変化する例もあげられており、注意が必要である。本研究では、特に第2類・第4類のアクセント変化について、第1章第2節で取り上げる。

3.1.2 動詞のアクセント

3.1.2.1 二拍動詞

表3には、二拍動詞のアクセントを示した。上段が近世期の京都におけるアクセント、下段が現代京都におけるアクセントである。近世期において、第1類の四段動詞(現代では五段動詞)は終止形から順に「置く HH・置かん HHH・置いた HLL・置くな HLL・置こう HHH・置け HL」、一段動詞は「着る HH・着ん HH・着た HL・着るな HLL・着よう HHH・着い F」であった。また、第2類の四段動詞は「書く LH・書かん HLL・書いた LHL・書くな LHL・書こう HLL・書け LF」、一段動詞は「見る LH・見ん LH・見た HL・見るな LHL・見よう HLL・見い F」であり、第3類は「居る HL・居らん HLL・居った HLL・居るな HLL・居ろう HLL・居れ HL」であった。現代との違いがみられるのは、第1類の禁止形と第2類の否定形・過去形・意志

形である。ただし、否定形・過去形・意志形における変化は京阪式アクセントの諸地域においても比較的早い段階で進んでいるため、本研究の対象とはせず、禁止形のアクセントについて第2章の第2節で述べることにする。

近世								
類別	活用	語例	終止連体形	否定形	過去形	禁止形	意志形	命令形
1	四段一段	置く	HH	HHH	HLL	HLL	HHH	HL
		着る	HH	HH	HL	HLL	HHH	F
2	四段一段	書く	LH	HLL	LHL	LHL	HLL	LF
		見る	LH	LH	HL	LHL	HLL	F
3	四段	居る(おる)	HL	HLL	HLL	HLL	HLL	HL
現代								
類別	活用	語例	終止形	否定形	過去形	禁止形	意志形	命令形
1	五段一段	置く	HH	HHH	HLL	HHL	HHH	HL
		着る	HH	HH	HLL	HHL	HHH	F
2	五段一段	書く	LH	LLH	LLH	LHL	LLH	LF
		見る	LH	LH	HL	LHL	LLH	F
3	五段	居る(おる)	HL	HLL	HLL	HLL	HLL	HL

表3. 京都における二拍動詞のアクセント

3.1.2.2 三拍動詞

近世								
類別	活用	語例	終止連体形	否定形	過去形	禁止形	意志形	命令形
1	四段二段	上がる	HHH	HHHH	HHLL	HHLL	HHHH	HHL
		開ける(開くる)	HHH	HHH	HLL	HHLL	HHHH	HF
2	四段二段	動く	HLL	HHLL	HLLL	HLLL	HHLL	HLL
		起きる(起くる)	HLL	HLL	LHL	HLLL	HLLL	LF
3	四段	歩く	LHH~LLH	LHHH~LLHH	LHLL	LHLL	LHHH~LLHH	LHL
現代								
類別	活用	語例	終止形	否定形	過去形	禁止形	意志形	命令形
1	五段一段	上がる	HHH	HHHH	HLLL	HHHL	HHHH	HHL
		開ける	HHH	HHH	HLL	HHHL	HHHH	HF
2	五段一段	動く	HHH	HHHH	HLLL	HHHL	HHHH	HHL
		起きる	LLH	LLH	LHL	LLHL	LLLH	LF
3	五段	歩く	LLH	LLLH	LHLL	LLHL	LLLH	LHL

表4. 京都における三拍動詞のアクセント

次に、三拍動詞のアクセントを表4にまとめた。表3と同様、上段に示したのが近世期の京都におけるアクセント、下段に示したのが現代京都におけるアクセントである。近世期においては、第1類の四段動詞が終止連体形から順に「上がる HHH・上がらん HHHH・上がった HHLL・上がるな HHLL・上がろう HHHH・上がれ HHL」、二段動詞が「開ける(開くる) HHH・開けん HHH・開けた HLL・開けるな(開くるな) HHLL・開けよう HHHH・開けえ HF」であり、第2類の四段動詞は「動く HLL・動かん HHLL・動いた HLLL・動くな HLLL・動こう HHLL・動け HLL」、二段動詞が「起きる(起くる) HLL・起きん HLL・起きた LHL・起きるな(起くるな) HLLL・起きよう HLLL・起きい LF」であった。また、第3類は「歩く LHH~LLH・歩かん LHHH~LLHH・歩いた LHLL・歩くな LHLL・歩こう LHHH~LLHH・歩け LHL」であったことがわかる。現代アクセントと比較すると、二拍動詞と同じく禁止形にはやはり違いがあらわれることから、これについても第2章第2節で述べることにする。第3類においても、現代は終止形 LLH・否定形 LLLH・意志形 LLLH となっており、アクセントの上昇する位置が後退するという変化が生じている。

また、三拍動詞は第2類のアクセントに大きな変化が生じている点が特徴的である。この変化は京阪式アクセントの諸地域においても既にみられるが、その原理については必ずしも明らかでない。本研究では、第2章第3節においてその問題を取り上げることとする。

3.1.3 形容詞のアクセント（三拍形容詞）

		近世			
類別	語例	終止形	連体形	連用形	カリ活用形
1	赤き(赤い)	HHL	HHL	HHL	HHLL
2	白き(白い)	HLL	HLL	LHL	LHLL
		現代			
類別	語例	終止形	連体形	連用形	カリ活用形
1	赤い	HLL	HLL	LHL	LHLL
2	白い	HLL	HLL	LHL	LHLL

表5. 京都における三拍形容詞のアクセント

つづいて、本研究で取り上げる三拍形容詞のアクセントを表5に示した。三拍形容詞には、第1類が第2類に合同するという変化が生じていることがわかる。合同した後のアクセントは終止形・連体形がHLL、連用形およびカリ活用形（現代語においては「赤かった」「赤かって」などのようにあらわれる）がLHL~となるのが特徴的であるといえるが、筆者が調査をおこなったところによれば、連用形・カリ活用形にHHL~というアクセントの聞かれる場合がある。そこで、第3章第1節において、この傾向がみられる理由について考察をおこなうこととする。

3.2 付属語のアクセント

付属語のアクセントについて述べた先行研究は多くないが、現代の京都方言については中井幸比古(2002ab)のデータや、田中宣廣(2005)による包括的な研究などがあげられる。ここでは、田中(2005)の分類を引用することとする。

田中(2005)は、陸中宮古・信州大町・東京・京都・鹿児島という五つの地域における付属語のアクセントについて述べたものであり、基本的にすべての付属語を前に接続する自立語との関係から次のような6種に分類する。

従接式：前接自立語にそのまま続く。付属語には下がって続くことがある。

声調式：前接自立語の声調が及ぶ。

独立式：前接語からアクセント上独立する。

下接式：前接自立語が平板型なら下がって続き、起伏型なら下がらず続く。

支配式：前接語のアクセントに関わりなく、自身の型に引きつけてしまう。

共下式：その付属語の1拍前から下がる。

(田中 2005:96 から引用)

このうち、京都方言の付属語は、表6のように分けられている（田中 2005：342-345 から一部を示した）。

名詞接続			
従接式	が／を／に／と／で／しかetc		
声調式	—		
独立式	—		
下接式	へ／も／より／までetc		
支配式	ぐらい／みたい(様態)／らしい(推定)etc		
共下式	—		
動詞接続		形容詞接続	
従接式	—	—	
声調式	れる／ます／だけetc	そうや(様態)etc	
独立式	けど／ぐらい／みたい(様態)etc	のに／みたい(様態)／たetc	
下接式	わ／まで／よりetc	ねん(文末)etc	
支配式	たい／らしい(推定)	らしい(推定)	
共下式	へん(打消)／たetc	—	

表6. 現代京都における付属語アクセント分類

これを中井（2002a）などと比較してみると、たしかにおおよその傾向は一致する。しかしながら、とくに「支配式」に分類される語については中井（2002a）で示されているアクセントと必ずしも一致しない。たとえば「らしい（推定）」は田中（2005）において「読む LH」に接続する場合「読むらしい HH-HLL」となるとしているが、中井（2002a）によれば「読むらしい LL-HLL」のようになる。すなわち、何らかの理由によって異なる傾向のあらわれることがあると考えられる。そこで本研究では、「支配式」に分類されたうち、名詞および動詞・形容詞に接続して推定をあらわす「らしい」と動詞の連用形に接続して希望をあらわす「たい」について、それぞれ第3章第2節、第3節で述べることにする。

3.3 まとめ

第3項では、京都アクセントについて確認した。名詞・動詞・形容詞の現代京都におけるアクセントは、近世期に比べて型の区別が減りつつあるということがいえる。また、付属語については、現代のアクセントしか示さなかったが、中井（2002ab）と田中（2005）とを比べた場合に、同じ語であっても異なる傾向をみせることがあるということを確認した。

ここで示したアクセントをふまえて、第1章から第3章では筆者がアクセント調査をおこなった地域における結果をみることにする。そして、それぞれにみられるアクセントの変化について検討する。

【注】

1 本研究で用いる地図は「白地図 Kenmap Ver9.11」によって作成した。

- 2 禰宜田 (1986) は淡路島の方言を北部・中部・南部の三つに大別しており、中澤光平 (2014) の区分もおおむねそれに一致する。中澤 (2014) によれば岩屋と由良はさらに下位区分されるといえるが、本研究では岩屋・富島・郡家を北部、洲本・由良を中部、津井・福良を南部とする。
- 3 明石は淡路島と同じ兵庫県内であるため、高校進学などを機に淡路島に住む人が明石にある学校に通うようになるなど、頻繁に行き来することも多く、現在でも岩屋との間をむすぶ高速船が運行されている。一方で、鳴門について、現在は淡路島とさほど関わりが深いわけではないが、江戸時代には淡路島と鳴門が同じ藩であったなど、歴史的に関係の深い地域であったため、特に南部にはその影響が色濃いのではないかと考えられる (岩本孝之 2013 : 24 などでも言及されている)。
- 4 調査人数は、方言研究としては少ない。ただし、それを補うために、このほかにも予備調査をおこなった。また、調査時にも可能な限り自然発話の中に聞かれるアクセントと比較をおこない、種々の先行研究とも比較した。そこで、ここで得られた調査結果はある程度の地理的範囲・年代でみられるものと推定して以下の論を進めることにする。
- 5 複合名詞の調査項目を定めるに際しては、平田秀 (2010)・同 (2011) を中心に、上野善道 (1984)・同 (1997)、中井幸比古 (1998)、佐藤栄作 (1998)、和田實 (1942) などを参照した。
- 6 複合動詞は第 2 章第 3 節において、三拍動詞第 2 類のアクセント変化を論じる際に重要となる。新田哲夫 (2004)・同 (2005) などを参照して調査する語を選んだ。

第1章 名詞のアクセント

本章は、名詞のアクセントにみられる変化について述べたものである。ここで扱うのは、「早稲田語類」に記載される二拍名詞および三拍名詞である。

そのうち、まず第1節において二拍名詞第4類と第5類の合同傾向について取り上げる。京阪式アクセント地域の広い範囲でみられるこの変化は、先行研究でもすでに多く論じられているものであるが、本研究ではこれまでにほとんど取り上げられていない淡路島における調査結果を中心とする。そして、先行研究との比較という観点から、とくに〈第4類+助詞〉のアクセントと〈第5類単独形〉〈第5類+高起式述語〉〈第5類+低起式述語〉のアクセントに注目し、その変化がどのように進行するのかについて述べる。そのなかで、先行研究において提示されている変化の道筋と異なる順序で変化の進む地域があることを指摘する。また、それぞれがどのような順序で変化が進行するのかという点について、細かく分類し、その理由の検討をおこなう。

つづく第2節では、三拍名詞第2類と第4類のアクセント変化について述べる。これらのアクセントは従来 HHL→HLL というのが「基本線」の変化であり、そのほかに HHL→LHL という変化もある程度みられるというのが先行研究で述べられているところであったが、筆者の調査から HHL→HHH に変化する語も相当数あらわれるということが明らかとなった。そして、その傾向が地域・世代だけでなく語によっても異なるという点について指摘する。このような変化が生じる原因について、本研究ではいくつかの異なる観点による考察をおこなう。

第1節 二拍名詞第4類と第5類の合同傾向

1. はじめに

1.1 本節の目的

京阪式アクセントの諸地域における二拍名詞のアクセントは、表1¹に示したように、第1類（飴、風など）のHH型、第2類（石、川など）と第3類（山、犬など）のHL型、第4類（海、空など）のLH型、第5類（雨、秋など）のLF型という4種類に分けることができる。また、これらの語に「が、を、に、は」のようないわゆる従属式の助詞が接続した場合は、第1類がHH-H、第2類および第3類がHL-L、第4類がLL-H（高起式の述語が接続した場合はLL-L）、第5類がLH-Lとなる。

二拍名詞	語例	単独形	助詞	高起式述語	低起式述語
第1類	飴、風	HH	HH-H	HH-H…	HH-L…
第2類	石、川	HL	HL-L	HL-L…	HL-L…
第3類	山、犬	HL	HL-L	HL-L…	HL-L…
第4類	海、空	LH	LL-H/LL-L	LL-H…	LH-L…
第5類	雨、秋	LF	LH-L	LF-H…	LF-L…

表1. 二拍名詞アクセント

しかしながら、京都などにおいて第4類と第5類のアクセントは合同する傾向をみせており、そうすると両類ともに単独形がLH、助詞接続形がLH-L、低起式の述語に直接続く形（「秋来る」「雨降る」など）がLH-L…、高起式の述語に直接続く形（「秋好き（や）」「雨止む」など）がLL-H…となる。これに関連する先行研究については次の1.2で概観するが、第5類の下降消失について述べた杉藤美代子・奥田恵子（1980）や10代から40代におけるアクセント変化を論じた岸江信介（1997）、比較的近年の研究としては田原広史・村中淑子（2000）や郡史郎（2011）、岸江信介・村田真実（2012）など、多くのものがあげられる。

本節は、これらの先行研究のうち、特に田原・村中（2000）で述べられている二拍名詞第4類・第5類における「アクセント統合の道筋」をもとに、それとの比較をおこないながら、淡路島において生じているこの変化の様相を明らかにすることを目的とする。

1.2 先行研究

1.2.1 変化の要因

二拍名詞第4類・第5類のアクセント変化について述べた研究には、先にあげたように多くのものがある。そのうち、第4類・第5類のアクセント変化が生じる要因について、真田信治（1987）では単独形のアクセントが第4類と第5類とで同じLHになったこと、標準語（東京語）において第4類と第5類との間に区別がないこと（単独形はHLであり、助詞接続形はHL-Lであって同一のアクセントであること）が関係すると述べられている。また、岸江信介（1990）は大阪市内において第5類がLFからLHへ変化した後、第4類が変

化し始めたとしている。一方で、中井幸比古（1990）においては、「中（なか）・外（そと）・今（いま）」などのような「時間空間を示す 4 類語」が他の語に比べて早く変化する傾向にあると述べており、それが一つのきっかけになったとも考えられる。

これらの先行研究をふまえて、岸江・村田（2012）では第 5 類の LF と第 4 類の助詞付きアクセントを取り上げ、「第 4 類と第 5 類の統合の発生について大阪市内での内的要因による変化、つまり第 5 類の拍内下降の消失および第 4 類の LHL への類推変化がまず起こり、それが近畿周辺部まで拡散したと解釈する」という立場をとっている。すなわち、本節で取り上げる淡路島のような周辺地域においては、「伝播」によって第 4 類と第 5 類の合同が生じたということになる。

1.2.2 変化の道筋

田原・村中（2000）は東大阪市における調査データによって二拍名詞第 4 類と第 5 類にみられる「アクセント統合の道筋」を解明することを主目的としており、第 4 類では従属式の助詞が続く形を、第 5 類では単独形と低起式の述語が直接続く形、および高起式述語が直接続く形を問題としている²。そして、結論部で「アクセント統合の道筋」をまとめて次のように述べている。

- 1) V 類の伝統型 a が主流（50 代以上）
- 2) V 類の伝統型 a が減少、変わって伝統型 b が増加する（40 代）
- 3) V 類の伝統型 a がなくなり、伝統型 b が減少、伝統型 c に移行する、同時に統合型が現れる。同時に中間型も存在する。IV 類の統合型が現れ始める（30 代）
- 4) V 類の統合型が圧倒的主流になる。IV 類の統合型が一気に増え半数を超える（20 代）

ここでいう「V 類伝統型 a」は第 5 類の語が単独形・高起式述語接続形・低起式述語接続形のすべての場合に第 2 拍の下降を保持している状態をいい、「伝統型 b」は低起式述語接続形の場合に下降を失って LH になった状態、「伝統型 c」は低起式述語接続形に加え単独の場合にも下降を失った状態をいう。「中間型」は高起式述語接続形のアクセントが LF-H…から LH-H…になった状態のことであり、LF-H…と「統合型」である LL-H…との間に位置するという見方である。また、「IV 類の統合型」とは、従属式の助詞が続く際のアクセントが LL-H から LH-L という第 5 類的な型へと変化した状態のことを指しており、ここでは 30 代からあらわれはじめると述べられている。

一方で郡（2011）は、大阪市の若年層において二拍名詞第 4・5 類アクセントが文中でどのようなふるまいを見せるかというところに着目し、その特徴を論じている。ここではまず第 4・5 類のアクセントが「合流」しつつあることを確認した上で、「特定の文環境」で両類の区別が「部分的に生じる」場合があることを指摘する。「特定の文環境」とは助詞を介さず高起式の語が後接し、さらにその名詞が強調される（フォーカスがある）環境のことをい

い、このとき第4類がLL-H…、第5類がLH-H…となるとしている。郡（2011）は田原・村中（2000）について「5類の中間型としてLH・Hと表記されているものにはこれが含まれているのかもしれない」と述べている。ただし、有フォーカス時であってもまったくLH-H…があらわれない話者がいることから、この現象を「過渡的な残存的現象」とであると解釈しており、この点で田原・村中（2000）の考えとは相違しないと思われる。

なお、本節で用いるデータにおいて、名詞にフォーカスをおく場合のアクセントを特に調査しているわけではないが、結果にはLH-H…があらわれることがあった³。

2. 使用するデータについて

本節において使用するデータは、2011年から2012年にかけておこなった実地調査によって得られたものである。

調査地域は、淡路島の岩屋・富島・郡家・洲本・由良・津井・福良および明石・鳴門とし、男女の区別なく調査をおこなった⁴。調査人数は若年層・中年層・高年層を2人ずつ（洲本のみ中・高年層3人ずつ）である。

調査語は第4類「海・肩・空・箸・針・松」と第5類「秋・雨・声・春・蛇・窓」の計12語で、それぞれの単独形、「この」前接形、従属式の助詞（が・を・に・は、以下では単に「助詞」と呼ぶ）接続形、助詞＋用言接続形（「肩が痛い」「雨が降る」など）、助詞「の」接続形（「針の穴」「雨の音」など）、高起式述語接続形（「雨止む」など）、低起式述語接続形（「雨降る」など）についてその発音を依頼した。

3. 調査結果

3.1 淡路島方言における二拍名詞アクセントの体系

まず、淡路島方言の二拍名詞アクセントについて整理しておく。

高年層に聞かれたアクセントから、当該地域における伝統的なアクセントを整理すると、先にあげた表1と同じになる。すなわち単独形の場合、第1類のアクセントがHH、第2・3類のアクセントが同じHL型であらわれ、第4類と第5類⁵のアクセントがそれぞれLHとLFとに区別されている。しかしながら第1項でも述べたとおり、近畿中央部において第4類と第5類のアクセントに変化が生じ、両類の区別が失われつつあることが先行研究において指摘されている。淡路島の高年層においても、既にこの第4類と第5類との合同傾向が認められ、特に第5類の語＋低起式述語のアクセント（「雨降る」「窓閉める」など）にはLH-L…、つまり下降を失ったアクセント（田原・村中2000では「伝統型b」）があらわれる。また、年齢層が下がると第5類の単独形や高起式述語後接形にも下降を失ったアクセント（「伝統型c」および「中間型」）があらわれてくるほか、第4類の語に助詞が接続した場合にLH-Lという第5類的なアクセント、つまり田原・村中（2000）のいう「統合型」があらわれる傾向にある。ただし、その変化の進行度合や傾向には地域差がみられる。

以上をふまえて、3.2から3.3においては調査結果のうち〈第4類+助詞〉〈第5類単独形〉〈第5類の低起式述語接続形（以下、第5類+低起式）〉〈第5類の高起式述語接続形（以下、第5類+高起式）〉のアクセントを確認する。そして、3.4において調査結果をまとめた後、考察にうつる。

3.2 〈第4類+助詞〉のアクセント

第4類「海、空、針」などの語に従属式の助詞が後接したときのアクセントは、LL-H（さらに後ろに高起式述語が続く場合はLL-L）からLH-Lへ変化する傾向にあり、この変化後のアクセントは第5類の語に従属式の助詞が後接した形、すなわち「雨が、秋を」などのアクセントと同一である。

淡路島においては特に若年層にLH-Lという変化後のアクセントがあらわれるが、地域によって差がみられた。明石と鳴門も加え、地域・年齢層別の結果を示すと表2のようになる。表中、年齢層をあらわす「高・中・若」の後ろに示した数字は調査人数をあらわす。ここでは助詞つきの形「空が、海が」など6語の助詞接続形と、その後ろに低起式の述語が接続した形「針を刺す」など2語、また高起式の述語が接続した形「空が広い、針を落とす」など4語の結果を合わせて示した。

表2の若年層における結果をみると、明石と洲本においてはLH-Lという変化後のアクセントしか聞かれないという点が共通している。岩屋・郡家・由良・津井・鳴門においても若年層にはLH-Lが多いが、一方で富島・福良⁶においては古いアクセントであるLL-H（LL-L）が多いという結果となった。また、若年層にLH-Lが多い地域のうち、明石と洲本では中年層にも比較的LH-Lが多くあらわれ、とくに明石においては高年層も一部LH-Lであった（「海が」「針が」）が、岩屋・郡家・由良・津井・鳴門ではLH-Lがほとんどあらわれず、郡家において「松が」にLH-Lが聞かれる程度であった。このことから、地域によって変化の始まった時期に違いがあるのだということがわかる。

地域	明石			岩屋			富島			郡家			洲本		
年齢層	高2	中2	若2	高2	中2	若2	高2	中2	若2	高2	中2	若2	高3	中3	若2
LL-H/L	16	12	0	24	24	7	24	24	16	24	20	3	36	17	0
LH-L	8	12	24	0	0	17	0	0	8	0	4	21	0	19	24
合計	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	36	36	24
地域	由良			津井			福良			鳴門					
年齢層	高2	中2	若2	高2	中2	若2	高2	中2	若2	高2	中2	若2			
LL-H/L	24	24	6	24	24	10	24	23	24	24	24	10			
LH-L	0	0	18	0	0	14	0	1	0	0	0	14			
合計	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24			

表2. 第4類+助詞のアクセント

3.3 第5類のアクセント

3.3.1 〈第5類単独形〉のアクセント

第5類「雨、窓、春」などの語は京阪式アクセント地域において、かつてはLF、つまり

第2拍に拍内下降を伴って発音されることが一般的であったが、先にも述べたとおり下降を伴わないLHが増加する傾向にある。調査した地域でどのような状況であるか確認するため、淡路島および明石と鳴門における調査結果を次の表3にまとめた。ここでは単独形と、「この」前接形の結果を合わせて示している。

地域	明石			岩屋			富島			郡家			洲本		
年齢層	高2	中2	若2	高2	中2	若2	高2	中2	若2	高2	中2	若2	高3	中3	若2
LF	16	22	4	23	18	5	22	18	5	24	17	0	32	12	0
LH	8	2	20	1	6	19	2	6	19	0	7	24	4	24	24
合計	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	36	36	24
地域	由良			津井			福良			鳴門					
年齢層	高2	中2	若2	高2	中2	若2	高2	中2	若2	高2	中2	若2			
LF	24	23	9	24	24	7	20	17	17	1	1	0			
LH	0	1	15	0	0	17	4	7	7	23	23	24			
合計	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24			

表3. 第5類単独形のアクセント

表3を見ると、下降が残っているのは鳴門以外の地域の高・中年層であり、そのうち福良では若年層にもLFがあらわれやすいということがわかる。また、明石・岩屋・富島・由良・津井の若年層にはLFがまだ残存している様子が見え、郡家と洲本ではLHしか聞かれない。このことから、郡家と洲本は他の地域より変化がはやいといえそうである。

鳴門では、全年齢層に共通してLFがほとんど聞かれないという結果であったが、この地域でもかつては第5類の語のアクセントがLFであったと考え、何らかの理由で他の地域よりも早く下降を失った可能性がある。ただし、その理由については明らかでない。

3.3.2 〈第5類+低起式〉のアクセント

つづいて、第5類の語に低起式述語を接続した形式、「雨降る」「窓閉める」「春来る」についての調査結果を表4に示す。

地域	明石			岩屋			富島			郡家			洲本		
年齢層	高2	中2	若2	高2	中2	若2	高2	中2	若2	高2	中2	若2	高3	中3	若2
LF	1	0	0	3	2	0	3	2	0	1	0	0	1	0	0
LH	5	6	6	3	4	6	3	4	6	5	6	6	8	9	6
合計	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	9	9	6
地域	由良			津井			福良			鳴門					
年齢層	高2	中2	若2	高2	中2	若2	高2	中2	若2	高2	中2	若2			
LF	2	1	0	1	1	0	2	4	4	0	0	0			
LH	4	5	6	5	5	6	4	2	2	6	6	6			
合計	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6			

表4. 第5類+低起のアクセント

第5類の単独形には2拍目の拍内下降を伴うLFが多いという結果であったが、低起式述語接続形においては、高年層にも2拍目の拍内下降を伴わないLHが多く聞かれた。また、

中年層の結果を見比べると、郡家・洲本ではLFがあらわれないうことがわかる。さきほどの単独形の結果と同様、この二つの地域においては変化の進行がはやいと考えることができる。そのほか、岩屋・富島・由良・津井においても、LFはまったくあらわれないうわけではないが、LHのほうが多いという点で共通している。

一方で、福良においてはLFが比較的あらわれやすい傾向にある。若年層に注目すると、福良でのみLFがあらわれ、他地域はLHしか聞かれないということがわかる。この福良における結果は、若・中年層に比べ高年層に2拍目の拍内下降を伴わないLHが多くあらわれている点不審ではあるが、若・中年層の結果を見る限りでは変化の進行が他の地域に比べて遅いということが指摘できそうである。

なお、明石と鳴門においては、LFはほとんど聞かれなかった。

3.3.3 〈第5類+高起式〉のアクセント

地域	明石			岩屋			富島			郡家			洲本		
年齢層	高2	中2	若2	高2	中2	若2	高2	中2	若2	高2	中2	若2	高3	中3	若2
LF	6	6	0	4	5	2	5	5	3	6	6	1	9	8	0
LH	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
LL	0	0	6	1	1	4	1	1	3	0	0	4	0	1	6
合計	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	9	9	6
地域	由良			津井			福良			鳴門					
年齢層	高2	中2	若2	高2	中2	若2	高2	中2	若2	高2	中2	若2			
LF	5	4	2	3	5	1	3	3	2	0	0	0			
LH	0	1	1	0	0	5	0	0	0	0	2	0			
LL	1	1	3	3	1	0	3	3	4	6	4	6			
合計	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6			

表5. 第5類+高起のアクセント

第5類の語に高起式の用言が後接する形で調査をおこなったのは3語（「雨やむ」「窓開ける」「春好き」）である。地域・年齢層別の結果を表5に示す。

淡路島内の各地域においては、共通して中・高年層に下降を伴ったLFが多く聞かれる傾向にあり、若年層にはLHあるいはLLが多く聞かれる傾向にある。ただし、津井では高年層よりも中年層にLFが多くあらわれる。いささか不審ではあるが、おおむね中年層まではLFが保たれていると捉えてよいであろう。

一方、福良においては、高年層・中年層ともにLLがあらわれやすい。第5類の単独形および低起式述語接続形のLFのあらわれ方とは一致しない結果であった。この原因については明らかでないが、鳴門（徳島）にLFがあらわれないうこととの関係も合わせて検討する必要がある。

なお、明石では中年層までLFが聞かれるが、若年層にはLLしかあらわれないう。淡路島の多くの地域と共通する傾向を示した。

3.4 各結果のまとめ

ここまでは個別の調査結果について確認した。表2から表5に示した数値のうち、〈第4

類+助詞)に変化後の LH-L のあらわれた数、また〈第5類単独形〉〈第5類+低起式〉〈第5類+高起式〉に変化後の LH または LL のあらわれた数をパーセンテージに直して示すと次の表6のようになる。〈第5類+高起式〉の場合は LF でないアクセント (LH と LL) を合算して示した。なお、このパーセンテージを以下では「進行率」と呼ぶことにする。

地域	明石			岩屋			富島			郡家			洲本		
年齢層	高2	中2	若2	高2	中2	若2	高2	中2	若2	高2	中2	若2	高3	中3	若2
第4類+助詞	33%	50%	100%	0%	0%	71%	0%	0%	33%	0%	17%	88%	0%	53%	100%
第5類単独形	33%	8%	83%	4%	25%	79%	8%	25%	79%	0%	29%	100%	11%	67%	100%
第5類+低起式	83%	100%	100%	50%	67%	100%	50%	67%	100%	83%	100%	100%	89%	100%	100%
第5類+高起式	0%	0%	100%	33%	17%	67%	17%	17%	50%	0%	0%	83%	0%	11%	100%
地域	由良			津井			福良			鳴門					
年齢層	高2	中2	若2	高2	中2	若2	高2	中2	若2	高2	中2	若2			
第4類+助詞	0%	0%	75%	0%	0%	58%	0%	4%	0%	0%	0%	58%			
第5類単独形	0%	4%	63%	0%	0%	71%	17%	29%	29%	96%	96%	100%			
第5類+低起式	67%	83%	100%	83%	83%	100%	67%	33%	33%	100%	100%	100%			
第5類+高起式	17%	33%	67%	50%	17%	83%	50%	50%	67%	100%	100%	100%			

表6. 変化の傾向差(%)

これを見ると、全体として年齢層が下がるにしたがって変化した後のアクセントが多くなることがわかる。ただし、すべてが同じパーセンテージになるわけではなく、たとえば岩屋の若年層においては〈第5類+低起式〉の進行率が他よりも高い。また、福良の若年層においては〈第5類+高起式〉の進行率が他よりも高くなっており、地域差の存することがうかがえる。そこで、次の第4項で進行率の世代差と地域差について検討することにする。

4. 変化傾向の違い

両類の合同傾向について考える際、とくに問題となるのは第5類の語における下降の有無である。第4項ではこれまで述べてきたアクセント調査の結果を改めてまとめ、淡路島における両類の合同傾向の地域差について指摘する。その際、田原・村中(2000)のまとめた「統合の道筋」と比較する形で述べてみたい。

4.1 進行率の地域差と世代差

先に示した表6から、進行率のあらわれ方が一律ではないということがわかった。そこで、各地域・年齢層の進行率についてまとめておきたい。

まず高年層については、鳴門以外の地域で〈第5類+低起式〉の進行率をもっとも高く、そのうちの岩屋・富島・由良・津井・福良においては〈第5類+低起式〉に次いで〈第5類+高起式〉の進行率が高いということがわかる。一方、明石では〈第5類+高起式〉の進行率が0%であり、他の地域と異なる傾向にある様子がうかがえる。また、鳴門においては第5類の下降はどの状況でもほとんどあらわれないが、〈第4類+助詞〉のアクセントに LH-L は聞かれない。

次に、中年層についてみると、明石・郡家・洲本において〈第5類+低起式〉の進行率が100%になっている。そのほかの地域においても、高年層より中年層の進行率が高くなっていることがわかり、それは〈第4類+助詞〉〈第5類単独形〉〈第5類高起式〉に

においても同様である。ただし、福良では〈第5類+低起式〉の進行率が高年層より低く、明石においても〈第5類単独形〉の進行率は高年層より中年層のほうが低い。また、岩屋と津井では〈第5類+高起式〉の進行率が高年層より低い。若年層の結果と合わせると、明石・岩屋・津井については中年層の結果が、また福良については高年層の結果が何らかの理由で変則的なものになったと考えられる。

若年層については、洲本ですべての進行率が100%となっており、明石や郡家もそれに近い。他の地域においても、進行率が60%を超える傾向にあることがわかる。その中で、富島の〈第4類+助詞〉と〈第5類+低起式〉、福良の〈第4類+助詞〉と〈第5類単独形〉と〈第5類+低起式〉の進行率が低いといえよう。

4.2 変化の傾向

1.2.2 であげた田原・村中（2000）の「統合の道筋」は、次のようなものであった。

- 1) V類の伝統型 a が主流（50代以上）
- 2) V類の伝統型 a が減少、変わって伝統型 b が増加する（40代）
- 3) V類の伝統型 a がなくなり、伝統型 b が減少、伝統型 c に移行する、同時に統合型が現れる。同時に中間型も存在する。IV類の統合型が現れ始める（30代）
- 4) V類の統合型が圧倒的主流になる。IV類の統合型が一気に増え半数を超える（20代）

これをまとめると、次のようになる。

I 〈第5類+低起式〉 > 〈第5類単独形〉 > 〈第5類+高起式〉 > 〈第4類+助詞〉

すなわち、〈第5類+低起式〉の変化がもつともはやく、その後に〈第5類単独形〉、〈第5類+高起式〉が変化しはじめ、それに少し後れる形で〈第4類+助詞〉の変化がはじまるということである。

4.2.1 第5類の変化傾向

上記をふまえて、調査した各地域における進行率のあらわれ方についてパーセンテージが高いほど変化がはやいと仮定すると、第5類のアクセント変化は次の三つのパターンに分けられる。

- A. 〈第5類+低起式〉 > 〈第5類単独形〉 > 〈第5類+高起式〉
- B. 〈第5類+低起式〉 > 〈第5類+高起式〉 > 〈第5類単独形〉
- C. 〈第5類+高起式〉 > 〈第5類+低起式〉 > 〈第5類単独形〉

地域	明石	岩屋	富島	郡家	洲本	由良	津井	福良	鳴門
第4類+助詞	61%	24%	11%	35%	51%	25%	19%	1%	19%
第5類単独形	42%	36%	38%	43%	59%	22%	24%	25%	97%
第5類+低起式	94%	72%	72%	94%	96%	83%	89%	44%	100%
第5類+高起式	33%	39%	28%	28%	37%	39%	50%	56%	100%

表7. 進行率の地域差

地域ごとの進行率を示した表7を用いて分類すると、Aにあてはまるのが明石・富島・郡家・洲本であり、Bにあてはまるのが由良・津井、Cにあてはまるのが福良である。鳴門は判断がつかず、岩屋は〈第5類単独形〉と〈第5類+高起式〉のパーセンテージが近いいため保留とする。

このうち、Aは田原・村中(2000)のまとめた「統合の道筋」と一致する。Bとした由良・津井と岩屋は低起式述語後接形の進行率をもっとも高く、単独形の進行率をもっとも低いという傾向をもっている。また、福良は明らかにA・Bとは異なった傾向を示しており、もっとも進行率の高いのが〈第5類+高起式〉である点、特徴的である。〈第5類単独形〉と〈第5類+高起式〉の数値に近い岩屋を除外すれば大きく分けて南北で傾向が異なっており、さらに南部の中でも福良は他の地域とは違いがみられるといえよう。

ただし、先に示した表6をもとに分類すると、上記とは異なる様相が見えてくる。たとえば、高年層の結果ではBとなる地域が圧倒的に多く、Aのパターンを示すのは淡路島内の地域では洲本のみである(明石と共通)。また、福良もCではなくBとなる。また、中年層では岩屋・富島・郡家・洲本がA、由良と津井がB、福良がCとなり、若年層でも同じような傾向を示す(郡家と洲本、明石では進行率がほぼ100%)。

岩屋と福良においては高年層より中年層のほうが低い値を示す不自然な結果となったところがあり、それによってパターンの変動が生じていることがわかる。ただし、若年層と中年層とが共通した傾向を示している点をふまえると、全体的に福良はやはり表7に示したような傾向であるということができよう。そして岩屋は、他の北部地域と同様にAへ分類できる。つまり、北部は明石、あるいは田原・村中(2000)の調査した東大阪市と一致する傾向を持つ。

なお、鳴門はLFがほとんどあられないためA・B・Cのうちどのパターンに当てはまるのかははっきりしないが、単独形にわずかながら拍内下降を伴った発音が聞かれることがある。このことから、淡路島南部と鳴門は共通の傾向をもつのではないかと考えられる。

4.2.2 第4類の変化傾向

表7によれば、〈第4類+助詞〉の進行率は第5類のそれに比べるとおおむね低い傾向にあり、表6における年齢層別の進行率から、高・中年層の進行率が全体的に低いことが関係しているとわかる。すなわち、〈第4類+助詞〉のアクセント変化は第5類のアクセント変化に遅れて生じたと考えることができる。どの段階で始まったのかについては必ずしも明らかでないが、第5類と同様にパーセンテージが高いほど変化がはやいと仮定して、先に示

した A・B・C という変化パターンと合わせて考えることにする。

まず、先ほど A に分類したうちの岩屋・富島では〈第 5 類+高起式〉より〈第 4 類+助詞〉の進行率が低く、B に分類したうちの津井では〈第 5 類単独形〉より〈第 4 類+助詞〉の進行率が低い。ただし、同じく B に分類した由良においては〈第 4 類+助詞〉の進行率がわずかに高いという結果である。また、A の明石・郡家・洲本においては〈第 4 類+助詞〉の進行率が〈第 5 類+高起式〉の進行率より高くなっており、特に明石においては〈第 5 類+低起式〉の進行率に次いで高いことから、他の地域とは異なる様相を示すといえる。そのほか、福良では〈第 4 類+助詞〉のアクセントはほとんど変化しておらず、鳴門では津井と同じ進行率を示した。

そして、先の分類に上記の〈第 4 類+助詞〉の進行率を加えると、次のようになる。

- A1. 〈第 5 類+低起式〉 > 〈第 5 類単独形〉 > 〈第 5 類+高起式〉 > 〈第 4 類+助詞〉
- A2. 〈第 5 類+低起式〉 > 〈第 5 類単独形〉 > 〈第 4 類+助詞〉 > 〈第 5 類+高起式〉
- A3. 〈第 5 類+低起式〉 > 〈第 4 類+助詞〉 > 〈第 5 類単独形〉 > 〈第 5 類+高起式〉
- B1. 〈第 5 類+低起式〉 > 〈第 5 類+高起式〉 > 〈第 5 類単独形〉 > 〈第 4 類+助詞〉
- B2. 〈第 5 類+低起式〉 > 〈第 5 類+高起式〉 > 〈第 4 類+助詞〉 > 〈第 5 類単独形〉
- C. 〈第 5 類+高起式〉 > 〈第 5 類+低起式〉 > 〈第 5 類単独形〉 > 〈第 4 類+助詞〉

岩屋・富島は A1、郡家・洲本は A2、明石は A3 にあてはまり、津井は B1、由良は B2、福良は C にあてはまることになる。それでは、このように分かれる理由として何が考えられるであろうか。次で検討する。

4.3 傾向の違いとその理由

1.2.1 で述べたように、二拍名詞第 4 類と 5 類の変化の要因について岸江 (1990) など多くの先行研究では、第 5 類が LF から LH へ変化し、その後に第 4 類が変化し始めたとされている。また、岸江・村田 (2012) は「第 4 類と第 5 類の統合の発生について大阪市内での内的要因による変化、つまり第 5 類の拍内下降の消失および第 4 類の LHL への類推変化がまず起こり、それが近畿周辺部まで拡散したと解釈する」という立場を取る。そして、田原・村中 (2000) では東大阪市における調査結果を用いて「統合の道筋」が示されている。すなわち、「I 〈第 5 類+低起式〉 > 〈第 5 類単独形〉 > 〈第 5 類+高起式〉 > 〈第 4 類+助詞〉」である。

本節でこれまでみてきた地域は「近畿周辺部」にあたるため、岸江・村田 (2000) の述べるように中央部から伝わって変化が生じた可能性を考慮する必要があるが、仮にそのように捉えたとすれば、田原・村中 (2000) が示した「統合の道筋」と異なる順序で変化する理由について説明がつくであろう。その場合、中央部において変化がある程度進んだところでその影響をうけたために、変化する順序に地域差がみられたということになる。中

中央部と地理的な距離が近い地域が A1～A3 のような変化を示すのも、それと関連する可能性があるといえよう。ただし、明石は岩屋・富島より地理的には中央部に近いが、〈第 4 類+助詞〉の変化が比較的早くに生じている。このことから、単純な地図上の距離だけでなく、「心理的距離」⁷ のようなものについても考慮する必要があるし、「内的要因」による変化の可能性も排除することはできない。

また、異なる順序であっても第 4 類のアクセント変化が第 5 類に後れて生じる点が共通していたことから、先行研究で述べられているように第 4 類の変化は第 5 類の変化に連動している可能性は大きいといえる。ただし、鳴門においては他の地域に比べて早い段階で第 5 類の下降を失っており⁸、〈第 4 類+助詞〉に LH-L があらわれるのは若年層以下であることから、両類の変化が必ずしも連続して生じているわけではない点に注意する必要がある。

5. おわりに

本節では、淡路島方言アクセントにおける二拍名詞第 4 類と第 5 類の合同傾向について述べた。そのなかで、〈第 4 類+助詞〉、〈第 5 類単独形〉、〈第 5 類+低起式〉〈第 5 類+高起式〉のアクセントについての調査結果を比較したところ、次のような六つの変化過程を示すことがわかった。

- A1. 〈第 5 類+低起式〉 > 〈第 5 類単独形〉 > 〈第 5 類+高起式〉 > 〈第 4 類+助詞〉
- A2. 〈第 5 類+低起式〉 > 〈第 5 類単独形〉 > 〈第 4 類+助詞〉 > 〈第 5 類+高起式〉
- A3. 〈第 5 類+低起式〉 > 〈第 4 類+助詞〉 > 〈第 5 類単独形〉 > 〈第 5 類+高起式〉
- B1. 〈第 5 類+低起式〉 > 〈第 5 類+高起式〉 > 〈第 5 類単独形〉 > 〈第 4 類+助詞〉
- B2. 〈第 5 類+低起式〉 > 〈第 5 類+高起式〉 > 〈第 4 類+助詞〉 > 〈第 5 類単独形〉
- C. 〈第 5 類+高起式〉 > 〈第 5 類+低起式〉 > 〈第 5 類単独形〉 > 〈第 4 類+助詞〉

この理由については必ずしも明らかでないが、先行研究の記述と合わせて中央部から伝わって変化が生じた可能性があると考えた。また、第 5 類と第 4 類のアクセント変化はおおむね連動して起こるとした。ただし、一部の地域においては両類の変化の時期が連続しているとはいいがたい様相であった。そのため、とくに〈第 4 類+助詞〉のアクセント変化には、次のような可能性をあわせて考える必要がある。

1. 東京式アクセントとの関係（第 4 類・第 5 類が同じアクセントとなる）
2. 他のアクセントに変化しにくい型の存在（安定性のあるアクセント：LH-L はそれにあたるか）
3. 〈第 4 類+高起式〉や〈第 4 類+低起式〉のアクセントとの関係

これらについては、今後さらに検討したい。

【注】

- 1 中井幸比古 (2002ab)、佐藤栄作 (1989) 編などをもとに筆者が作成した。
- 2 そのほかの先行研究においても、二拍名詞第 4・5 類のアクセント変化について述べる際にこれらの形は共通して重要視されている。本節でもそれに従い、第 4 類は助詞が続く場合のアクセントを、第 5 類は単独形と高起式・低起式述語が続く場合のアクセントを問題とする。
- 3 田原・村中 (2000) において、第 5 類の「中間型」が実際には段階的に上昇しているような音調、LM-H… (M は L と H の中間の高さをあらわす) で聞こえることもあったという。また、「LH・H」と聞こえる場合でも、名詞の 2 拍目と述語の 1 拍目との間にごく短いポーズ、あるいはグロッタルストップが聞かれることもあるとしている。一方で、郡 (2011) に述べられている名詞にフォーカスを置いたときの LH-H…は、述語の 1 拍目とその直前にある名詞の 2 拍目より一段下がって発音されるものであり、これを「b」で表記している。本節で用いる調査結果にあらわれた LH-H…も比較的若い世代に聞かれることが多く、述語の 1 拍目が名詞の 2 拍目より低く発音される傾向にあった。その点では郡 (2011) と共通しているといえよう。
- 4 本節では男女差については特に問題としない。岸江信介 (1997) や田原広史・村中淑子 (2000) において第 4 類と第 5 類の「標準語型」(HL) への移行は女性の割合が高いとされているが、淡路島内において「標準語型」がきかれないため、またこれまで調査した中で同地域・同年齢層の男女にアクセントの違いがあまりないためである。
- 5 第 5 類+助詞のアクセントはさらに遡れば LF-L であった可能性が考えられるが、今回の調査では聞かれなかった。
- 6 福良では、中年層一人の「針をさす」に LH-L があらわれた。また、2009～2010 年に「第 4 類+助詞+述語」の形で 10 語について調査した際、語によっては福良の若年層に LH-L があらわれることがあったため、LH-L というアクセントがまったくあらわれないうわけではない。
- 7 社会言語学において「言語意識」の調査をおこなうことがある。その際、「あなたは (共通語、中央部の方言) が好きですか、嫌いですか」という質問をし、その回答によって「心理的距離」を計る (言語編集部 1995 など)。「心理的距離」が近ければその方言の影響を受けやすく、遠ければ受けにくいと考えることができ、アクセント変化にも関係する可能性がある。
- 8 ただし、どの時点で第 5 類の下降が失われたのか、あるいは古くから下降があらわれにくい地域であったのかなどについては明らかでない。

第2節 三拍名詞第2類・第4類のアクセント変化

1. はじめに

1.1 本節の目的

京阪式アクセントの諸地域において、三拍名詞のアクセントは第1類（魚など）のHHH型、第2類（小豆など）と第4類（光など）のHHL型、第3類（力など）と第5類（命など）のHLL型、第6類（鳥など）のLLH型、第7類（苺など）のLHL型という5種類に分けることができる（表1参照）。

しかし、これらのうちとくに第2類・第4類という従来 HHL 型で発音されていた語の多くが、第3類・第5類と同一の HLL 型や第7類と同一の LHL 型など、様々に変化する動きをみせることが以下の先行研究で指摘されている。本節はこれらの先行研究をふまえて、筆者がおこなった調査の結果から三拍名詞第2類・第4類のアクセント変化について考察するものである。

類別	語例	単独形	助詞接続
1類	形魚	HHH	HHH-H
2類	小豆	HHL	HHL-L
3類	力	HLL	HLL-L
4類	頭光	HHL	HHL-L
5類	命心	HLL	HLL-L
6類	鳥兔	LLH	LLL-H
7類	苺薬	LHL	LHL-L

表1. 三拍名詞アクセント

1.2 先行研究

三拍名詞第2類・第4類のアクセントについて述べた先行研究は数多く存在する。

たとえば、楳垣実（1957）は大阪市内の中学生に対して調査をおこない、その結果から三拍名詞アクセントの変化について、主に HHL から HLL になるもの（タカラ、ヒカリなど）と HHL から LHL になるもの（カタナ、イタチなど）という二つのパターンがあることを指摘した。ただし、なかには様々な傾向を示す語もあり、HHL から HLL という「基本線に同化されて安定するならば、問題ではない」が、そうでない可能性もあるため「この変化の傾向はもっと詳しく調べておかなければならない」と述べている。

また、都染直也（1987）は兵庫県姫路市の形町のアクセントについて述べたものであるが、HHL 型が「もっとも変化した（している）型（ゆれやすい型）」であり、年齢が下がるにしたがって HLL 型をはじめとした様々な型へ変化しているとする。

一方、村中叔子（2005）は、東大阪市でおこなった計 106 人の生え抜き話者に対する三拍名詞のアクセント調査の結果から、従来 HHL 型で発音されていた語については三つの変化過程があると指摘した。すなわち、1. HHL→HLL→LHL という順で変化するもの（カタナ、アズキ、アタマなど）、2. HHL→HLL となるもの（ムスメ、オトコなど）、3. HHL→LHL となるもの（枝毛、詐欺師）である。このうち1と2の違いが生じる原因などについて、調査語彙を増やすなどして検討すべきだとしている。

そのほか、田原広史・中上愛（1999）は大阪府下5世代44名に対して調査をおこなっており、LHL への動きがみられたのはアズキ・アタマ・カガミ・フクロなど、HLL への動きが

みられたのはオトコなどだと述べる。ただし、アズキについては HHH も聞かれ、4つのアクセント型 (HHL、HLL、LHL、HHH) が混在する状態であるという。

これらの先行研究で示される HHL 型から HLL 型への変化は、H2 型の H1 型への統合によるものであり、名詞に限らず動詞や形容詞においても同時代的にみられる変化である。また、HHL 型から LHL 型への変化は語頭のアクセントが低下することによるものであり、アクセントのさがる位置は変わらない。

上に掲げた先行研究はすべて現代語のアクセントについて調査をおこなったものであるが、上野和昭 (2011) などでは、すでに近世期において数は少ないながらも第 2 類・第 4 類相当に LHL 型 (後ろ・舎人) や HHH 型 (タカラなど) で発音された語の存在することが指摘されており、この変化が現代に限って生じているものではないことがわかる。つまり、三拍名詞第 2 類・第 4 類の HHL 型は古くから、都染 (1987) などと言われるように「ゆれやすい型」だったのだといえよう。本節では、それを念頭に置きながら、三拍名詞第 2 類・第 4 類のアクセント変化について考えてみたい。

2. 使用するデータについて

本節で使用する調査結果は、淡路島内の岩屋・富島・郡家・洲本・由良・津井・福良と鳴門、明石、大阪府岸和田市春木・岬町深日と和歌山県和歌山市加太・橋本市恋野、および高知における調査によって得られたものである。調査人数は以下のとおりである。

岩屋：高年層 5 人・中年層 6 人・若年層 3 人

富島・郡家・由良・津井・福良：高年層 2 人・中年層 2 人・若年層 2 人

洲本：高年層 3 人・中年層 3 人・若年層 2 人

明石・鳴門：高年層 2 人・中年層 2 人・若年層 2 人

春木：高年層 1 人・中年層 2 人・若年層 2 人

深日：高年層 3 人・中年層 3 人・若年層 2 人

恋野：高年層 3 人・中年層 2 人・若年層 2 人

加太：高年層 2 人・中年層 1 人・若年層 1 人

高知：高年層 3 人・中年層 4 人・若年層 5 人

2011 年から 2016 年にかけて現地を訪れたが、岩屋・福良・深日・高知においては複数回、異なる調査票を用いて調査をおこなった。

調査項目は、すべての地域に共通して、三拍名詞第 2 類「アズキ・二人 (フタリ)・娘」と第 4 類「頭 (アタマ)・刀・宝」¹ の計 6 語² とした。その後、それに加えて高知では三拍名詞第 2 類「女・扉・毛抜き・二つ」と第 4 類「青菜・余り・生け簀・泉・イタチ・五日・扇・男・鏡・敵 (カタキ)・クルミ・獣・サザエ・備え・つづり・願い・ハサミ・光・二重 (フタエ)・袋・仏・わらび」の計 26 語を、岩屋・福良・深日では第 2 類「女・扉」、第 4 類「青菜・余り・生け簀・泉・イタチ・五日・扇・鏡・敵 (カタキ)・クルミ・獣・サザエ・備え・つづり・願い・袋・仏・わらび」の計 21 語について調査をおこなった。

3. 全体の傾向

ここでは地域と年齢層に着目し、三拍名詞第2類・第4類の語のアクセントについて、全体としてどのような傾向がみられるかということを確認する。

	岩屋			富島			郡家			洲本			由良			津井			福良		
	高5	中6	若3	高2	中2	若2	高2	中2	若2	高3	中3	若2	高2	中2	若2	高2	中2	若2	高2	中2	若2
HHL	31	29	24	8	7	5	5	2	4	12	12	9	10	10	8	10	10	7	29	26	18
HHH	20	37	21	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	9	14	19
LHL	15	20	22	2	3	3	1	2	4	6	6	3	2	2	4	0	1	3	9	6	13
HLL	9	10	2	2	2	3	5	8	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	8	4
LLH	0	0	6	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	1	0	0
計	75	96	75	12	12	12	12	12	12	18	18	12	12	12	12	12	12	12	54	54	54
	明石			鳴門			春木			深日			恋野			加太			高知		
	高2	中2	若2	高2	中2	若2	高1	中2	若2	高3	中3	若2	高3	中2	若2	高2	中1	若1	高3	中4	若5
HHL	9	8	6	9	8	6	1	2	2	26	21	10	0	0	0	10	4	4	29	48	32
HHH	0	0	2	0	0	0	0	0	0	17	16	14	0	0	2	0	1	1	11	16	29
LHL	2	4	4	3	4	6	1	2	2	7	8	15	3	2	2	2	1	1	11	18	23
HLL	1	0	0	0	0	0	3	6	6	6	11	4	12	8	6	0	0	0	6	5	7
LLH	0	0	0	0	0	0	1	2	2	4	4	5	3	2	2	0	0	0	2	2	2
計	12	12	12	12	12	12	6	12	12	60	60	48	18	12	12	12	6	6	59	89	93

表2. 地域・年齢層別のアクセント

表2は、三拍名詞のアクセントとして聞かれるHHL・HHH・LHL・HLL・LLHという五つの型が、それぞれ第2類・第4類の語にどの程度あらわれるのかについて、地域・年齢層別にまとめたものである。年齢層を示す「高・中・若」の後ろには、それぞれの調査人数を記した。これを見ると、春木・恋野以外の地域においてはHHLが比較的多くあらわれることがわかる。とくに、洲本・由良・津井では、いずれの年齢層にもHHLの多いことが共通しており、約7割から8割がHHLで発音される。このほか、富島や明石、鳴門、加太にも同様のことがいえる。また、調査した語数の多い岩屋や福良、深日、高知においても高・中年層にはHHLが多いといえるが、一方で、おおむねどの地域においても、年齢層が下がるにしたがってHHL以外の型が増える傾向にある。

HHL以外のアクセントとしては、郡家や春木・恋野において比較的HLLが多く、その他の地域においてはLHLも多くあらわれる。これら二つの型があらわれるという点は、先行研究と共通している。ただし、調査した語数の多い岩屋・福良・深日・高知とその他の地域の若年層においてはHHHがあらわれる傾向がみられ、楳垣(1957)や都染(1987)の指摘どおり、また田原・中上(1999)における「アズキ」のように、複数の型が混在している語のあることが示唆される。

全体の傾向として、第2類・第4類の語はHHHやLHL、HLLへと移り変わる様子がみられるが、すべての地域が必ずしも同じ方向へ動くわけではないということがいえる。また、「アズキ、フタリ、ムスメ、アタマ、カタナ、タカラ」という6語を調査した場合と、それ以外の語を調査した場合とで、結果に違いがみられる。たとえば、深日で6語のアクセントを調査すると、高・中年層においては約7割がHHLであるという結果になるが、それ以外の語を加えると表2に示したようにHHLで発音される数は約4割になる。このことから、語によ

って傾向が異なるという可能性が考えられる。そこで、第4項では語によるアクセントの違いを確認する。

4. 語による傾向の違い

アズキ	岩屋	富島	郡家	洲本	由良	津井	福良	明石	鳴門	春木	深日	恋野	加太	高知
HHL	2	2	1	8	6	4	5	4	2	0	7	0	4	0
HHH	0	1	0	0	0	2	1	2	0	0	0	2	0	2
LHL	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	6
HLL	4	3	5	0	0	0	0	0	0	5	0	5	0	0
LLH	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
フタリ	岩屋	富島	郡家	洲本	由良	津井	福良	明石	鳴門	春木	深日	恋野	加太	高知
HHL	4	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	7
HHH	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0
LHL	2	6	5	8	6	3	5	5	6	0	1	0	0	1
HLL	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
LLH	0	0	1	0	0	3	1	0	0	5	5	7	0	0
ムスメ	岩屋	富島	郡家	洲本	由良	津井	福良	明石	鳴門	春木	深日	恋野	加太	高知
HHL	6	6	5	8	6	6	6	6	6	5	7	0	4	8
HHH	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
LHL	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
HLL	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0
LLH	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
アタマ	岩屋	富島	郡家	洲本	由良	津井	福良	明石	鳴門	春木	深日	恋野	加太	高知
HHL	5	5	1	8	6	6	6	6	6	0	7	0	4	8
HHH	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
LHL	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
HLL	1	1	5	0	0	0	0	0	0	5	0	7	0	0
LLH	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
カタナ	岩屋	富島	郡家	洲本	由良	津井	福良	明石	鳴門	春木	深日	恋野	加太	高知
HHL	2	1	2	1	4	5	5	1	3	0	6	0	0	1
HHH	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
LHL	4	2	2	7	2	1	1	5	3	5	1	7	4	7
HLL	0	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
LLH	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
タカラ	岩屋	富島	郡家	洲本	由良	津井	福良	明石	鳴門	春木	深日	恋野	加太	高知
HHL	6	6	2	8	6	6	6	5	6	0	7	0	4	7
HHH	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
LHL	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
HLL	0	0	4	0	0	0	0	1	0	5	0	7	0	1
LLH	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

表3. 語・地域別の結果1

本項では、あらわれやすいアクセント型によって語を分類する。表3には、「アズキ・フタリ・ムスメ・アタマ・カタナ・タカラ」の6語について、どのアクセントがあらわれたのかを地域ごとに示した。また、表4に「オンナ・トビラ・アオナ・アマリ・イケス・イズミ・イタチ・イツカ・オーギ・カガミ・カタキ・クルミ・ケモノ・サザエ・ソナエ・ツツリ・ネガイ・フクロ・ホトケ・ワラビ」についての結果をまとめた。表5には、上記に含まれない、

オンナ	深日	岩屋	福良	高知	トビラ	深日	岩屋	福良	高知	フタツ	深日	岩屋	福良	高知
HHL	6	8	3	13	HHL	0	0	2	0	HHL	0	7	0	5
HHH	0	0	0	0	HHH	3	6	1	6	HHH	0	0	0	0
LHL	0	0	0	0	LHL	0	1	1	1	LHL	6	1	3	0
HLL	0	0	0	0	HLL	3	1	1	6	HLL	0	0	0	0
LLH	0	0	0	0	LLH	0	0	0	0	LLH	0	0	0	0
アオナ	深日	岩屋	福良	高知	アマリ	深日	岩屋	福良	高知	イクス	深日	岩屋	福良	高知
HHL	0	0	0	2	HHL	0	6	0	2	HHL	0	1	1	0
HHH	3	5	1	1	HHH	0	0	1	0	HHH	5	7	2	3
LHL	0	1	0	0	LHL	5	0	2	3	LHL	0	0	0	0
HLL	0	1	2	1	HLL	1	0	0	0	HLL	0	0	0	2
LLH	3	1	0	1	LLH	0	0	0	0	LLH	1	0	0	0
イズミ	深日	岩屋	福良	高知	イタチ	深日	岩屋	福良	高知	イツカ	深日	岩屋	福良	高知
HHL	2	0	0	0	HHL	0	0	1	0	HHL	0	0	0	4
HHH	2	6	1	5	HHH	4	1	1	2	HHH	6	8	3	9
LHL	0	1	1	0	LHL	2	7	1	3	LHL	0	0	0	0
HLL	2	1	1	0	HLL	0	0	0	0	HLL	0	0	0	0
LLH	0	0	0	0	LLH	0	0	0	0	LLH	0	0	0	0
オーギ	深日	岩屋	福良	高知	カガミ	深日	岩屋	福良	高知	カタキ	深日	岩屋	福良	高知
HHL	0	0	0	1	HHL	3	7	3	8	HHL	4	7	3	5
HHH	1	3	3	6	HHH	0	0	0	0	HHH	1	1	0	0
LHL	0	0	0	0	LHL	3	1	0	5	LHL	1	0	0	0
HLL	3	4	0	3	HLL	0	0	0	0	HLL	0	0	0	0
LLH	2	1	0	3	LLH	0	0	0	0	LLH	0	0	0	0
クルミ	深日	岩屋	福良	高知	ケモノ	深日	岩屋	福良	高知	サザエ	深日	岩屋	福良	高知
HHL	0	0	2	0	HHL	1	0	0	3	HHL	0	0	1	1
HHH	6	8	1	13	HHH	4	8	3	2	HHH	0	0	0	0
LHL	0	0	0	0	LHL	0	0	0	0	LHL	6	5	1	0
HLL	0	0	0	0	HLL	0	0	0	0	HLL	0	3	1	4
LLH	0	0	0	0	LLH	1	0	0	0	LLH	0	0	0	0
ソナエ	深日	岩屋	福良	高知	ツヅリ	深日	岩屋	福良	高知	ネガイ	深日	岩屋	福良	高知
HHL	3	2	0	4	HHL	1	1	2	4	HHL	6	8	3	4
HHH	3	5	2	0	HHH	3	0	0	1	HHH	0	0	0	0
LHL	0	1	1	1	LHL	2	7	1	0	LHL	0	0	0	1
HLL	0	0	0	0	HLL	0	0	0	0	HLL	0	0	0	0
LLH	0	0	0	0	LLH	0	0	0	0	LLH	0	0	0	0
フクロ	深日	岩屋	福良	高知	ホトケ	深日	岩屋	福良	高知	ワラビ	深日	岩屋	福良	高知
HHL	3	4	3	1	HHL	1	2	0	0	HHL	1	0	0	0
HHH	0	0	0	0	HHH	5	6	3	5	HHH	0	0	0	0
LHL	3	4	0	4	LHL	0	0	0	0	LHL	1	3	0	2
HLL	0	0	0	0	HLL	0	0	0	0	HLL	4	5	3	3
LLH	0	0	0	0	LLH	0	0	0	0	LLH	0	0	0	0

表4. 語・地域別の結果2

高知においてのみ調査をおこなった語について示した。これらの語が HHL 以外のどの型へ変化しているのか、変化していくのかについて、以下で考察をおこなう。その際、中井幸比古 (2002ab) などの先行研究における京都アクセント (以下、「京都アクセント」と呼ぶ) や、筆者がおこなった京都の中年層 1 名 (以下、「京都中年層」と呼ぶ) に対する調査の結

果を基準とし、それとの比較をおこないながら傾向の違いを見ることにする。

なお、高知市でしか調査していない語を除き、一つの地域の1名にのみあらわれたアクセントについてはひとまず数えない。

ケヌキ		オトコ			
HHL	6	HHL	8		
HHH	0	HHH	0		
LHL	1	LHL	0		
HLL	0	HLL	0		
LLH	1	LLH	0		
ハサミ		ヒカリ		フタエ	
HHL	0	HHL	8	HHL	0
HHH	0	HHH	0	HHH	0
LHL	8	LHL	0	LHL	8
HLL	0	HLL	0	HLL	0
LLH	0	LLH	0	LLH	0

表5. 高知における語ごとの調査結果

4.1. HLLが多い語

まず、HLLがあらわれる語についてみてみたい。

表3をみると、アズキ・ムスメ・アタマ・カタナ・タカラにHLLがあらわれていることがわかる。

ただし地域差が存在しており、アズキは岩屋・富島・郡家・恋野、ムスメは恋野、アタマは郡家・春木・恋野、カタナは富島・郡家、タカラは郡家・春木・恋野において比較的多くHLLで発音される傾向にある。このうち、アズキには複数のアクセント型が聞かれることから地域や世代によって傾向が異なると考えられ、カタナは富島・郡家を除く地域でLHLが多い。この二つを除く語についても、必ずしも若い世代にHLLが多くあらわれるわけではないが、もともとがHHLだとすると、HHLからHLLへ変化するものと想定される。高知市においては、アズキ・ムスメ・アタマ・カタナ・タカラにはHHLがもっとも多くHLLはほとんど聞かれない。表4に示したトビラにはHLLがあらわれることがある。ただし、この語にはHHHなども聞かれることがあるため、ここではひとまず除外する。

また、上記と京都アクセントとを比較すると、アタマにはHLLが多いがLHLがあらわれることもある。また、京都中年層においてもアタマはLHLであった。そのため、筆者による調査結果と完全に一致するとはいえないが、ここではHHLからHLLへ変化する語として、ムスメ・アタマ・タカラがあると考えことにする。

4.2. LHLが多い語

次に、LHLがあらわれる語について、あてはまるのは表3のアズキ・フタリ・カタナと表4のフタツ・アマリ・イタチ・カガミ・サザエ・ツヅリ、表5のハサミ・フタエである。ただし、これらも他のアクセントであらわれることがあり、カタナ・アズキやイタチ・サザエ・ツヅリにはLHLではないものが聞かれる。特に、アズキ・イタチ・サザエ・ツヅリのアクセントには、地域差のほかに世代差も関係すると考えられる。

一方で、高知市において調査したハサミ・フタエにはLHL以外があらわれず、フタツ・アマリ・カガミ・フクロも地域によって程度差はあるものの、おおむねLHLで落ち着くと考えてよさそうである。また、フタリは名詞のほかに副詞的な用いられ方をすることがあり、HHHやLLHはその影響であろうと考えられる。これらの語について、京都アクセントではフタエ・フタツにHLLのあらわれることがあり、アマリ・カガミ・フクロにはHLLが多い。ま

た、京都中年層はフタツ・アマリが LHL、カガミ・フクロが HLL であったため、一致しないものもある。

4.3. HHH が多い語

HHH があらわれるのは、表 3 のアズキ、表 4 のトビラ・アオナ・イケス・イズミ・イタチ・イツカ・オーギ・カタキ・クルミ・ケモノ・ソナエ・ツヅリ・ホトケである。このうち、イケス・イツカ・クルミ・ケモノ・ホトケについては、HHH へ変化する語としてとらえてよいであろう。そのほかの語については違いがみられるが、オーギは福良において HHH が多いといえそうである。

京都アクセントでは、ケモノに HLL が多く、クルミには HLL のほか LLH や HHH 型があらわれ、イケス・ホトケも HLL のほか HHH があらわれるという。イツカについては、基本的に HLL が多いようだが、副詞的に用いる際には HHH になるとしている。筆者の調査においては名詞として用いられる場合について調査したが、副詞的なアクセントの影響をうけて HHH になったと考えることもできる。京都中年層においてはケモノ・クルミ・ホトケがいずれも HHH であり、イツカは HLL であった。

4.4. LLH が多い語

調査した語のうちで LLH があらわれるのは、フタリ・オーギ・アオナである。フタリについてはすでに述べたとおりである。アオナのアクセントは、深日・岩屋・高知において LLH の聞かれることがあった。HHH と LLH は高起式と低起式という違いがあるものの、語の内部で下がらないという点では共通しており、LLH は HHH の強調型であるとも捉えられる。同じ地域にあらわれることがあるのはその特徴によるもので、両者には揺れが生じやすいものと考えることができる。オーギには HLL もあらわれるが、HHH と LLH とが同一地域に聞かれることは、アオナと同じ理由によるといえよう。

なお、オーギは京都アクセントにおいても京都中年層においても HLL である。アオナは京都アクセントにおいて HLL が多いが一部に LHL があらわれ、京都中年層においては LLH であった。

4.5. HHL が多い語

表 4 をみると、オンナとネガイにはほとんど HHL しかあらわれていないことがわかる。これらはいずれも京都アクセント・京都中年層において HLL で発音される。他の語の傾向からしても、いずれは HLL など別の型が多くなるものと考えられるが、たとえばトビラやイツカのように、同じ第 2 類・第 4 類でも HHL があまりあらわれない語に比べると、オンナとネガイは比較的变化の遅い語であるといえそうである³。

4.6. 複数のアクセントがあらわれる語

		高	中	若			高	中	若
岩屋	アズキ	HHL	HLL	HLL	明石	アズキ	HHL	HHL	HHH
	カタナ	HHL LHL	HHL LHL	LHL		カタナ	HHL LHL	LHL	LHL
富島		高	中	若	鳴門		高	中	若
	アズキ	HHL	HLL	HLL HHH		アズキ	HHL LHL	LHL HHL	LHL
郡家	カタナ	HLL	HHL LHL	HLL LHL	カタナ	HHL	LHL HHL	LHL	
		高	中	若	高知		高	中	若
洲本	アズキ	HHL HLL	HLL	HLL HLL		アズキ	LHL	LHL	LHL HHH
	カタナ	HHL	HLL	LHL	カタナ	LHL	LHL HHL	LHL	
由良		高	中	若	春木		高	中	若
	アズキ	HHL	HHL	HHL HHL		アズキ	HLL	HLL	HLL
津井	カタナ	LHL	LHL	LHL HHL	カタナ	LHL	LHL	LHL	
		高	中	若	深日		高	中	若
福良	アズキ	HHL	HHL	HHL		アズキ	HHL	HHL	HHL
	カタナ	HHL	HHL	LHL	カタナ	HHL	HHL	LHL	
加太		高	中	若	恋野		高	中	若
	アズキ	HHL	HHL	HHH HHL		アズキ	HLL	HLL	HHH
	カタナ	HHL	HHL	HHL LHL	カタナ	LHL	LHL	LHL	

表6. 複数のアクセントがあらわれる語1

上記に含まれないのは、アズキ・カタナ・トビラ・オーギ・アオナ・イズミ・イタチ・サザエ・ソナエ・ツヅリ・ワラビの11語である。これらの中には、地域や年齢層によってあらわれるアクセントが異なると考えられるものもある。表6および表7に示した語のアクセントのうち、高年層にあらわれるアクセントがより古く、反対に若年層にあらわれるアクセントがより新しいものであり、その方向へ移り変わると仮定するならば、たとえばアズキはその変化過程について次のように分類することができる。

- A. HHL→HLL (岩屋、郡家、春木)
- B. HHL→HLL→HHH (富島、恋野)
- C. HHL→HHH (明石、津井)
- D. HHL→LHL (鳴門)
- E. HHL→LHL→HHH (高知)
- F. HHLから変化なし (洲本、由良、福良、深日、加太)

このうち、AとBはHHLからHLLへ変化するという点で共通しており、DとEはHHLからLHLへ変化するという点で共通している。また、BとCとEは、過程は異なるもののいずれもHHHになるという点で一つにまとめることができる。

同じように、カタナについても富島・郡家ではHHL→HLL→LHLという変化の過程を想定することができる一方で、そのほかの地域においてはHHL→LHLとなっており、こちらはいず

れにせよ LHL になるという点で共通しているといえる。また、トビラについては基本的には HHL→HLL→HHH という変化を想定することができよう。

しかしながら、はっきりとはわからない語も多く、たとえばトビラは福良においてははっきりとした傾向が見出せない。そのほかにも、イズミやアオナなどのように地域によっては傾向を見出しにくいものが存在するため、上に示した違いもあくまで一つの傾向としてとらえるべきであろう。また、LHL と HLL があらわれるサザエやワラビのような語については、現代の東京式アクセント⁴で両者ともに HLL と発音されることから、それとの対応についても考える必要があるといえる。

		高	中	若			高	中	若
		岩屋	トビラ	HLL LHL			HHH	HHH	福良
	アオナ	HHH HLL	HHH LHL	LLH		アオナ	HLL	HLL	HHH
	イズミ	LHL HHH	HLL HHH	HHH		イズミ	LHL	HLL	HHH
	イタチ	LHL	LHL HHH	LHL		イタチ	HHL	LHL	HHH
	オーギ	HLL HHH	HLL HHH	LLH		オーギ	HHH	HHH	HHH
	サザエ	LHL HLL	HLL LHL	LHL		サザエ	HHL	HLL	LHL
	ソナエ	HHH HHL	HHH LHL	HHL		ソナエ	HHH	HHH	LHL
	ツヅリ	LHL	LHL HHL	LHL		ツヅリ	HHL	HHL	LHL
	ワラビ	HLL	HLL LHL	LHL		ワラビ	HLL	HLL	HLL
		高	中	若			高	中	若
		深日	トビラ	HLL			HHH HLL	HHH	高知
	アオナ	LLH HHH	HHH LLH	LLH HHH		アオナ	LLH	HHL	HLL HHH
	イズミ	HHH HHL	HLL HHL	HHH HLL		イズミ	HHH	HHH	HHH
	イタチ	HHH	HHH	LHL		イタチ	LHL	LHL	HHH
	オーギ	HHH HLL	HLL	LLH		オーギ	HLL	HHH	HLL HHH
	サザエ	LHL	HLL LHL	LHL		サザエ	HLL	HHL	HLL LHL
	ソナエ	HHH	HHL	HHH HHL		ソナエ	HHL	HHL	HHL LHL
	ツヅリ	HHH	HHL HHH	LHL		ツヅリ	HHL	HHL	HHH HHL
	ワラビ	HHL LHL	HLL	HLL		ワラビ	LHL	HLL	HLL

表7. 複数のアクセントがあらわれる語2

4.7. 語による傾向

ここまで述べてきたアクセントのあらわれ方について、ムスメなどのように全体的には HHL が多く一部の地域において別のアクセントがあらわれる語も含めその変化の方向を表 8 のようにあらわすことができる。表 8 では、京都アクセント（京ア）と京都中年層（京中）との比較をおこなった上で、変化の方向が完全に一致する場合は○・一部のみ一致する場合は△・まったく一致しない場合は×とした。このようにしてみると、京都アクセント（京ア）と比較すると完全には一致しないものも多く、京都中年層（京中）と異なるアクセントである語もみられるということがわかる。また、4.6 であげた語のように地域差のみられる場合があることも考慮しなければならない。

すでに述べたように、HHL から HLL へ変化することは H2 型の H1 型への統合によるものであると考えられ、名詞に限らず動詞や形容詞においても同時代的にみられる変化である。ま

た、HHL から LHL への変化は語頭のアクセントが低下することによるものであり、アクセントのさがる位置そのものは変わらない。これも、他の品詞にみられる変化である。つまり、HHL から HLL あるいは LHL という二つの変化は直接的なものであるといえる。しかしながら、HHH は典型的な高起式のアクセント型ではあるものの、HHL や HLL、LHL と直接は結びつかない型で、そのあらわれ方から以前に発音されていたアクセントに関わりなく置き換わるものである。

それでは、このような複数のアクセント型が地域差や世代差として、あるいは語によ

語	変化の方向	京都との一致	
		京ア	京中
ムスメ アタマ タカラ	HHL→HLL	○ △ ○	○ × ○
ハサミ フタエ フタツ アマリ カガミ フクロ	HHL→LHL	○ △ △ △ △ △	— — ○ ○ × ×
イケス イツカ クルミ ケモノ ホトケ	HHL→HHH	△ △ △ △ △	○ × ○ ○ ○

表8. 語による傾向の違い

る傾向の違いとしてあらわれるのはなぜであろうか。第5項では、その点について検討することにする。

5. 変化の方向とその理由

これまで述べてきたように、三拍名詞第2類・第4類の語には複数のアクセントへ変化する様子がみられた。また、その変化には地域によって違いが存在し、必ずしも同じ方向へ動くわけではないことが明らかとなった。このような違いがあらわれる原因については、村中（2005）で指摘されている「語の馴染み度」や「安定性への変化傾向」⁵、語を構成する母音や子音との関係、あるいは東京式アクセントの影響など、様々な要素が複合的にはたらいっている可能性を考える必要がある。以下では、それらについて個別に検討する。

5.1 変化の時期と H1 型

榎垣（1957）をはじめとした先行研究では、第2類・第4類の語のアクセントが変化する先の「基本線」を HLL と想定している。このような H2 型が H1 型に統合される傾向は、名詞に限らず動詞・形容詞などにおいてもみられるものであり、たとえば三拍形容詞（「赤い」など）の終止形はかつて HHL（第1類）と HLL（第2類）という区別があったが、現在は多くの地域で HLL に合同している。ただし、筆者の調査によれば、この傾向が顕著にあらわれるものとそうでないものがあり、各地域において必ずしも統一的に生じるわけではない。

本節で扱う三拍名詞についても、京都アクセントにおいては HHL から HLL への変化が顕著にみられるが、調査地域ではそれほどみられないなどの違いがあった。この差が生じる理由として、アクセント変化の時期が関係すると考えられる。すなわち、変化の生じた時期が早ければ HLL になりやすいということである。中井（2002ab）などで取り上げられている京

都市などにおいては、筆者の調査した地域（特に淡路島など）に比べて変化が早く進行したものと考えられ、示されている結果をみても HLL で発音される語が比較的多い。ただし、一旦 HLL で発音されることが多くなった語についても、京都中年層では LHL や HHH で発音される傾向がみられた。このことから、ある時期においては、H1 型に統合される力が強くはたらいしたが、それが後に弱まって、それに代わる別の力が強くなったと考えることができる。

5.2 語を構成する子音と母音

それでは、H2 型の H1 型への統合に代わる別の力として、何が考えられるであろうか。先にあげた表 8 のうち、HHL から LHL に変化する語として分類したのはフタツ・アマリ・カガミ・カタキ・フクロ・ハサミ・フタエであった。それぞれの語についてみると、これらは一音節目が無声子音である（フタツ・カガミ・カタキ・フクロ・ハサミ・フタエ）か、二音節目の母音が「ア」である（フクロ以外）ことがわかる。また、カタナにも同様のことがいえる。つまり、LHL で安定する理由の一つとして、語を構成する子音と母音が影響する可能性を指摘することができるであろう。

また、同じく表 8 において、HHL から HLL へ変化する語として分類したムスメは、調査した多くの地域で HHL を保つ傾向にあった。同じように、カガミ・カタキなどの語にも HHL が比較的多い。これらは一音節目と二音節目が同じ母音であり、三音節目が別の母音であることから、HHL を残しやすいのだと考えられる。

このように、語を構成する子音と母音によって、あらわれやすいアクセントが異なるのだといえるが、全体として変化が遅い地域や、ムスメと同じように HHL を残しやすいオンナ⁶ やネガイなどのような語については、また別の理由を考慮する必要がある。

5.3 語の馴染み度と多数派への合流

次に、HHH が多くあらわれる理由について考えてみたい。先に述べたように語を構成する子音と母音にアクセントを決定する力があるのならば、HHH となる語にはすべて同じ母音であるというような共通点がみられてもよさそうである。しかし、実際には表 8 に示したように必ずしもそうでないことがわかる。また、HHH はどちらかといえば若い世代にあらわれやすいアクセントであり、古くから HHH で発音される第 1 類の語と同一である。

この第 1 類は、所属する語数が他に比べて多いという点が特徴的であり、HHH は典型的な高起式のアクセントであるといえる。また、先に述べたように以前に発音されていたアクセントに関わりなく HHH へ置き換わる様子がみられることから、このように変化する理由は多数派への合流によるものであると考えることができる。

上記と合わせて、村中（2005）のいう「語の馴染み度」とアクセントとの関連も無視できるものではないだろう。ただし、これについては個人がどのような生活を送っているかといった点も考慮しなければならず、そもそも客観的に示すことが困難である。たとえば、ホトケのような語は「仏さん」「仏様」のように使用されることはあっても単独で使用されるこ

とは少ないと考えられるし、イケスやケモノなどについても同様にあまり用いられないのではないかと推測されるが、これらはいくまでも調査をおこなった中での印象にすぎない。しかしながら、仮に馴染み度の低い語が存在するとすれば、その語を発音する際にもっとも語数の多い第1類と同じアクセントになるのは、ごく自然なことであるといえよう。またそれには、東京アクセントにおいて第1類・第2類・第4類・第6類が単独の場合と同じLHHである⁷ことも関係する可能性があるため、本節では取り上げなかった第6類も含めて検討する必要がある。

5.4 まとめ

アクセント	変化の時期	その動機	語の馴染み度
HHL	—	子音・母音の構成など	高い
HLL	早い	H2型のH1型への統合など	高い
LHL	遅い	子音・母音の構成など	高い
HHH	遅い	多数派への合流など	低い

表9. 変化の理由

本項では、三拍名詞第2類・第4類のアクセントがさまざまな型に変化する理由について考察をおこなった。これをまとめると、表9のようになる。表9における変化の時期については、H2型のH1型への統合によってあらわれるHLLを「早い」としたうえで、それ以外のアクセントを「遅い」と仮定した。語の馴染み度についても同様に、HHHを「低い」としたうえで、そのほかを「高い」と仮定した。

たとえば、カタナは各地域のアクセントを図1のようにあらわすことができる⁸が、上に基ついで整理すると、春木・恋野・加太をはじめとする地域においてはHHLからLHLへ変化する（変化した）といったような変化の道筋が想定され、これは語を構成する子音や母音などがアクセントを決定する力がはたらいたためであると考えられる。反対に、福良・津井・深日などにおいてはもとのHHLを保つ力がまだ残っているため、HHLが比較的多く聞かれるのだといえよう。また、郡家や富島では変化が早く生じたためにHLLがあらわれ、その後LHLになる力がはたらいたために、複数のアクセントがあらわれるととらえることができる。

また、上にあげたほかにも、たとえば、HHHへ変化するイツカは、副詞的なアクセントの影響を受けたとも考えられるが、第1類の「十日（トオカ）、二十日（ハツカ）」など日付をあらわす語に類推して変化したものとも解釈できる。このことから、意味的に重

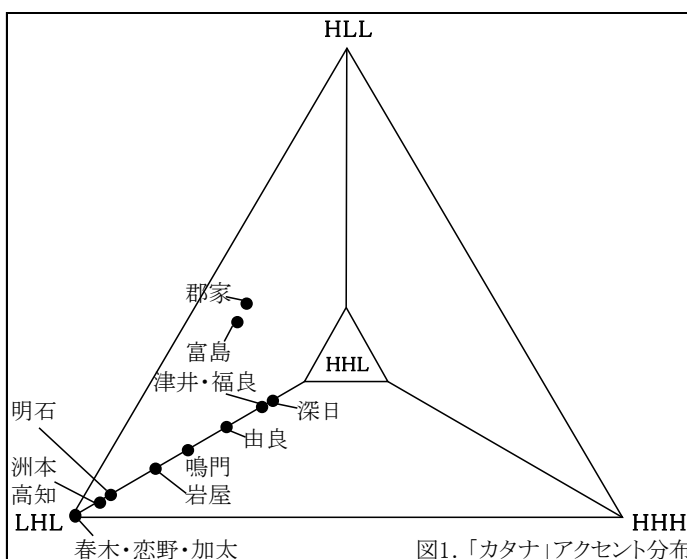
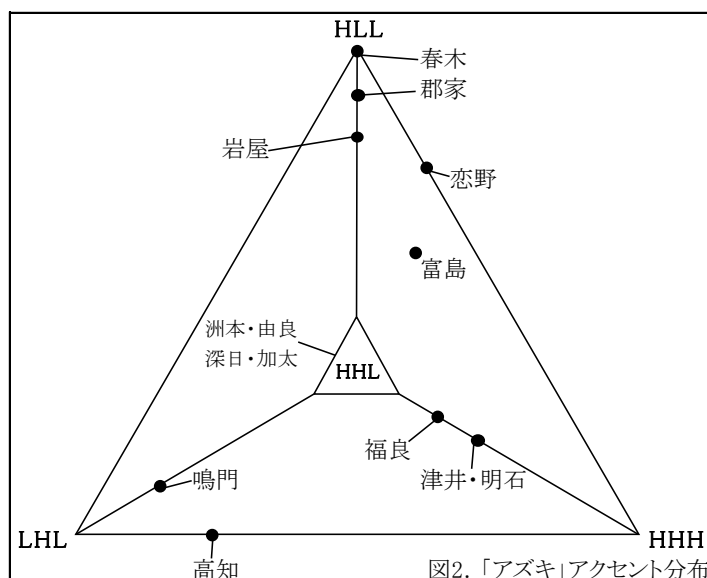


図1. 「カタナ」アクセント分布

なりをもつ語や同音の語が存在することがアクセントに影響を与える可能性があるといえよう。

ただし、先にも述べたように、三拍名詞のアクセント変化には上にあげたようなさまざまな原因が複合的に作用すると考えられ、図2に示したアズキのように判然としないものも多い。このような語については、さらに個別の検討が必要になる。



6. おわりに

本節では、三拍名詞第2類・第4類に生じるアクセント変化について述べてきた。榎垣(1957)や村中(2005)で示されているHLLやLHLのほか、榎垣(1957)や都染(1987)、田原・中上(1999)で示されているようにHHLからHHHやLLHに変化する語がみられること、その変化には地域差のあらわれる場合があることを指摘した。また、同じ第2類・第4類に分類される語であっても、変化の生じた時期あるいは進行する速度がはやいと考えられるイツカ・ケモノのような語がある一方で、調査した地域においてはムスメやオンナなどのように、他のアクセント型への移り変わりがほとんどみられない語があることについても指摘した。

これらの違いがあらわれる原因については第5項で述べたように必ずしも明らかでないが、地域差や世代差、語によるアクセントの違いが生じるのは、変化を起こす要素が様々にある中でどれが強くはたらくかが時期や場所、語によって異なるためであると述べた。

三拍名詞のアクセント変化については、本節で取り上げた第2類・第4類のほか、従来HLLで発音されていた第3類の「三十路」や第5類の「ろくろ」などにおいてもHLLのほかHHHやLLHが聞かれることがある。このことから、全体として典型的な高起式であるHHHになろうとする力が、京阪式アクセント地域において強くはたらいているとも考えられる状態である。これらのアクセント型については、動詞・形容詞のアクセントについて述べたのち、終章で改めて検討する。

【注】

1 以下、調査した語について、本節ではすべてカタカナによって表記する。

- 2 単独形、「この」を前接した形、その語を含む短文の発音を依頼したが、調査結果においては単独の形のアクセントを示す。
- 3 高知の若年層にあらわれる LHL は、東京式アクセントの影響とも考えられるか。
- 4 『新明解日本語アクセント辞典』(2010、三省堂) ほか参照。
- 5 村中(2005)は三拍名詞の変化傾向について、外的要因よりも「語の馴染み度という要因」が大きく、「全体に、共通語化ではなく安定性への変化傾向があると言えそうである」と述べる。どのアクセント型の安定性が高いかということについて一概にいうことはできないが、語数の多い H0 型 (HHH など) はそれにあたるか。また、変化しにくいと考えられる L2 型 (LHL など) なども安定性が高いアクセント型であると考えられる。本研究では、以降の第 2 章第 2 節・第 3 節、第 3 章、終章などでも「型の安定性」について言及するが、すべて「他のアクセントに変化しにくい型」のことを指す。
- 6 オトコ・オンナなど対になる語には同じアクセントがあらわれやすいのではないかと考えられる。ただし、オトコについては高知でしか調査していないため、ここでは詳しく述べない。
- 7 助詞接続形では、第 1 類・第 6 類が LHH-H、第 2 類・第 4 類が LHH-L となる。
- 8 図 1 と図 2 は、それぞれの調査結果を示したものである。中央にもとのアクセントである HHL を置き、そこから三角形のそれぞれの頂点に置いた HLL・LHL・HHH のうちいずれのアクセント型に変化するかということであらわした。その際、調査結果を%に直して線上の位置を定めた。また、三つ以上のアクセントが結果にあらわれた場合は、%をもとにそれぞれの頂点からの位置を計り、点を置いた。

第2章 動詞活用形のアクセント

本章は、動詞活用形のアクセントについて述べたものである。ここで扱うのは、「早稲田語類」に記載される二拍動詞と三拍動詞である。

第1節では、アクセントについて述べる前に、現代の京阪地域において広い範囲で観察される一段動詞の五段化傾向について、改めてその実態を整理し、五段化の原因について考察をおこなう。その上で、五段化が生じたとみられる時期と三拍動詞におけるアクセント変化の時期が近いことから、両者の関わりについても論じる。すなわち、五段化がアクセントに影響を及ぼさないことを指摘する。

つづく第2節では、二拍動詞および三拍動詞の各活用形のうち、禁止形（「見るな」「上がるな」など）のアクセントについて取り上げる。この禁止形とは、動詞の終止形に終助詞ナが接続した形のことをさすが、中世以降に動詞の連体形が終止形の役割を担うようになってからも、禁止形には古い終止形の姿が保たれていた。先行研究および筆者の調査結果によって、現代において新しい終止形のアクセントに置き換わる傾向のみられることが明らかとなったが、一方で古い終止形の名残をとどめている地域がみられることを指摘する。そしてそれぞれの理由について、連用命令禁止形（連用形+助詞ナ）などとの関わりから考察をおこなう。

また、第3節では三拍動詞第2類のアクセント変化について、筆者が調査をおこなったいくつかの地域における実態を報告する。そして、その調査結果と先行研究で述べられていることを比較し、三拍動詞第2類のアクセント変化がどのように進化したかについて検討する。すなわち、変化のきっかけには〈型の統合〉だけではなく、各活用形のアクセントに生じた「ゆれ」がはたらいたものとする。

第1節 一段動詞の五段化傾向とアクセント

1. はじめに

現代語において、「見る・寝る・開ける・起きる」などのような、いわゆる一段活用の動詞（以下、一段動詞と呼ぶ）におけるラ行五段化の傾向（表1参照）は、程度の差はあれ全国に散見される現象である。本節で取り上げる京阪地域の場合、たとえば一段動詞である「見る」に打消をあらわす「ん」が接続すると「ミン」になるのが普通だが、地域や年代によっては、五段活用の動詞（以下、五段動詞と呼ぶ）である「取る」に打消の「ん」が後接した「トラン」のように「ミラン」のあらわれることがある。また、同じように一段動詞「見る」の命令形に「ミレ」という形のあらわれることがあり、これは五段動詞「取る」の命令形「トレ」と同じであるといえる。このように、一段動詞がラ行五段動詞と同じ活用をするようになる現象を、五段化と呼ぶ。

この五段化が生じる動機については小林隆（1996）、田附敏尚（2004）、黒木邦彦（2012）などの先行研究において、少数派の多数派への合流によるものとされている¹。すなわち、現代語における動詞の活用のうち五段動詞がもっとも多く、そのうちでもラ行五段動詞が多いことが関係しているということである。

本節では、とくに京阪地域における五段化傾向を取り上げる。ここで用いるのは、筆者が複数の地域でおこなった、五段化した形の使用の有無とそれぞれの活用形にあらわれる語形、そのアクセントについての調査で得られた結果である。まず、第2項において調査の概要を示したのち、第3項でその結果を概観する。そして、五段化傾向がみられない地域の特徴などを述べ、第4項では五段化とアクセントの類別との関連について考察する。

	未然	連用	終止	連体	仮定	命令	意志
上一段	-i	-i	-iru	-iru	-ire	-iro	-i(yoo)
	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
五段化	-ira	-iri	-iru	-iru	-ire	-ire	-iroo
下一段	-e	-e	-eru	-eru	ere	-ero	-e(yoo)
	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
五段化	-era	-eri	-eru	-eru	-ere	-ere	-eroo

表1. 一段動詞が五段化した場合の活用表

2. 使用するデータについて

調査した地域は、淡路島内の岩屋・富島・郡家・洲本・由良・津井・福良と徳島県鳴門市鳴門町の亀浦港近辺、兵庫県明石市の明石港近辺、大阪府岸和田市春木、大阪府岬町深日と和歌山県和歌山市加太、和歌山県橋本市恋野である。2011年から2013年にかけて現地を訪れて調査をおこなった。調査人数は以下のとおりである。

岩屋・富島・郡家・由良・津井・福良：高年層2人・中年層2人・若年層2人

洲本：高年層3人・中年層2人・若年層2人

明石・鳴門：高年層2人・中年層2人・若年層2人

春木：高年層 1 人・中年層 2 人・若年層 2 人

深日：高年層 3 人・中年層 3 人・若年層 2 人

恋野：高年層 3 人・中年層 2 人・若年層 2 人

加太：高年層 2 人・中年層 1 人・若年層 1 人

調査した語は、二拍動詞第 1 類「着る・似る・寝る」と第 2 類「出る・見る」、三拍動詞第 1 類「開ける・漬ける・負ける・割れる」と第 2 類「起きる・落ちる・過ぎる・建てる」の否定形・連用命令形・命令形・意志形²である。それぞれ五段化した形を使うか使わないかについて、具体的な語形を示して調査した。また、そのアクセントについても聞き取りをおこなった。春木・深日・恋野・加太においては、使役形についても調査した。

3. 五段化の程度と要因

地域 年齢層	明石	岩屋	富島	郡家	洲本	由良	津井	福良	鳴門	春木	深日	加太	恋野
	高(2)	高(2)	高(2)	高(2)	高(3)	高(2)	高(2)	高(2)	高(2)	高(1)	高(3)	高(2)	高(3)
否定(5)	0	3	10	10	15	10	10	10	0	5	0	0	10
連用命令(4)	8	1	0*	0*	12	2	0*	0*	0*	4	0	0	8
命令(4)	0	0	8	7	12	5	0	0	0	0	0	0	0
意志(4)	0	0	8	8	12	8	1	0	0	4	0	0	8
年齢層	中(2)	中(2)	中(2)	中(2)	中(3)	中(2)	中(2)	中(2)	中(2)	中(2)	中(3)	中(1)	中(2)
否定(5)	0	8	10	10	15	10	10	10	0	10	0	0	10
連用命令(4)	8	1	7	0*	12	7	0*	0*	0*	8	0	0	8
命令(4)	8	0	8	8	12	8	0	0	0	0	0	0	0
意志(4)	8	0	8	8	0	8	0	8	0	8	0	0	8
年齢層	若(2)	若(2)	若(2)	若(2)	若(2)	若(2)	若(2)	若(2)	若(2)	若(2)	若(2)	若(1)	若(2)
否定(5)	4	8	10	10	10	10	10	6	0	10	0	0	10
連用命令(4)	4	4	4	8	8	4	8	0*	0*	8	0	0	8
命令(4)	0	0	8	8	8	8	0	0	0	0	0	0	0
意志(4)	0	0	4	8	8	4	0	4	0	6	0	0	4

表2. 二拍動詞の五段化(活用形・地域、年齢層別)

地域 年齢層	明石	岩屋	富島	郡家	洲本	由良	津井	福良	鳴門	春木	深日	加太	恋野
	高(2)	高(2)	高(2)	高(2)	高(3)	高(2)	高(2)	高(2)	高(2)	高(1)	高(3)	高(2)	高(3)
否定(8)	6	12	16	16	24	16	16	16	1	8	0	0	16
連用命令(7)	2	6	0*	0	21	1	0*	0*	0	7	0	0	14
命令(8)	0	0	16	16	24	15	7	0	0	0	0	0	0
意志(6)	0	0	12	12	18	11	0	0	0	6	0	0	12
年齢層	中(2)	中(2)	中(2)	中(2)	中(3)	中(2)	中(2)	中(2)	中(2)	中(2)	中(3)	中(1)	中(2)
否定(8)	14	16	16	16	24	16	16	16	2	16	0	0	16
連用命令(7)	4	4	7	0*	21	14	1	0*	0	14	0	0	14
命令(8)	16	0	16	16	24	16	0	0	0	0	0	0	0
意志(6)	12	0	12	12	6	12	0	0	0	12	0	0	12
年齢層	若(2)	若(2)	若(2)	若(2)	若(2)	若(2)	若(2)	若(2)	若(2)	若(2)	若(2)	若(1)	若(2)
否定(8)	14	16	16	16	16	16	16	11	0	16	0	0	16
連用命令(7)	0	4	10	6	14	7	4	0	0	14	0	0	14
命令(8)	0	0	16	16	16	0	0	0	0	0	0	0	0
意志(6)	0	0	6	12	12	12	0	0	0	6	0	0	6

表3. 三拍動詞の五段化(活用形・地域、年齢層別)

各地域における五段化の程度を年齢層別にまとめると、表2・表3のようになる。表の中、左端の列の () 内は調査語数を、若・中・高はそれぞれ若年層・中年層・高年層、その後の

() は調査人数をあらわす。表の中の数字は、五段化した形を使用すると答えた場合の数を示した。また、「連用命令」欄における*付きの0は、そもそも連用命令形を使用しないという回答があったことをあらわしている（連用命令形の使用は女性に偏る傾向がある）。表2・表3ともに使役形の結果は示していないが、否定形に五段化した形がみられた地域・年齢層では使役形の五段化形も同程度あらわれるとあってよい。

二拍動詞の調査結果を示した表2と三拍動詞の調査結果を示した表3を比較すると、まったく同じわけではないということがわかる。たとえば、明石の中年層において、二拍動詞の否定形に五段化した形があらわれないのに対して、三拍動詞にはあらわれることがある。また、洲本の中年層・由良の若年層・福良の若年層における意志形の五段化は、二拍動詞と三拍動詞とでその程度に差があるなど、両者の違いが様々なところにあらわれている。しかしながら、それらには必ずしも共通の傾向があるわけではなく、三拍動詞よりも二拍動詞での五段化が進んでいる、あるいはその反対に、二拍動詞よりも三拍動詞での五段化が進んでいるというようなことは一概に言えない。以下では、それをふまえた上で地域ごとの特徴を概観する。

3.1 調査結果の概観

調査した13の地域のうち、五段化した形がまったくあらわれないのは岬町深日と和歌山市加太である。また、鳴門においても五段化した形はほとんど用いられていないことから、これら三つの地域は五段化傾向がみられない、あるいは五段化傾向が弱いといえよう。一方で、五段化傾向が顕著にみられたのは淡路島内の富島・郡家・洲本・由良である。岸和田市春木・橋本市恋野においても五段化傾向は比較的強くみられたが、命令形には五段化した形が用いられない。岩屋・津井・福良は否定形に五段化した形があらわれ、それ以外の活用形にはあまりみられないという点で共通している。明石も似たような結果であるが、中年層には五段化傾向が強くあらわれる³。

小林(1996)は『方言文法全国地図』(GAJ)を用いて、全国のラ行五段化傾向に対する考察をおこなっている。五段化した形のあらわれやすさという点から各活用形を並べると、「使役形>意志形≒命令形>否定形>過去形」という順になるとしているが、筆者の調査地域では「(使役形≒)否定形>意志形≒命令形(>連用命令形)」となる。否定形がもっとも五段化しているという点、また、過去形には「寝った」「起きた」のような形があらわれることはないという点などが異なり、これらがこの地域の調査結果における特徴であるといえよう。

なお、五段化傾向が比較的強い地域であっても、五段化した形式だけが用いられているわけではなく、否定形(「起きない」)では「オキン」「オキヘン」、命令形(「起きなさい」)では「オキィ」のような形も合わせて使用されている。

3.2 五段化しない要因について

小林（1996）は本節の第1項に述べたような基本的な動機についてだけでなく、活用形ごとにラ行五段化の要因が存在すると考え、それについて次のように述べている。

- ・使役形：「使役形のラ行五段化は、意味的な対応関係にある受身形に引かれたことが一つの要因となった。形態的にも、受身の～ラレルと使役の～サセルとは対応関係にあり、さらに両者の緊密な関係が求められた結果、付属語サセルのサがラに交替し、ラ行五段化形式が成立した」
- ・否定形：「否定形のラ行五段化は、否定の意を明確に示すために、不安定な附属形式ンの補強を意図して、ンの直前にラを挿入することにより生じた」
- ・命令形：「命令形では、～ロという同じラ行音の活用語尾を基盤に～レというラ行五段化形式が発生した」
- ・意志形：「意志形ではラ行五段化形式～ローと形態的に類似している付属語ヨーの存在がもとになり、ラ行五段化が生じた。また、推量形～ローという形式が関与していた可能性もある」

また、命令形と意志形については、さらに「意志形と命令形とは同音衝突を契機としてラ行五段化を制約したり、促進したりして関わり合っている」としている。

ここでは上記の小林（1996）の論を参考にしながら、とくに五段化が生じない要因を考察する。

3.2.1 深日と鳴門の場合

深日および鳴門においては五段化傾向がほとんどあられなかった。深日では否定形が「オキヘン」、命令形が「オキヨ」、鳴門では否定形が主に「オキン」「オキヘン」、命令形が「オキィ」である。小林（1996）が述べるように否定形「オキン」が主である地域、命令形が「オキロ」である地域に五段化傾向がみられやすいとすると、深日において五段化形があらわれないことや、その他の調査地域でも命令形に五段化形が用いられないことが多い理由について説明がつく。また、鳴門のような地域においては、否定形に「ヘン」が使用されるようになり⁴、命令形には「オキィ」が用いられているため⁵、五段化の進行が阻害されたのではないかと考えられる。

3.2.2 加太の場合

和歌山市加太においては、否定形に「～ヤン」（起きる：「オキヤン」）、使役形に「～ヤス」（「オキヤス」）が多く用いられており、これらの形のアクセントは他の調査地域の五段化した形と同一である。加太においてこの形式がいつごろ・なぜ生じたのかについて、先行研究で明確に述べられていないが、村内（1962）の「ヤンを否定形に使うのは、紀北地方では和歌山市中心に多く、海草郡、那賀郡、伊都郡と東へ行くほどすくなくなっており、紀南では有田、日高、西・東牟婁郡の諸郡にあるが、海岸とか河に沿った地方に多

く、山間僻地といわれるところはランが多い」が、「次第にヤンに侵蝕されていく傾向にある」(p. 403) という記述から、「～ヤン」が「～ラン」に取って代わったものであると考えることができる。つまり、和歌山市では少なくとも否定形や使役形にラ行五段化傾向のみられた時期があったものの、そこから「～ヤン」「～ヤス」に置きかわった可能性がある⁶。

否定をあらわす形式である「～ヤン」の成立については、「～ヤヘン」から「～ヤン」になったという説(五段動詞「書く」:「カカヘン」から「カカン」などの類推による)と、「～ラン」が音変化を起こして「～ヤン」になったものという説があり、日高水穂(1994、2014)においては、後者の説の優位性を認めている⁷。

なお、加太においては一段動詞の他の活用形は五段化した様子がなく、意志形には「オキヨウ(オキヨカ)」、命令形には「オキロ」ではなく「オキヨ」あるいは「オキヨシ」⁸という形が用いられる。否定形が「オキヤン」であるのは、このような他の活用形との整合性を保とうとしたからなのではないかと考えると、アクセントが他の調査地域の五段化した形と同一であること、また先に述べた可能性と合わせて「～ラン」から変化して「～ヤン」が生じたという説のほうが妥当だということになるであろう。

以上を小林(1996)の記述と合わせて考えてみると、現在の加太においてラ行五段化傾向がみられないのは、否定形や使役形の五段化した形がラ行音からヤ行音になり、命令形や意志形がもとの語形を保持した結果、五段化の要因となる語形が存在しなくなったためであるといえる。

3.3 内的変化と外的変化

一方、五段化傾向が比較的強くみられた地域で、その変化が内的に生じたものか外的に生じたものか⁹という点については、小林(1996)において「東西各地で独自に生じたもの」だと述べられていることから、基本的には内的に生じたものであると考えられる。また、以下に掲げる先行研究の記述から、本節の調査地域においてもおおむね内的変化によるものであるということが出来る。ただし、一部そうとは決められない地域もあるため、改めて検討したい。

大阪府方言について概観した山本俊治(1962)において、一段動詞の五段化についての記述がみられる。調査の詳細は明らかでないが、「府下全域にわたって相当広くきかれる」(p. 443)とした上で、五段化(山本は四段化としている)した形がみられる地域として枚方市・豊中市・大東市・大阪市や堺市・岸和田市・河内長野市・泉佐野市などをあげている。どこから生じたのかなどは定かでないが、これらの地域が必ずしも隣接しているわけではないことから、大阪府にみられる五段化はもともと内的要因が強く働いて生じたものであると考えることができるだろう。

一方で淡路島における五段化については、服部敬之(1962)の「洲本市近辺を中心とした現象ではある…(後略)」という記述、榎垣実(1962)の「洲本あたりが本場で、やがて全

島にひろまったものといわれる」(p. 522) という記述から、洲本においてもっとも顕著に五段化した形があらわれると捉えられ、筆者がおこなった調査の結果と一致する。また、岩屋と由良、福良の3地域について述べた高橋顕志(1982)でも、由良では五段化形が聞かれるのに対して福良ではきかれないとしており¹⁰、こちらもまた、筆者による調査結果と一致するといえる。淡路島における五段化の現象が、仮に洲本のあたりから広まったとすると、岩屋や福良のような北端・南端の地域で五段化傾向がそれほど強くあらわれていないことの説明もつくであろう。その場合、洲本にみられる五段化は内的変化によるものであるとしても、その他の地域にみられるものは洲本から伝わったものである可能性を合わせて考慮する必要がある。

また、橋本市(恋野)における五段化傾向については、村内英一(1962)が「色々と刺激のきつい(大阪、奈良の県境に近く、新旧のことばが入りまじる)地点にみられる現象として、注目をひくものである」(p. 392)と述べており、ここでもまた外的な要因が強くはたらいた可能性がある。

3.4 否定の五段化形「ラン」は独立した助動詞か

淡路島の五段化についての記述がみられる高橋(1982)において、「ランが独立した打消の助動詞のように意識され」て、「可能動詞ミエルではミエラン(あるいは連母の融合したメラン・ンメランの形)、さらにはミレル・ミラレルという可能の助動詞のついた形においては、ミレラン、ミラレランという打消の形が使用される」(p. 271)と述べられている。

たしかに、「ラン」が助動詞として独立していると考えれば、そして淡路島における五段化が洲本から広がったと考えれば、否定形においてのみ五段化した形式が福良(津井・岩屋)でも用いられることの説明が付きやすくなる。しかしながら、ミエルやミレル・ミラレルは一語あるいは一語相当として扱うことのできるものであり、これらの語が五段化して「ミエラ」や「ミレラ」という形をもつようになったため、否定形にミエラン・ミレランなどがあらわれるようになったと解釈することも可能である。つまり、これらの語に「～ラン」があらわれるからといって、「ラン」が独立した助動詞であると一概にはいえないのではないかと考えられる。ただし、和歌山市に聞かれるような「ヤン」は一段動詞だけでなくサ変・カ変動詞にも接続し、「コヤン・キヤン(来る)」「シヤン(する)」のような形になるのが特徴である。「ヤン」が「ラン」から変化したものであると考えれば、その音変化の後に独立した助動詞として意識されるようになり、接続が多様化したとも捉えられる。

3.5 まとめ

第3項ではまず、筆者のおこなった調査で得られた結果を概観した。それをまとめると、次のようになる。

I 深日・加太・鳴門においては五段化傾向がみられない、または五段化傾向が弱い。
II 富島・郡家・洲本・由良・春木・恋野と明石の中年層は五段化傾向が比較的強い。
III 岩屋・津井・福良と明石の若・高年層は否定形に五段化の傾向がみられる。
つづいて、Iの五段化傾向が弱い地域について、小林(1996)と照らしあわせながらその要因を考察した。

IV 深日では否定形が「オキヘン」で命令形が「オキヨ」、鳴門では否定形が主に「オキン」「オキヘン」、命令形が「オキィ」であることから、五段化が生じにくい(ただし、命令形の五段化形があらわれない理由については他の地域のこともふまえて検討する必要がある)。

V 加太においてラ行五段化傾向がみられないのは、否定形や使役形の五段化した形がラ行音からヤ行音になり、命令形や意志形がもとの語形を保持した結果、五段化の要因となる語形が存在しなくなったためではないか。

また、五段化形があらわれた地域について、その変化が内的なものであるか外的なものであるかという点については、次のように述べた。

VI おおむね内的変化といえる。しかし、淡路島内の洲本以外にみられる五段化は、洲本から伝わったものである可能性がある。

そして、とくに否定形「～ラン」という形式について、この「ラン」を独立した助動詞としてみるかどうかについては検討の必要があるが、「ヤン」については次のように考えた。

VII 「ヤン」が「ラン」から変化したものであると考えると、それによって独立した助動詞として意識されるようになった可能性があり、そのために「ヤン」が一段動詞だけでなくサ変・カ変動詞にも接続するようになった。

ここまでは、筆者が調査をおこなった地域の五段化傾向について、先行研究と照らし合わせながら考察したことである。次に、この五段化傾向とアクセントとの関わりについて述べる。

4. アクセントの類別と五段化

第3項で述べたのは、五段化傾向という文法に関わる事柄であった。本節において筆者が調査をおこなったのは、京阪式アクセント地域と呼ばれるところであるが、この地域においては動詞、とくに三拍動詞のアクセントにおいて大きな変化が生じており、その時期と五段化が生じた時期との間には、さほど隔たりがないのではないかと考えられる。それをふまえて、第4項では五段化傾向がみられる地域の動詞アクセントについて確認する。そして、とくに三拍動詞のアクセントが変化する時期と五段化の起きた時期との関わりや、三拍動詞のアクセント変化に五段化が影響を及ぼしたかどうかという点について述べる。

4.1. 二拍動詞について

表4に示したのは、深日・加太における二拍動詞の各活用形アクセントである。表中、

／で区切った前が古いアクセント、後ろが新しいアクセントで、() はそのように発音されることもあるということを示す(表5から表9においても同様)。

類	活用	語例	終止	否定	連用命令	命令	意志
1	五段	置く	HH	HHH	HH	HL	HH(HHH)
	一段	着る	HH	HH	H	F/HL	HH(HHH)
2	五段	書く	LH	LLH	LH	LF	LH(LLH)
	一段	出る	LH	LH	R/H	F/HL	LH(LLH)
3	五段	居(お)る	HL	HLL/HHH	HH	HL	HLL/HHH

表4. 深日・加太における二拍動詞のアクセント

これら二つの地域においては第3項において述べたように五段化が生じておらず、第1類・第2類ともに五段動詞と一段動詞とで否定形・連用命令形の拍数が異なる。たとえば、第1類五段動詞の場合は終止形から順に「置く HH・置かん HHH・置き HH・置け HL・置こ HH」となり、第1類一段動詞は「着る HH・着ん HH・着 H・着い F/着よ HL・着よ HH」となる。

類	活用	語例	終止	否定	連用命令	命令	意志
1	五段	置く	HH	HHH	HH	HL	HH(HHH)
	一段～五段	着る	HH	HHH	HH	HL	HH(HHH)
2	五段	書く	LH	LLH	LH	LF	LH(LLH)
	一段～五段	出る	LH	LLH	LH	LF	LH(LLH)
3	五段	居(お)る	HL	HLL/HHH	HH	HL	HLL/HHH

表5. 洲本における二拍動詞のアクセント

一方、五段化傾向が顕著にみられた洲本の、とくに高年層においては、表5のようなアクセントが聞かれる。ただし、アクセントに関わる範囲でいえば、表4と表5の間に見出すことのできる違いは、一段動詞の否定形・連用命令形の拍数が異なるという点だけである。たとえば、第1類五段動詞の場合は終止形から順に「置く HH・置かん HHH・置き HH・置け HL・置こ HH」となり、一段(五段)動詞は「着る HH・着らん HHH・着り HH・着れ HL・着ろ HH」となるが、そのほかに大きな違いはないと言ってよい。このことから、第1類の一段動詞(寝る、着るなど)は五段化すると第1類の五段動詞(置く、言うなど)と同じ拍数に、第2類の一段動詞(見る、出るなど)は五段化すると第2類の五段動詞(書く、待つなど)と同じ拍数になるが、アクセントの式(高く始まる高起式か、低く始まる低起式か)は変わらず、それぞれの類別を越えて変化が生じることもないということがわかる。

なお、3.2で述べたように、加太にきかれた「着る：キヤン」などの形もそれぞれの類別を保ち、五段動詞あるいは五段化した形と同じアクセントとなる。

4.2. 三拍動詞のアクセント

三拍動詞においても二拍動詞と同様に、五段化はアクセントの式には影響せず、五段化によって類別を越えたアクセントの変化も生じないと考えられる。ただし、二拍動詞の場合と異なるのは、京阪式アクセント地域において三拍動詞第2類(動く、起きるなど)のアクセ

ントに変化が生じており、第2類の五段動詞が第1類と同じ型に、第2類の一段動詞が第3類と同類のアクセントになるという点である。表6には、すでにその変化を終えており、五段化傾向も顕著にみられる洲本のアクセントを示した。第2類の五段動詞は「動く HHH・動かん HHHH・動き HHH・動け HHL・動こ HHH」であり、一段（五段）動詞は「起きる LLH・起きらん LLLH・起きり LLH・起きれ LHL・起きろ LLH」である。このように、第1類の五段・一段動詞と第2類の五段動詞が同じ拍数・アクセントになっており、第2類の一段動詞と第3類が同じ拍数・アクセントになっていることがわかる。

類	活用	語例	終止	否定	連用命令	命令	意志
1	五段	洗う	HHH	HHHH	HHH	HHL	HHH(HHHH)
	一段～五段	開ける	HHH	HHHH	HHH	HHL	HHH(HHHH)
2	五段	動く	HHH	HHHH	HHH	HHL	HHH(HHHH)
	一段～五段	起きる	LLH	LLLH	LLH	LHL	LLH(LLLH)
3	五段	歩く	LLH	LLLH	LLH	LHL	LLH(LLLH)

表6. 洲本における三拍動詞のアクセント

表7に示したのは、福良のとくに高年層における三拍動詞のアクセントであるが、ここでは第2類の五段動詞がまだ第1類に合同していない¹¹。福良では五段化傾向がさほど強くはみられず、三拍動詞においては否定形にあらわれるのみであるが、第2類の一段動詞は第3類と同一のアクセント型となっている。そのほか、津井や由良においても福良と同様のアクセントが聞かれるが、第2類の一段動詞はいずれも第3類と同類のアクセントであり、五段化した場合も第3類と同一のアクセントになるものと思われる。

類	活用	語例	終止	否定	連用命令	命令	意志
1	五段	洗う	HHH	HHHH	HHH	HHL	HHH(HHHH)
	一段～(五段)	開ける	HHH	HHHH	HH	HF	HHH(HHHH)
2	五段	動く	HLL	HLLL	HHH	HLL	HHL(HHLL)
	一段～(五段)	起きる	LLH	LLLH	LH	LF	LLH(LLLH)
3	五段	歩く	LLH	LLLH	LLH	LHL	LLH(LLLH)

表7. 福良における三拍動詞のアクセント

4.3 五段化とアクセント変化との関係

4.1および4.2で述べたように、五段化が生じてもそれによってアクセントの式が変わることはなく、それぞれの類別を越えて変化することもないと考えられる。しかし、三拍動詞第2類にみられるアクセント変化は、五段活用が第1類に合同し、一段活用が第3類に合同するというもので、これは類別を越えたものであるといえる。また、このアクセント変化は、表7に示した福良などの様子から、五段化と近い時期に生じたことが伺える。

そこで、以下では五段化と三拍動詞第2類のアクセント変化のいずれが先行するののかという点について検討し、それぞれが互いにどのような影響を与えるのか、とくに五段化という文法上の事象がアクセント変化の進行に影響を与えることはあるかという点について、改めて検討を加える。

4.3.1 五段化とアクセント変化の時期との関係

4.2.1 をふまえて、五段化と三拍動詞第 2 類のアクセント変化の時期について検討する。

先にも述べたように、五段化はアクセントの式や類別には影響を及ぼさないと考えられる。仮に第 2 類一段動詞のアクセントが変化する前に五段化が起きたのであれば、第 2 類の一段動詞のうち、とくにもとが高起式である否定形と意志形については、第 2 類の五段動詞と同一のアクセントになった時期があつてよいはずである。ところが、実際にはそのような様子はみられない。このことから、五段化が生じた時期について、「第 2 類一段動詞のアクセント変化が進んだあとに五段化が生じた」という可能性が考えられる。

五段化傾向が少しでもみられた地域においては、筆者が調査をおこなった高年層に至るまで、第 2 類一段動詞はすでに第 3 類への合同を終えているため、上に示した可能性を否定することはできない。しかしながら、五段化について言及している先行研究の調査対象者や GAJ の調査がおこなわれた年代・調査対象者などは、筆者が調査をおこなった高年層よりも上の年齢層であるため、それを考慮すると三拍動詞第 2 類のアクセント変化に後れて五段化が生じたと断言することは難しい。

4.3.2 両者の生じた時期について

類	活用	語例	終止	否定	連用命令	命令	意志
1	五段	洗う	HHH	HHHH/HHLL	HHH	HHL	HHH(HHHH)
	一段	開ける	HHH	HHH	HH	HF	HHH(HHHH)
2	五段	動く	HLL	HHLL	HHH	HLL	HHL(HHLL)
	一段	起きる	HLL	HLL	LH	LF	HLL(HLLL)
3	五段	歩く	LLH	LLLH	LLH	LHL	LLH(LLLH)

表8. 高知における三拍動詞のアクセント

表 8 に示したのは、高知の高年層における三拍動詞のアクセントである¹²。この地域では五段化は生じておらず、第 2 類一段動詞のアクセント変化もまだみられない。たとえば、第 2 類の五段動詞は「動く HLL・動かん HHLL・動き HHH・動け HLL・動こ HHL」であり、一段動詞は「起きる HLL・起きん HLL・起き LH・起きい LF・起きよ HLL」である。

既に述べたように、五段化はアクセントの式に影響しない。このことから、仮に表 8 のようなアクセントが保たれた状態で五段化が起きたとすれば、第 2 類一段動詞のうち、とくにもとが高起式である否定形と意志形には、低起式の「起きらん LLLH」や「起きろう LLLH」ではなく、第 2 類五段動詞と同じ「起きらん HHLL」「起きろう HHLL」のようなアクセントになった時期があつてよい。ところが、これまで述べてきた調査地域にその様子はなく、混乱もみられない。五段化の程度にかかわらず、いずれの地域・年齢層においても、三拍動詞第 2 類一段動詞の各活用形アクセントは必ず第 3 類と同じ低起式であられるのである。そこで、先に示した福良などのように五段化傾向がさほど強くない、かつ第 2 類五段動詞に古いアクセントを残す地域の結果と合わせると、五段化が生じた時期について「第 2 類一段動詞が第 3 類に合同した後に五段化が生じた」という可能性を提示することができる。

五段化の傾向が少しでもみられた地域においては、筆者が調査をおこなった高年層に至

るまで、第 2 類一段動詞はすでに第 3 類への合同を終えているため、上に示した可能性を否定することはできない。しかしながら、五段化について言及している先行研究の調査対象者や GAJ の調査がおこなわれた年代・調査対象者などは、筆者が調査をおこなった高年層よりも上の年齢層である。それを考慮すると、五段化が三拍動詞第 2 類のアクセント変化に後れて生じたと断言することは難しい。

4.3.3 五段化がアクセント変化に及ぼす影響

それでは、上記とは反対に「第 2 類一段動詞が第 3 類に合同する前に五段化が進んだ」場合、五段化はそのアクセント変化にどのような影響を及ぼしたであろうか。

類	活用	語例	終止	否定	連用命令	命令	意志
1	五段	洗う	HHH	HHHH	HHH	HHL	HHH(HHHH)
	一段	開ける	HHH	HHHH	HHH	HHL	HHH(HHHH)
2	五段	動く	HLL	HHLL	HHH	HLL	HHL(HHLL)
	一段	起きる	HLL	HHLL	LLH	LHL	HHL(HHLL)
3	五段	歩く	LLH	LLLH	LLH	LHL	LLH(LLLH)

表9. アクセント変化前に五段化が生じた場合

表 8 をもとに、第 2 類一段動詞の第 3 類への合同が進む前に五段化が生じた場合のアクセントを想定して、表 9 を作成した。第 2 類一段動詞は他の類や第 2 類五段動詞と異なり、各活用形に高起式と低起式とが入り交じる状態であった。五段化が生じてもそれは変わらず、もともとの第 2 類五段動詞は「動く HLL・動かん HHLL・動き HHH・動け HLL・動こ HHL」、第 2 類一段動詞は「起きる HLL・起きらん HHLL・起きり LLH・起きれ LHL・起きろ HHL」というようなアクセントになると考えられる。つまり、仮に五段化がすべての活用形に生じていたとしても、第 2 類一段動詞が第 2 類五段動詞とまったく同じアクセント型をもつことにはならなかったであろう。

三拍動詞第 2 類のアクセント変化の原理については、上野和昭 (1993, 2011) や新田哲夫 (2004, 2005) などで論じられており、本研究でも本章第 3 節で取り上げる。上野 (2011) は、HHL から HLL、あるいは HHLL から HLLL のような H2 型と H1 型との統合 (過去形・否定形・意志形・命令形) がきっかけになったとしている。そして、これによって、第 2 類五段活用と第 2 類一段活用とは過去形と命令形以外がほぼ同じ型となったが、一段動詞は連用形が低起式であったため、その接近に「反発」することで第 3 類へ合同し、その後五段動詞が第 1 類へ合同したと述べる。

また、新田 (2004) は「接続連用形」(連用形に付属語がついた形式: 動いてみる、起きますなど) に着目し、この多くが本来の連用形の式を保ったまま無核化してあらわれることから、第 2 類のアクセント変化はその類推によって生じたと述べている。たとえば、高く始まる第 2 類の五段動詞である「動く」の連用形に「ます」を接続させる場合は「動きます HHHHH」などというふうになり、低く始まる第 2 類一段動詞「起きる」の連用形に「ます」を接続させた場合は「LLHH」などというふうになる。すなわち、連用形の部分ではアクセントは下がらず、第 2 類五段動詞は第 1 類 (「洗います HHHHH」) と、第 2 類一段動詞は第 3 類

（「歩きます LLLHH」）と同一の型で実現する。そして、このような「接続連用形」のアクセントが第 2 類全体のアクセント変化を引き起こしたとする。

両者ともに本章第 3 節で述べる筆者の考えとは異なるものであるが、いずれにせよ、第 2 類一段動詞のアクセント変化にはその中に低起式である活用形の含まれていたことが大きな役割を果たしたといえる。すなわち、表 8 であげた連用命令形あるいは命令形のようなアクセントの存在することが重要なのであり、それが第 3 類への合同を促したということである。このことから、五段化によって第 2 類一段動詞の中に第 2 類五段動詞と同じ拍数・アクセント型になる活用形（否定形・意志形）があらわれたとしても、連用命令形や命令形のような低起式のアクセントが残る限りは、遅かれ早かれ第 3 類のアクセント型と同じになるろうとする力が強まったといえるであろう。五段化がアクセント変化の前に生じたとしても、このような文法上の現象が三拍動詞第 2 類のアクセント変化に影響を与えることはなく、両者は独立して進んだと考えられる。

4.4 まとめ

第 4 節では、五段化とアクセントとの関係について次のことを述べた。

VIII 五段化によって拍数が変わっても、アクセントの式や類別を越える変化は生じない。

これをふまえて、三拍動詞のアクセント変化と五段化との関係を考察し、五段化の時期について次の可能性を提示した。

IX 第 2 類一段動詞のアクセント変化が進んだあとに五段化が生じた可能性がある。

しかし、五段化の生じた時期については先行研究の結果と合わせて慎重に検討すべきであり、今の時点で断言することは避けた。また、特に三拍動詞の五段化がアクセントに及ぼす影響については以下のように考えた。

X 五段化がすべての活用形に生じたとしても、もともとが低起式である第 2 類一段動詞の連用命令形や命令形が、第 2 類の五段動詞と同じ高起式になることはなかったであろう。

XI このことから、五段化がアクセント変化の前に生じたとしても、三拍動詞の体系の変化に変わりはない。

ただし、調査をおこなった範囲では、五段化傾向がみられ、かつ三拍動詞第 2 類のうち一段動詞のアクセントがまだ第 3 類のアクセントに合同していないという地域はなかったため、本節で述べたことには推測で補った部分も大きい。両者の関係については、今後さらに調査をおこなう必要がある。

5. おわりに

本節では、まず京阪地域における一段動詞の五段化傾向を概観した。そして、五段化する地域と五段化しない地域のそれぞれにみられる特徴から、とくに五段化しない要因につい

て小林（1996）を参照しながら考察をおこなった。また、アクセントとの関連についても触れ、五段化という文法上の現象が三拍動詞第2類の一段動詞に生じたアクセント変化、すなわち第3類と同様のアクセントになるという変化に影響を及ぼさなかったことについて述べた。

五段化は動詞活用の歴史的な変化の一部として取り上げられる現象であり、調査地域においても五段化が顕著にみられる地域が存在した。しかしながら、地域によってはそのほかの方言形との対立などによって阻害される場合があり、現段階では方言の一事象にとどまっているとよい状態である。

最後に、京阪地域においてもっとも五段化した形のあられやすいのは否定形と使役形であるが、とくに否定形は複数の語形が対立する状況であった。これらの広がりと移り変わりについても、注目する必要がある。

【注】

- 1 ただし、二段動詞の一段化とは別の動機となる。これについて黒木（2012）は、形態音韻文法を用いて、一段動詞の五段化を「母音単語幹の子音単語幹化」、二段動詞の一段化を「母音複語幹の母音単語幹化」と説明する。
- 2 ただし、語によっては命令形・意志形を調査できない語があった。また、淡路島では2013年に一部の地域・世代において使役形についての追加調査をおこなった。
- 3 この地域では中年層と高年層の職業が異なることから、それを考慮する必要もある。ただし、若年層に五段化傾向が強くないため、いずれにせよ定着しなかったとも捉えられる。
- 4 五段化が先に生じた場合、後に「ヘン」が使用されるようになったとしても併用されるのではないかと考えることができる。調査地域においては、春木・恋野・洲本がそれにあたるか。また、『方言文法全国地図』（GAJ）においても、洲本では五段化した形と「ヘン」とが併用されている。
- 5 命令形が五段化している富島・郡家・洲本・由良においても、もとの命令形は「起きる：オキィ」の形であると考えられるため、小林（1996）の説明とは必ずしも一致しない。検討の必要があるが、ひとまずこれらの地域においては連用命令形などが五段化したことに類推して命令形の五段化が生じたと解釈しておく。
- 6 加太の高年層から、「昔の人は（五段化形を）使っていたけど」という話が聞かれた。
- 7 ただし、日高（2014）は「ヤン類の広がり」と定着には、ヤヘン類の存在が関与している」と指摘しているから、前者の説を完全に否定するものではない。また、大阪府の若年層に広がる否定形式「ヤン」は、鳥谷善史（2015）などが言うように、「ラン」との関連は薄く「ヤヘン」から変化した可能性もあるが、アクセントとの対応も考慮する必要がある。
- 8 村内英一（1962）で促がす意をあらわす文末助詞として「ソー（ソラ）」があげられてい

- る。加太に聞かれる「シ」は、この「ソー」と同じ性質のものであると考えられる。
- 9 ことばの変化を内的変化と外的変化（接触変化）の2種類に分けることがある。木部暢子（2008）は、内的変化を「変化の原因が地域の内部にある場合の変化」、外的変化を「変化の原因が地域の外部からもたらされた場合の変化」と定義する。小林隆（1996）は五段化について「ラ行五段化は中央からの伝播によるものではなく東西各地で独自に生じた」としているが、本研究ではこれを内的変化と呼び、小林のいう五段化の進んだ地域とそうでない地域の間に見られる「移行性分布」を外的変化と呼ぶことにする。そうすることによって、両者の関係を捉えることがより容易になると考えるからである。
 - 10 ただし、岩屋については打消や命令表現を「古くは使用した」という証言が聞かれたとしており、一致しないところもある。
 - 11 一段動詞の変化のほうが五段動詞の変化よりも早く進行すること、終止形アクセントにおいて一段動詞のHLLが五段動詞のHLLより分布範囲が狭いことは、金田一春彦（1955）、上野和昭・仙波光明（1993）などの先行研究で指摘されている。
 - 12 筆者が2014年～2016年におこなった調査の結果をもとに作成した。ここでは高年層3名のアクセントを示している。調査語などの詳細は第3節で述べた。

第2節 二拍および三拍動詞の禁止形アクセント

1. はじめに

中世以降の京都において、動詞の連体形が終止形の役割を担うようになり、例えば二拍動詞第1類（「言う」、「着る」など）の基本形アクセントは、終止形 HL から終止連体形 HH へと置き換わった。同じように、三拍動詞第1類の五段活用（「上がる」など）は終止形 HHL にかわって終止連体形 HHH、一段活用（「負ける」など）も終止形 HL にかわって終止連体形 HHH となった。その他についても、表1¹の「終止形」の欄に示した型から「終止連体形」の欄に示した型へと置き換わった。

拍・類別	活用	語例	終止形	終止連体形
2拍・第1類	五段	言う・買う	HL	HH
	一段	着る・寝る	HL	HH
2拍・第2類	五段	書く・脱ぐ	LF	LH
	一段	見る・出る	LF	LH
2拍・第3類	五段	居る	HL	HL
3拍・第1類	五段	上がる・洗う	HHL	HHH
	一段	開ける・負ける	HL	HHH
3拍第2類	五段	動く・頼む	LLF	HLL
	一段	起きる・建てる	LF	HLL
3拍・第3類	五段	歩く	LHL	LHH~LLH

表1. 終止形と終止連体形

禁止の意をあらわす終助詞ナはもともと動詞の終止形に接続するものであったが、鎌倉以後には連体形に接続するようになった²という。現在の方言アクセントをみても、表2³に示したように、確かに京都などでは終止連体形のアクセントが禁止形に反映されている。しかし一方で、現在においても終止形の名残をとどめている地域がみられ、その様相には地域差や世代差があらわれるのである。

拍・類別	活用	終止連体形	否定形	過去形	禁止形	意志形	命令形
2拍・第1類	五段	HH	HHH	HLL	HHL	HHH	HL
	一段	HH	HH	HL	HHL	HHH	F
2拍・第2類	五段	LH	LLH	LLH	LHL	LLH	LF
	一段	LH	LH	HL	LHL	HHH	F
2拍・第3類	五段	HL	HLL	HLL	HLL	HLL	HL
3拍・第1類	五段	HHH	HHHH	HLLL	HHHL	HHHH	HHL
	一段	HHH	HHH	HLL	HHHL	HHHH	HL
3拍第2類	五段	HHH	HHHH	HLLL	HHHL	HHHH	HHL
	一段	LLH	LLH	LHL	LLHL	LLLH	LF
3拍・第3類	五段	LLH	LLLH	LHLL	LLHL	LLLH	LHL

表2. 京都における動詞アクセント

そこで本節では、筆者が複数の地域でおこなった禁止形アクセントの調査結果を報告し、地域差や世代差がみられる原因・理由について考察をおこなう。その際、データを補うため、種々の先行研究を参照することがある。

なお、本節ではこれ以降、もとの終止形を〈古い終止形〉、終止連体形を〈新しい終止形〉と呼んで区別する。

2. 使用するデータについて

本研究で用いる調査結果は、淡路島の岩屋・富島・郡家・洲本・由良・津井・福良と、兵庫県明石市の明石港近辺、徳島県鳴門市鳴門町の亀浦港近辺、大阪府岸和田市春木・岬町深日、和歌山県和歌山市加太・橋本市恋野、高知県高知市の14の地域で得られたものである。2011年から2014年にかけて調査をおこなった。調査人数を以下に示す。

岩屋・富島・郡家・由良・津井・福良：高年層2名、中年層2名、若年層2名
洲本：高年層3名、中年層3名、若年層2名
明石：高年層2名、中年層2名、若年層2名
鳴門：高年層2名、中年層2名、若年層2名
春木：高年層1名、中年層2名、若年層2名
深日：高年層3名、中年層3名、若年層2名
加太：高年層2名、中年層1名、若年層1名
恋野：高年層3名、中年層2名、若年層2名
高知：高年層2名、中年層4名、若年層3名

高知以外の地域における調査語は、二拍動詞第1類「言う・買う・貸す・飛ぶ・抜く・着る・寝る・する」、第2類「脱ぐ・待つ・書く・住む・出る・見る・来る」、第3類「居る（オル）」という16語と、三拍動詞第1類「上がる・洗う・歌う・変わる・探す・漬ける・負ける・割れる・開ける」と第2類「動く・頼む・起きる・落ちる・過ぎる・建てる」という15語の計31語とし、禁止形を含む各活用形アクセントの発音を依頼した⁴。また、高知では二拍動詞第1類「買う・寝る・着る・する」、第2類「書く・見る・出る・来る」、第3類「居る（オル）」という9語と、三拍動詞第1類「歌う・上がる・洗う・探す・負ける・開ける」と第2類「恨む・思う・動く・頼む・起きる・建てる」、第3類「歩く」という13語の、合わせて22語について調査をおこない、それぞれの禁止形を含む各活用形アクセントの発音を依頼した。

3. 調査結果

調査結果を地域別、年齢層ごとにまとめると、表3のようになる。二拍動詞と三拍動詞とで大別し、さらにそれぞれの類別とそこにあらわれるアクセントを示した。表の中の「高・中・若」は高年層・中年層・若年層を意味しており、()内の数字は調査人数をあらわす。

以下では、この表3をもとにして、地域を分けて類別に確認する。

なお、この表3には二拍動詞第1類「する」と第2類「来る」を含んでいない。この2語には、禁止形に「スルナHLLまたはHHLL」と「スナHL」、「クルナLHL」と「クナHL」の両語形があらわれた。

3.1 淡路島・徳島県鳴門市・兵庫県明石市

3.1.1 淡路島における調査結果

まず、岩屋・富島・郡家・洲本・由良・津井・福良における調査結果を確認する。

二拍動詞第1類（「買う」「着る」など）の禁止形には、HLLとHHLがあらわれる。前者は〈古い終止形〉、後者は〈新しい終止形〉に助詞ナが接続したものであり、おおむね高年層にHLL、若年層にHHLが多いといえるが、由良・津井・福良では全体にHLLのほうが多い。これらの地域において置き換わりがそれほど進んでいるわけではないことがわかる。

二拍動詞第2類（「書く」「見る」など）はLHLで一定している⁵。第3類（「居る（オル）」もHLLでおおむね安定している。しかしその中でも、洲本の中年層には「オルナHHL」という型が聞かれることがあった。終止形にはHLしかあらわれないが、京阪地域内では第3類が第1類に合同する動きのみられるところもある⁶から、それとの関連についても考慮する必要があろう。

三拍動詞第1類（「歌う」「負ける」など）の禁止形にも、二拍動詞第1類と同じく〈古い終止形〉を残したHHLLと〈新しい終止形〉を反映したHHHLの2種があらわれる。しかし、やはり由良・津井・福良では全体的にHHLLが多く、置き換わりがそれほど進んでいない。

拍	類別	アクセント	岩屋			富島			郡家			洲本		
			高(2)	中(2)	若(2)	高(2)	中(2)	若(2)	高(2)	中(2)	若(2)	高(3)	中(3)	若(2)
2拍	1	HLL	10	0	0	10	4	4	11	6	8	16	8	13
		HHL	4	14	14	4	10	10	3	8	6	5	13	1
	2	LHL	12	12	12	12	12	12	12	12	12	18	18	12
		HLL	2	2	2	2	2	2	2	2	2	3	2	2
	3	HHL	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
		HLLL	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3拍	1	HHLL	14	0	0	18	9	11	15	2	13	27	8	16
		HHHL	4	18	18	0	9	7	3	16	5	0	19	2
		HLLL	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2	HHLL	4	1	0	4	2	3	2	3	3	6	0	4
		HHHL	0	3	4	0	2	1	2	1	1	0	6	0
		HLLL	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	3	LHLL	2	0	0	4	3	3	7	2	6	9	4	6
		LLHL	6	8	8	4	5	5	1	6	2	3	8	2
		計	58	58	58	58	58	58	58	58	58	87	87	58
拍	類別	アクセント	由良			津井			福良			明石		
			高(2)	中(2)	若(2)	高(2)	中(2)	若(2)	高(2)	中(2)	若(2)	高(2)	中(2)	若(2)
2拍	1	HLL	14	14	12	14	10	13	14	11	13	2	7	4
		HHL	0	0	2	0	4	1	0	3	1	12	7	10
	2	LHL	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12
		HLL	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
	3	HHL	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		HLLL	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0
3拍	1	HHLL	18	18	18	18	18	17	18	16	18	10	4	4
		HHHL	0	0	0	0	0	1	0	2	0	8	7	14
		HLLL	4	0	0	2	0	0	4	0	0	0	1	0
	2	HHLL	0	4	4	2	4	4	0	4	4	2	0	0
		HHHL	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	3	4
		HLLL	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	3	LHLL	6	6	6	6	6	7	6	5	5	1	2	4
		LLHL	2	2	2	2	2	1	2	3	3	7	6	4
		計	58	58	58	58	58	58	58	58	58	58	58	58

拍	類別	アクセント	鳴門			春木			深日			恋野			
			高(2)	中(2)	若(2)	高(1)	中(2)	若(2)	高(3)	中(3)	若(1)	高(3)	中(2)	若(2)	
2拍	1	HLL	14	0	4	0	0	0	21	21	7	0	0	0	
		HHL	0	14	10	7	14	14	0	0	0	21	14	14	
	2	LHL	12	12	12	6	12	12	18	18	6	18	12	12	
	3	HLL	2	0	0	1	2	2	3	3	1	3	2	2	
		HHL	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	3拍	1	HLLL	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
HHLL			15	10	3	0	0	0	27	27	9	4	0	0	
HHHL			3	8	15	9	17	18	0	0	0	23	18	18	
2		HLLL	3	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	
		HHLL	0	1	2	0	0	0	6	6	2	1	0	0	
		HHHL	1	2	2	1	4	4	0	0	0	5	4	4	
3		HLLL	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		LHLL	6	4	2	0	0	0	12	12	4	12	8	8	
		LLHL	2	4	6	4	8	8	0	0	0	0	0	0	
計			58	58	58	29	58	58	87	87	29	87	58	58	
拍		類別	アクセント	加太			高知								
				高(2)	中(1)	若(1)	高(2)	中(4)	若(3)						
2拍	1	HLL	14	7	7	2	2	0							
		HHL	0	0	0	4	10	9							
	2	LHL	12	6	6	8	16	12							
	3	HLL	2	1	1	2	4	3							
		HHL	0	0	0	0	0	0							
	3拍	1	HLLL	0	0	0	0	0	0						
HHLL			18	9	9	0	7	2							
HHHL			0	0	0	12	17	16							
2		HLLL	0	0	0	5	15	9							
		HHLL	4	2	2	3	0	0							
		HHHL	0	0	0	0	1	3							
3		HLLL	0	0	0	0	0	0							
		LHLL	8	4	4	0	0	0							
		LLHL	0	0	0	4	8	6							
計			58	29	29	40	80	60							

表3. 地域・年齢層別の調査結果

三拍動詞第2類の五段活用（「動く」など）の禁止形にはHLLL、HHLL、HHHLという3種があらわれる。この地域は〈動詞アクセント体系〉の変化が進行中であり、HLLLは第2類の（体系変化後の）〈古い終止形〉のアクセントを残したものであると考えられる。特に終止形単独でもHLLがきかれた由良・津井・福良の禁止形HLLLは、それだといえよう。一方で、一段活用（「起きる」など）は既に第3類（3V3「歩く」など）への合同を終えており、HLLLは聞かれなかった。その代わりに、第3類の〈古い終止形〉であるLHLを留めた型と、〈新しい終止形〉であるLLHに置き換わった型の両方があらわれ、由良・津井・福良においては古いLHLLのほうが多い状態であった。

全体的には高年層に古い型が多く、中・若年層に新しい型が多いと見ることができるが、郡家・洲本においては特に、若年層に古い型と同じアクセントが多くあらわれることがあり、不審な結果となった。

3.1.2 鳴門と明石における調査結果

続いて、鳴門および明石における調査の結果を確認する。

鳴門は淡路島（岩屋・富島・郡家・洲本・由良・津井・福良）と同じく、全体的に年齢層が下がるにつれて〈新しい終止形〉に置き換わった型が増える傾向にあり、禁止形の変化が進行していく様子がよくわかる結果である。また、三拍動詞第2類についても、淡路島の南部（由良・津井・福良）と同じ傾向を示す。

明石においては、高年層に比べて中年層に古い型が多くあらわれることがあるなど、不審な箇所もみられるが、全体的にはやはり若年層に新しい型が増えるといえよう。ただし、郡家や洲本のように、若年層に古い型と同じアクセントがあらわれることもあった。

なお、鳴門の中年層と若年層において二拍動詞第3類の禁止形に HHL があらわれるが、洲本と同様、第1類に引かれたものと考えられる。

3.2 大阪府南部および和歌山県北部

次に、大阪府南部（春木・深日）および和歌山県北部（恋野・加太）の調査結果についてみることにする。

深日と加太においては、年齢層による違いがみられなかった。二拍動詞には〈新しい終止形〉のアクセントに置き換わった型はあらわれず、すべてに〈古い終止形〉のアクセントを残している。また、この二つの地域はすでに〈動詞アクセント体系〉の変化を終えており、第2類五段活用は第1類と、第2類一段活用は第3類と合同している。禁止形については、五段活用には第1類の〈古い終止形〉を残した型、一段活用には第3類の〈古い終止形〉を残した型である LHLL があらわれた。

〈動詞アクセント体系〉の変化は春木・恋野においても既に完了しており、年齢層による違いもほとんどないが、一方でこの二つの地域では禁止形に新しい型が顕著にあらわれるという結果となった。

恋野の三拍動詞第2類一段活用の禁止形に LHLL しか聞かれないのは、この地域の終止形が若年層に至るまで LLH ではなく LHL であるため（第3類「歩く」も LHL）であると考えられ、ここにだけ〈古い終止形〉の名残がみられるわけではない。また、恋野の高年層には、三拍動詞第1類および第2類の五段活用の禁止形において、数は少ないが HHL のあらわれることがあった。すなわち、この地域においては、終助詞ナに接続する形が〈古い終止形〉から〈新しい終止形〉へほぼ置き換わったということが出来る。

3.3 高知市

最後に、高知における調査結果を確認する。

他の地域と同様、おおむね年齢層が下がるのにしたがって、〈新しい終止形〉のアクセントを反映した型が多くなる傾向にあるといえる。

また、この地域は〈動詞アクセント体系〉の変化がほとんどすすんでいない状態であるが、第2類五段活用の禁止形に HHL や HHL といった第1類アクセントと同じ型があらわれることもあった。これは、鳴門の中・若年層と洲本の中年層が二拍動詞第3類「居る（終止形

はHL)」の禁止形をHHLと発音することがあったのと同じように考えられる。さらにいえば、第1類と合同していく兆候であるとみることができよう。ただし第2類の一段活用の語には、そのような型はみられず、いずれの年齢層においてもHLLLしかあらわれない。

4. 変化の時期とその原因

4.1 問題となること

以上で確認した結果から、調査地域を大きく2つに分けることができる。

A. 禁止形に、〈古い終止形〉から〈新しい終止形〉への置き換わりがみられる地域

B. 禁止形に〈古い終止形〉を留めている地域

ほとんどの地域がAにあてはまり、Bにあてはまるのはまったく変化する様子がみられない深日・加太⁷である。若年層に至るまで〈古い終止形〉のほうが多くあらわれる由良・津井・福良はBに含めてもいいように思われるが、二拍動詞第1類や三拍動詞第3類に変化していく様子がみられることから、ひとまずAとする。

問題となるのは、この地域差を生む原因は何であるのかということである。すなわち、〈古い終止形〉から〈新しい終止形〉に置き換わる時期が地域によって異なる理由として何が考えられるのかということである。また、鎌倉以降には連体形に禁止の助詞ナが接続するという傾向がみられるようになっていたにもかかわらず、なぜ現在も高年層～若年層に差のあらわれる地域があるのか（何をきっかけに変化したのか）ということも明らかではない。

また、郡家や洲本などのように一旦は置き換わりが進んだと思われるが、若年層で〈古い終止形〉と同じ型の増える地域がみられ、その理由も判然としない。

本節では、これらの問題について考えてみたい。その際、以下の4点を軸に据える。

- ① 〈新しい終止形〉のアクセントへの置き換わりが起きた時期
- ② 上記の変化が起きた理由
- ③ 一旦置き換わりが進んだが、その後に〈古い終止形〉と同じ型が増えた地域について、その理由
- ④ ①の変化がみられない地域について、その理由

続く4.2.では①について述べ、4.3.以降で②③④について考察をおこなう。

4.2 変化の時期

禁止形アクセントに〈古い終止形〉から〈新しい終止形〉への置き換わりがみられる地域では、おおよそ高～中年層でこの変化が進んでいることがわかる。表3を今一度確認し、仮に半数以上（50%以上）になった時点で置き換わったとすると、各地域の変化の時期は次のようになる。

高年層：春木、恋野、（明石）、（高知）

中年層：（岩屋）、（富島）、（郡家）、洲本、鳴門

ほとんど変化なし：由良、津井、福良

明石では三拍動詞第 1 類における禁止形アクセントの変化が緩やかであり（これのみ中年層）、高知では三拍動詞第 2 類は変化していないが、全体的にみると高年層で置き換わりが生じている。つまり、春木や恋野、明石、高知における変化が比較的早いといえる。それに続いて、淡路島の北部と鳴門で変化が進行しているが、岩屋と富島は三拍動詞第 2 類の一段活用の禁止形アクセントに生じた変化が他の類よりも早くに進んでいるとみることができる（高年層）。また、鳴門で三拍動詞第 1 類に新しいアクセントが多くなるのは若年層であるから、明石と同じようにこの類の変化の進行が遅いといえる。

佐藤栄作（1989）編は 12 地点において 1902 年～1924 年生まれの話者のアクセントを録音したものであるが、京阪式アクセント地域のうち禁止形アクセントが〈新しい終止形〉に置き換わっているのは京都⁸・徳島のみで、大阪⁹・高知¹⁰などはまだ〈新しい終止形〉が禁止形にあらわれない傾向にある。

また、高知について加藤望・中井幸比古（2009）をみると、1946 年生まれの話者に〈新しい終止形〉を反映した禁止形アクセントがあらわれる傾向がある。筆者が高知において調査した高年層の話者は 60 代であるから、ちょうどこのあたりで置き換わったとみてよいであろう。

その他の地域については言及している先行研究がほとんどないが、上に示した時点で置き換わったとすると、京都などとは時間的な隔りがあるといえる。

4.3 変化の原因

4.3.1 三拍動詞第 2 類との関わり

禁止形アクセントの変化は、既に何度も述べているとおり、助詞ナに接続する終止形の部分が〈古い終止形〉から〈新しい終止形〉に置き換わっただけという単純なものである。しかしながら、終止形単独の場合とアクセント型を異にするという状態は、終止形アクセントが新しいほうへ変化したときから続いていることであって、4.2. で確認したように、長い間その状態を保ってきたと思われる地域も多い。つまり、今その変化が観察できる地域があるのには何らかの理由が存在するはずである。

ところで、他の品詞をみてみると、型としては HHL から HLL、HHHL から HHLL へ変化するという流れの方が自然であり¹¹、禁止形のアクセント変化とは異なる。動詞の他の活用形アクセントを確認してみても、禁止形と同じような変化が進んでいるものはなさそうである。やはりこれは終止形以外の他の活用形や品詞とは無関係の変化であり、アクセント型の変化の流れとは切り離して考える必要がある。

先に述べた変化の時期について今一度確認してみると、淡路島・明石・鳴門では三拍動詞第 2 類一段活用の禁止形アクセントにおける変化が、他より少しばかり早く生じているように見える。一方で、三拍動詞第 1 類の禁止形アクセントの変化は遅い傾向にある。このことから、まず第 2 類の一段活用が第 3 類へ、少し遅れて五段活用が第 1 類へ合同することによって、第 1 類と第 3 類に所属する語がそれぞれ増えたために、終止形単独のアクセン

トと禁止形アクセントとの違いが意識され、禁止形アクセントの変化が引き起こされたと考えられることができる。

しかしながらそうすると、春木や恋野はともかくとして、高知には〈動詞アクセント体系〉の変化はほとんどみられないのに、第1類や第3類の禁止形に〈新しい終止形〉のアクセントがあらわれるから、この地域には別の原因が働いていると考えなければならなくなる。変化の原因は地域に関わらず共通しているはずだという前提に立つと、この変化が禁止形のアクセント変化の原因となったとは考えられないのである。つまり、上に述べたことは、変化そのものの原因とはなりえないと考えるほうが妥当であろう。

4.3.2 連用命令禁止形との関わり

次に、同じ禁止をあらわす表現の中でも、命令の意をあらわす連用形（「書き（書く）」「上がり（上がる）」など）に助詞ナが接続した形（「書きな」「上がりな」など）¹²に注目してみたい。村上謙（2003）は種々の資料分析を経て、この形が近世後期、宝暦（1751～1763年）以降における上方の遊里に端を発するものであるとしている。さらに、その成立過程には近世上方における助詞ナの接続形式の多様性（一段活用の連用形に接続することがあった、など）が関与しており、それが四段活用の語などにまで及んだと述べる。

この連用命令禁止形のアクセントは現代の淡路島などでは「買いな HHL」「書きな LHL」「あがりな HHL」「起きな LHL」「歩きな LLHL」となり¹³、〈新しい終止形〉に置き換わった後の禁止形アクセントと一致する。連用命令禁止形が近世後期に遊里で生じて一般社会に広まり、使用される地域も徐々に拡大したと考えれば、その時期は4.2.で述べた禁止形の変化時期とそれほど相違しないといえそうである。つまり、禁止形の変化は、意味の近い連用命令禁止形の出現によって進んだと考えられる¹⁴。

4.4 変化の妨げとなるものは何か

一方で、深日や加太のように禁止形アクセントの変化がみられない地域が存在する。これらの地域においても連用命令禁止形は用いられることがあるが、調査結果に〈古い終止形〉を留めたアクセントしかきかれなかった。一旦は4.3.で述べたような理由によって変化したものの現在ではあらわれないのか、それともそもそも変化していないのかについては明らかでないが、前者にしては揺れがない結果であったため、これらの地域では置き換わりが起こらなかったというふうを考えることにする。

また、郡家・洲本などのように一旦は変化したものの、若年層に〈古い終止形〉を留めたものと同じ型が多くあらわれる傾向にある地域もみられた。禁止形のアクセント変化は流れとして、〈古い終止形〉から〈新しい終止形〉へという一貫したものであるといえ、〈古い終止形〉のアクセントが復活したとは考えにくいから、何か別の理由によるものであろう。では、上記のような地域が存在する理由として、何があげられるだろうか。

4.3.で触れたように、三拍名詞第2・4類（「女」「宝」など）や三拍形容詞第1類（「赤い」

「暗い」など)には HHL から HLL、四拍形容詞(「悲しい」「厳しい」など)には HHHLL から HHHLL へ変化するという傾向がある程度みられる。禁止形を終止形に助詞ナが接続したものと捉えるのではなくひとまとまりとしてみた場合¹⁵、例えば二拍動詞第 1 類の HLL や三拍動詞第 1 類の HHHLL などはこちらのアクセントと同じ型であることになる。つまり、品詞にかかわらずみられる〈型の統合〉(H3 型と H2 型、あるいは H2 型と H1 型)と同種のものであり、型として安定していると捉えることができよう¹⁶。

また、三拍動詞第 2 類一段活用や第 3 類の禁止形 LHLL というのは、例えば四拍形容詞に LLHL(「四角い」「おいしい」など)があるために、HLL などと同じく安定したアクセントであるとは必ずしもいえないが、LHL で安定している二拍動詞第 2 類の禁止形と同じ型(L2 型)であるということで説明がつきそう¹⁷である。

5. おわりに

本節でこれまで述べてきたことをまとめると、以下のようになる。

- (1) 禁止形アクセントの変化は〈古い終止形〉から〈新しい終止形〉への置き換わることによって生じたものであるが、地域によって現在でもその様相には差があり、大きく「変化している地域」と「変化していない地域」とに分けることができる。
- (2) 「変化している地域」のうち、中年層と若年層を比べた時、若年層に〈古い終止形〉を留めた型と同じアクセントのあらわれる地域が存在する。
- (3) 「変化している地域」であっても、禁止形アクセントの変化の時期は、それぞれの地域によって異なることがある。
- (4) 三拍動詞第 2 類一段活用の禁止形アクセントの変化が、他より少しばかり早く生じる傾向がみられ、それには三拍動詞第 2 類のアクセント変化が関係している可能性がある。
- (5) 禁止形アクセントの変化の原因として、近世後期に生じた連用命令禁止形のアクセントの影響が考えられる。
- (6) 品詞にかかわらずみられる〈型の統合〉が、「変化していない地域」と(2)の地域が存在する理由の一つであると考えられる。

(5)については、連用命令禁止形の使用が女性に偏っているのではないか、それぞれの地域でどの程度・いつごろから使用されているのかということについて、きちんと確認できていないところがあり、推測で補った部分も多い。また、(6)についても、ではなぜ連用命令禁止形という意味的にも形式的にも類似するものより型の安定性が優先されるのか、今後どの地域でも郡家・洲本などと同じような状態になっていくのかについて、現段階では明らかにできない。これらを今後の課題とし、引き続き調査をおこなう。

【注】

- 1 秋永一枝ほか(1998) を参照し、筆者が作成した。なお、「終止連体形」のアクセントとして、近世期のアクセントを示した。
- 2 秋永一枝(1991:171)「動詞及び動詞型活用の助動詞の終止形につくが、鎌倉以後は連体形にも接続するようになる」など。
- 3 佐藤栄作(1989) 編と中井幸比古(2002ab)、上野和昭(2011) を参照し、筆者が作成した。二拍動詞第3類(2V3「居る(オル)」を例として各活用形の語形を示すと、否定形「オラン」、過去形「オッタ」、禁止形「オルナ」、意志形「オロー」、命令形「オレ」となる。
- 4 三拍動詞第3類「歩く」はすべての人に発音してもらったわけではないので結果には含まないが、第2類一段活用と同じ傾向を示す。
- 5 淡路島以外の地域でも同様。そのため、以下では言及しない。
- 6 佐藤編(1989)によれば大阪市の高年層などで「オルHH」、「オランHHH」など第1類と同一のアクセントが聞かれる。
- 7 同じく和歌山市内の、加太よりも和歌山市駅に近いところに位置する榎原で調査した中年層・若年層1名ずつにも〈新しい終止形〉に置き換わった禁止形アクセントは聞かれなかった。
- 8 文献上のあらわれ方を考慮すると、変化の時期はさらに前であると考えたほうがよいか。
- 9 三拍動詞第1類・第2類の五段活用にHLLLという型があらわれている。ただし、二拍動詞第1類や三拍動詞第3類などは〈古い終止形〉に助詞ナが接続したものと解される状態である。
- 10 元のデータでは三拍動詞第1類などでHHMLとされている箇所があるが、上野(2011)に倣ってHHLLと解釈する。
- 11 三拍名詞第2・4類、四拍形容詞など。4.5.で取り上げる。
- 12 村上謙(2003)などでは、命令の意をあらわす連用形を「連用形命令法」と、それに助詞ナが接続した形を「連用形禁止法」と称している。本節では前者を「連用命令形」、後者を「連用命令禁止形」と呼び、他の活用形と並べて扱う。
- 13 高知では加藤・中井(2009)によると「書きなLHH」「荒らしなHHHH」「建てなLHH・LLH」「歩きなLHHH」で、ナが低接しないが、筆者の調査では「書きなLHL」「あがりなHHHL」「起きなLHL」「歩きなLLHL」も聞かれる。同じく加藤・中井(2009)(中井2002abの補足)によれば、京都では淡路島などと同じアクセントとなる。
- 14 連用命令禁止形と禁止形は同じ「禁止」を意味するものであるが、前者のほうがやさしく命令する表現であるのに対して、後者は強い命令をあらわす。そのため、両者のニュアンスの違いをわかりやすくするために異なるアクセント型を保つ可能性も考えられる(4.5.の理由となる可能性も存する)が、生じた時期や意味そのものには違いがないことから、本節ではその可能性についてひとまず除外することとする。

- 15 助詞ナは元来、動詞との結合度が弱かったと考えられる（上野 2011 など）。しかし、例えば終止形がルで終わる語の禁止形に「見んな（見るな）」「あがんな（あがるな）」などのような形があらわれることがあるから、結合度は強まっていると捉えることができる。
- 16 ただし、第 1 章第 2 節で述べたように、〈型の統合〉が必ずしも強い力をもつわけではないため、ほかの理由も考える必要があるだろう。なお、明石や春木の中年層に聞かれた三拍動詞第 1 類・第 2 類五段活用の HLLL は、HHLL から下がる位置がさらに一つ前へ動いたものとも考えられる。
- 17 三拍名詞においても同じような傾向がみられる。上野和昭（2011、p. 500）では、「いわゆる「体系変化」から「近世」の間」に HHL から LHL へ移行したものとして「みどり」「戦（いくさ）」などがあげられている。現代方言においても第 1 章第 2 節で述べたように、三拍名詞第 2・4 類に HHL から LHL へ変化するものが一定数存在すること（語数がある程度多いこと）、LHL から他のアクセントへ変化する語がほとんどみられないことなどから、H1 型と同じく L2 型が安定しているといえそうである。

第3節 三拍動詞第2類のアクセント変化

1. はじめに

1.1 本節の目的

「上がる」「動く」「歩く」などのように現代語で終止形が三拍となる動詞（三拍動詞）は、アクセントによって3種類にわけられる。京阪地域においては表1¹に示した体系が伝統的で、たとえば終止形のアクセントは第1類 HHH（上がる、負けるなど）、第2類 HLL（動く、起きるなど）、第3類 LHH（後に LLH、歩くなど）となる。

類別(活用)	語例	終止形	否定形	過去形	禁止形	意志形	命令形
第1類(四段)	上がる	HHH	HHHH	HHLL	HHLL	HHHH	HHL
第1類(二段)	負く	HHH	HHH	HLL	HHLL	HHH	HL
第2類(四段)	動く	HLL	HHLL	HLLL	HLLL	HHLL	HLL
第2類(二段)	起く	HLL	HLL	LHL	HLLL	HLL	LF
第3類	歩く	LHH	LHHH	LHLL	LHLL	LHHH	LHL

表1. 江戸中期の京都アクセント

しかし、近世後期以降、第2類のアクセントに変化が生じ、京都などにおいては表2のように、五段活用である「動く、余る」などが各活用形も含めて第1類と同じ型になり、一段活用である「起きる、落ちる」などが第3類と同じ型になった。ただし、同じ京阪式アクセント地域であっても、高知などにおいては、まだこの変化はさほど進んでおらず、淡路島などでは変化の途中であるなど、地域によって進行の度合には違いがある。

類別(活用)	語例	終止形	否定形	過去形	禁止形	意志形	命令形
第1類(五段)	上がる	HHH	HHHH	HLLL	HHHL	HHHH	HHL
第1類(一段)	負ける	HHH	HHH	HLL	HHHL	HHHH	HL
第2類(五段)	動く	HHH	HHHH	HLLL	HHHL	HHHH	HHL
第2類(一段)	起きる	LLH	LLH	LHL	LLHL	LLLH	LF
第3類	歩く	LLH	LLLH	LHLL	LLHL	LLLH	LHL

表2. 現代の京都アクセント

本節では、筆者が調査をおこなったいくつかの地域における三拍動詞第2類のアクセントについて報告をおこなう。そして、その調査結果と以下にあげる先行研究で述べられていることを比較し、三拍動詞第2類のアクセント変化がどのように進行したかについて検討する。

1.2 先行研究

京阪地域における動詞のアクセントで特に問題となるのは、三拍動詞第2類（動く、起きるなど）のアクセント変化である。上に示した表2からもわかるように、現代京都では各活用形も含めて第2類は五段活用の語が第1類（上がる、開けるなど）と同じ型に、一段活用の語は第3類（歩くなど）と同じ型に変化しているが、一段活用のアクセント変化のほうが先に完了したことも含め、その原理は何かということが問題である。

この問題については、これまでさまざまな先行研究において言及されてきた。たとえば、服部四郎（1931）は、第2類の一段活用には否定形以外に HLL・・・(H1型)の形になるも

のがなく、多くが LHL・・・(L2 型) であることから、活用形のアクセントの類推により、終止形 HLL (H1 型) のアクセントを維持することが難しくなると述べる。そして五段活用については、第 1 類と第 2 類の間で H2 型と H1 型が混同した結果、第 2 類の終止形のアクセントも変化したとする。

また、奥村三雄 (1981、1990) においても、連用形を中心とした活用形アクセントなどが、たとえば第 1 類の過去形なら HHLL から HLLL へ変化して第 2 類五段活用と合併した結果、その影響で他の活用形も次第に合併したと推測する。さらに、第 2 類一段活用の変化には連用形などの活用形アクセントが低起式であることが関与しているのだという。

これらをふまえて、上野和昭 (2011) は HHL から HLL、あるいは HHLL から HLLL のような H2 型と H1 型との統合 (過去形・否定形・意志形・命令形) がきっかけになったとする。そして、この変化によって、第 2 類五段活用と第 2 類一段活用とは過去形と命令形以外がほぼ同じ型となったが、一段活用は連用形が低起式であったため、その接近に「反発」することで第 3 類へ合同し、その後五段活用が第 1 類へ合同したと述べる。上野 (1993) では、五段活用と一段活用の変化の時期について、「両方の変化の時間的な差は、これを大勢の転ずるところで比較すれば、20 年から 30 年程度と言えようか」としている。この時間的な差が生じた理由についても、上野 (2011) によって説明されているといえる。

一方、新田哲夫 (2004、2005) は「接続連用形」(連用形に付属語がついた形式：動いてみる、起きますなど) に着目し、この多くが本来の連用形の式を保ったまま無核化してあらわれる²ことから、第 2 類のアクセント変化はその類推によって生じたと述べている。また、第 2 類一段活用と五段活用の変化の時期が異なることについては、一段活用の変化が「式保存」であり、それを前提として五段活用の「核の不統一」を解消する変化が生じたためであるとする。

中井幸比古 (2012) は、上野 (2011) に対する書評であるが、その中で三拍動詞第 2 類のアクセント変化について数点の指摘をおこなっている。それによれば、H2 型と H1 型との統合は第 2 類のアクセント変化に先行しなかった場合や、さほど強く生じなかった場合があり、また、第 2 類一段活用と五段活用の変化が始まる時期にはそれほど差がないのではないかという。そして、「諸活用形からの類推説」はこれらに「抵触する点が少ない」と述べている。

本節では、上記の先行研究をふまえた上で、三拍動詞第 2 類のアクセント変化について考察をおこなう。先行研究との違いは、本節で用いるのが複数の地域で高年層～若年層に対しおこなった調査の結果であるという点であり、それによってみえることもあると考えられる。

2. 使用するデータについて

本研究で用いる調査結果は、淡路島の岩屋・富島・郡家・洲本・由良・津井・福良と、兵庫県明石市の明石港近辺、徳島県鳴門市鳴門町の亀浦港近辺、大阪府岸和田市春木・岬町深

日、和歌山県和歌山市加太・橋本市恋野、高知県高知市の14の地域で得られたものである。2011年から2015年にかけて調査をおこなった。調査人数を以下に示す。

岩屋：高年層5人・中年層6人・若年層3人

富島・郡家・由良・津井・福良：高年層2人・中年層2人・若年層2人

洲本：高年層3人・中年層3人・若年層2人

明石・鳴門：高年層2人・中年層2人・若年層2人

春木：高年層1人・中年層2人・若年層2人

深日：高年層3人・中年層3人・若年層2人

恋野：高年層3人・中年層2人・若年層2人

加太：高年層2人・中年層1人・若年層1人

高知：高年層2人・中年層4人・若年層5人

高知以外の地域における調査語は、三拍動詞第1類「上がる・洗う・歌う・変わる・探す・漬ける・負ける・割れる・開ける」と第2類「動く・頼む・起きる・落ちる・過ぎる・建てる」の終止形を含む各活用形である。また、高知では三拍動詞第1類「歌う・上がる・洗う・探す・負ける・開ける」と第2類「恨む・思う・動く・頼む・起きる・建てる」、第3類「歩く」の各活用形と、第2類の語が前に位置する複合動詞「思い出す・動きまわる・受け継ぐ・起き上がる」、第3類の語が含まれる複合動詞「歩きまわる」について調査をおこなった。

さらに、岩屋・福良・深日においては二度目の調査を実施し、高知でのみ調査を実施した語について発音を依頼した。

3. 調査結果

次の pp. 76-79 で示す表3～表6は、それぞれの地域・年齢層に聞かれたアクセント型をまとめたものである。表中、年齢層の後ろの（）は調査人数をあらわす。複数のアクセント型が聞かれたところでは、より多くあらわれたものを左側に示しているが、複数人に対して調査をおこなったところで、一人の一語にのみ違う型があらわれた場合は省略した。（）は、両型が同程度聞かれたことをあらわしている。なお、意志形は日常的にはアガロ（上がろう）・オキヨ（起きよう）のように短呼形が使用されるため、長音の部分で[]に入れて表示した。一段活用の命令形は〈〉内が共通語形であるが、方言形はアケェ（開けろ）・オキィ（起きろ）などというふうを実現する。

また、表1と比較して変化しているとみられる部分を斜体・太字であらわしている。

3.1 三拍動詞第1類

3.1.1 五段活用

まず、三拍動詞第1類の五段活用についての結果を活用形ごとにまとめると、表3のようになる。

表1と比較すると、過去形（タ形）と禁止形（終止形+助詞ナ）に違いがみられることがわかる。過去形は福良と鳴門の中年層（高年層）以外でHLLLというアクセントとなっており、これは三拍動詞第2類（五段活用）と同一の型（H1型）である。禁止形はHHLLが古くHHHLが新しいと考えられ、後者は現在の終止形アクセントを反映させたものと捉えられる。

その他、否定形にHHLL（福良の若年層）や、命令形にHLL（明石の高・中年層）が多くあらわれることがあったが、全体的にはおおむね安定しているといえよう。

3.1.2 一段活用

次に、三拍動詞第1類の一段活用についての結果をまとめると、表4³のようになる。

全体的に五段活用よりもさらに安定しており、違いがあらわれるのは禁止形においてのみである。

3.2 三拍動詞第2類

3.2.1 五段活用

三拍動詞第2類の五段活用について、その結果をまとめると表5のようになる。

淡路島北部（岩屋・富島・郡家）、大阪府南部（春木・深日）および和歌山県北部（恋野・加太）においては、高年層で既に第1類とおおむね合同していることがわかる。一方で、高知は全年齢層に古いアクセントを残しており、合同していく様子はあまりあられない。ただし、若年層のうちでも特に20代の話者には否定形・過去形・禁止形に第1類（五段活用）と同じ型がきかれ、意志形に第2類（一段活用）と同じ型が聞かれることがあった。

それ以外の地域について活用形ごとにみると、終止形に古いアクセントが多くあらわれるのは由良・津井・福良の高年層と鳴門の高・中年層である。否定形にHHLLが多かったのは由良の高年層と福良・鳴門の高・中年層である。過去形には全体的にHLLLが多くあらわれる傾向にあるが、第1類と区別が残っていると捉えることができるのは福良の高年層と鳴門の高・中年層のみで、他はすでに合同している、あるいは合同しつつあると考えられる。その他、禁止形・命令形には由良・津井・福良・鳴門の高年層に（命令形は鳴門の中年層にも）古い型があらわれた。

なお、明石については否定形と命令形に古いものと同じアクセントが多くあらわれたが、これについては保留とする。

3.2.2 一段活用

三拍動詞第2類の一段活用についての結果をまとめると、表6のようになる。

ほとんどの地域で、すべての活用形が低起式の第3類と合同を終えている。まだ合同していないのは、高知のみであった。しかし、高知においても20代の話者に終止形・否定形・禁止形・意志形に第3類と同じアクセントが聞かれ、変化の進みつつある様子がうかがえる。

地域	年齢層	終止形	否定形	過去形	禁止形	意志形	命令形
春木	高(1)	HHH	HHHH	HLLL	HHHL	HHH[H]	HHL
	中(2)	HHH	HHHH	HLLL	HHHL	HHH[H]	HHL
	若(2)	HHH	HHHH	HLLL	HHHL	HHH[H]	HHL
深日	高(3)	HHH	HHHH	HLLL	HHLL	HHH[H]	HHL
	中(3)	HHH	HHHH	HLLL	HHLL	HHH[H]	HHL
	若(2)	HHH	HHHH	HLLL	HHLL	HHH[H]	HHL
恋野	高(3)	HHH	HHHH	HLLL	HHHL	HHH[H]	HHL
	中(2)	HHH	HHHH	HLLL	HHHL	HHH[H]	HHL
	若(2)	HHH	HHHH	HLLL	HHHL	HHH[H]	HHL
加太	高(2)	HHH	HHHH	HLLL	HHLL	HHH[H]	HHL
	中(1)	HHH	HHHH	HLLL	HHLL	HHH[H]	HHL
	若(1)	HHH	HHHH	HLLL	HHLL	HHH[H]	HHL
明石	高(2)	HHH	HHHH	HLLL	HHLL	HHH[H]	HLL
	中(2)	HHH	HHHH	HLLL	HHHL・HHLL	HHH[H]	HLL
	若(2)	HHH	HHHH	HLLL	HHHL	HHH[H]	HHL
岩屋	高(5)	HHH	HHHH	HLLL	HHLL	HHH[H]	HHL
	中(6)	HHH	HHHH	HLLL	HHHL	HHH[H]	HHL
	若(3)	HHH	HHHH	HLLL	HHHL	HHH[H]	HHL
富島	高(2)	HHH	HHHH	HLLL・HHLL	HHLL	HHH[H]	HHL
	中(2)	HHH	HHHH	(HLLL・HHLL)	HHLL・HHHL	HHH[H]	HHL
	若(2)	HHH	HHHH	HLLL	HHLL	HHH[H]	HHL
郡家	高(2)	HHH	HHHH	HLLL	HHLL	HHH[H]	HHL
	中(2)	HHH	HHHH	HLLL	HHHL	HHH[H]	HHL
	若(2)	HHH	HHHH	HLLL	HHLL	HHH[H]	HHL
洲本	高(3)	HHH	HHHH	HHLL・HLLL	HHLL	HHH[H]	HHL
	中(3)	HHH	HHHH	HLLL・HHLL	HHHL	HHH[H]	HHL
	若(2)	HHH	HHHH	HLLL	HHLL	HHH[H]	HHL
由良	高(2)	HHH	HHHH	HHLL・HLLL	HHLL	HHH[H]	HHL
	中(2)	HHH	HHHH	HLLL	HHLL	HHH[H]	HHL
	若(2)	HHH	HHHH	HLLL	HHLL	HHH[H]	HHL
津井	高(2)	HHH	HHHH	(HHLL・HLLL)	HHLL	HHH[H]	HHL
	中(2)	HHH	HHHH	HLLL・HHLL	HHLL	HHH[H]	HHL
	若(2)	HHH	HHHH	HLLL	HHLL	HHH[H]	HHL
福良	高(2)	HHH	HHHH	HHLL・HLLL	HHLL	HHH[H]	HHL
	中(2)	HHH	HHHH	HHLL・HLLL	HHLL	HHH[H]	HHL
	若(2)	HHH	HHLL	HHLL・HLLL	HHLL	HHH[H]	HHL
鳴門	高(2)	HHH	HHHH	HLLL・HHLL	HHLL	HHH[H]	HHL
	中(2)	HHH	HHHH	HHLL・HLLL	HHLL	HHH[H]	HHL
	若(2)	HHH	HHHH	HLLL	HHHL	HHH[H]	HHL
高知	高(2)	HHH	HHHH	HHLL	HHHL	HHH[H]	HHL
	中(4)	HHH	HHHH	HHLL	HHHL	HHH[H]	HHL
	若(5)	HHH	HHHH	HHLL	HHHL	HHH[H]	HHL

表3. 第1類五段活用

地域	年齢層	終止形	否定形	過去形	禁止形	意志形	命令形
春木	高(1)	HHH	HHH	HLL	HHHL	HHH[H]	HL<HHL>
	中(2)	HHH	HHH	HLL	HHHL	HHH[H]	HL<HHL>
	若(2)	HHH	HHH	HLL	HHHL	HHH[H]	HL<HHL>
深日	高(3)	HHH	HHH	HLL	HHLL	HHH[H]	HL<HHL>
	中(3)	HHH	HHH	HLL	HHLL	HHH[H]	HL<HHL>
	若(2)	HHH	HHH	HLL	HHLL	HHH[H]	HL<HHL>
恋野	高(3)	HHH	HHH	HLL	HHHL	HHH[H]	HL<HHL>
	中(2)	HHH	HHH	HLL	HHHL	HHH[H]	HL<HHL>
	若(2)	HHH	HHH	HLL	HHHL	HHH[H]	HL<HHL>
加太	高(2)	HHH	HHH	HLL	HHLL	HHH[H]	HL<HHL>
	中(1)	HHH	HHH	HLL	HHLL	HHH[H]	HL<HHL>
	若(1)	HHH	HHH	HLL	HHLL	HHH[H]	HL<HHL>
明石	高(2)	HHH	HHH	HLL	HHLL	HHH[H]	HL<HHL>
	中(2)	HHH	HHH	HLL	HHHL・HHLL	HHH[H]	HL<HHL>
	若(2)	HHH	HHH	HLL	HHHL	HHH[H]	HL<HHL>
岩屋	高(5)	HHH	HHH	HLL	HHLL	HHH[H]	HL<HHL>
	中(6)	HHH	HHH	HLL	HHHL	HHH[H]	HL<HHL>
	若(3)	HHH	HHH	HLL	HHHL	HHH[H]	HL<HHL>
富島	高(2)	HHH	HHH	HLL	HHLL	HHH[H]	HL<HHL>
	中(2)	HHH	HHH	HLL	HHLL・HHHL	HHH[H]	HL<HHL>
	若(2)	HHH	HHH	HLL	HHLL	HHH[H]	HL<HHL>
郡家	高(2)	HHH	HHH	HLL	HHLL	HHH[H]	HL<HHL>
	中(2)	HHH	HHH	HLL	HHHL	HHH[H]	HL<HHL>
	若(2)	HHH	HHH	HLL	HHLL	HHH[H]	HL<HHL>
洲本	高(3)	HHH	HHH	HLL	HHLL	HHH[H]	HL<HHL>
	中(3)	HHH	HHH	HLL	HHHL	HHH[H]	HL<HHL>
	若(2)	HHH	HHH	HLL	HHLL	HHH[H]	HL<HHL>
由良	高(2)	HHH	HHH	HLL	HHLL	HHH[H]	HL<HHL>
	中(2)	HHH	HHH	HLL	HHLL	HHH[H]	HL<HHL>
	若(2)	HHH	HHH	HLL	HHLL	HHH[H]	HL<HHL>
津井	高(2)	HHH	HHH	HLL	HHLL	HHH[H]	HL<HHL>
	中(2)	HHH	HHH	HLL	HHLL	HHH[H]	HL<HHL>
	若(2)	HHH	HHH	HLL	HHLL	HHH[H]	HL<HHL>
福良	高(2)	HHH	HHH	HLL	HHLL	HHH[H]	HL<HHL>
	中(2)	HHH	HHH	HLL	HHLL	HHH[H]	HL<HHL>
	若(2)	HHH	HHH	HLL	HHLL	HHH[H]	HL<HHL>
鳴門	高(2)	HHH	HHH	HLL	HHLL	HHH[H]	HL<HHL>
	中(2)	HHH	HHH	HLL	HHLL	HHH[H]	HL<HHL>
	若(2)	HHH	HHH	HLL	HHHL	HHH[H]	HL<HHL>
高知	高(2)	HHH	HHH	HLL	HHHL	HHH[H]	HL<HHL>
	中(4)	HHH	HHH	HLL	HHHL	HHH[H]	HL<HHL>
	若(5)	HHH	HHH	HLL	HHHL	HHH[H]	HL<HHL>

表4. 第1類一段活用

地域	年齢層	終止形	否定形	過去形	禁止形	意志形	命令形
春木	高(1)	HHH	HHHH	HLLL	(HLLL・HHHL)	HHH[H]	HHL
	中(2)	HHH	HHHH	HLLL	HHHL	HHH[H]	HHL
	若(2)	HHH	HHHH	HLLL	HHHL	HHH[H]	HHL
深日	高(3)	HHH	HHHH	HLLL	HHLL	HHH[H]	HHL
	中(3)	HHH	HHHH	HLLL	HHLL	HHH[H]	HHL
	若(2)	HHH	HHHH	HLLL	HHLL	HHH[H]	HHL
恋野	高(3)	HHH	HHHH	HLLL	HHHL	HHH[H]	HHL
	中(2)	HHH	HHHH	HLLL	HHHL	HHH[H]	HHL
	若(2)	HHH	HHHH	HLLL	HHHL	HHH[H]	HHL
加太	高(2)	HHH	HHHH	HLLL	HHLL	HHH[H]	HHL
	中(1)	HHH	HHHH	HLLL	HHLL	HHH[H]	HHL
	若(1)	HHH	HHHH	HLLL	HHLL	HHH[H]	HHL
明石	高(2)	HHH	(HHLL・HHHH)	HLLL	(HHLL・HHHL)	HHH[H]	HLL・HHL
	中(2)	HHH	HHLL	HLLL	HHHL	HHH[H]	HLL
	若(2)	HHH	HHLL	(HHLL・HLLL)	HHHL	HHH[H]	HHL
岩屋	高(5)	HHH	HHHH	HLLL	HHLL	HHH[H]	HHL
	中(6)	HHH	HHHH	HLLL・HHLL	HHHL	HHH[H]	HHL
	若(3)	HHH	HHHH	(HLLL・HHLL)	HHHL	HHH[H]	HHL
富島	高(2)	HHH	HHHH	HLLL・HHLL	HHLL	HHH[H]	HHL
	中(2)	HHH	HHHH	HHLL・HLLL	(HHLL・HHHL)	HHH[H]	HHL・HLL
	若(2)	HHH	HHHH	(HLLL・HHLL)	HHLL	HHH[H]	HHL
郡家	高(2)	HHH	HHHH	HLLL	(HHLL・HHHL)	HHH[H]	HHL・HLL
	中(2)	HHH	HHHH	HLLL	HHLL	HHH[H]	HHL
	若(2)	HHH	HHHH	(HLLL・HHLL)	HHLL	HHH[H]	HHL
洲本	高(3)	HHH	HHHH	HHLL	HHLL	HHH[H]	HHL
	中(3)	HHH	HHHH	HLLL・HHLL	HHHL	HHH[H]	HHL
	若(2)	HHH	HHHH	(HLLL・HHLL)	HHLL	HHH[H]	HHL
由良	高(2)	HLL	HHLL・HHHH	HLLL	HLLL	HHH[H]	HLL
	中(2)	HHH	HHHH	HLLL・HHLL	HHLL	HHH[H]	HHL
	若(2)	HHH	HHHH	HLLL・HHLL	HHLL	HHH[H]	HHL
津井	高(2)	HLL	(HHHH・HLLL)	HLLL	(HLLL・HHLL)	HHH[H]	HHL・HLL
	中(2)	HHH	HHHH	HHLL	HHLL	HHH[H]	HHL
	若(2)	HHH	HHHH	HHLL・HLLL	HHLL	HHH[H]	HHL
福良	高(2)	HLL	HHLL・HHHH	HLLL	HLLL	HHH[H]	HLL・HHL
	中(2)	HHH	HHLL・HHHH	HHLL	HHLL	HHH[H]	HHL
	若(2)	HHH	HHLL・HHHH	HHLL	HHLL	HHH[H]	HHL
鳴門	高(2)	HLL	HHLL	HLLL	HLLL	HHH[H]	HLL
	中(2)	(HLL・HHH)	HHLL	HLLL	(HHLL・HHHL)	HHH[H]	HLL
	若(2)	HHH	HHHH	HLLL	(HHHL・HHLL)	HHH[H]	HHL
高知	高(2)	HLL	HHLL	HLLL	HLLL	HHL[L]	HLL
	中(4)	HLL	HHLL	HLLL	HLLL	HHL[L]	HLL
	若(5)	HLL	HHLL・HHHH	HLLL・HHLL	HLLL・HHHL	HHL[L]・HLL[L]・HHH[H]	HLL

表5. 第2類五段活用

地域	年齢層	終止形	否定形	過去形	禁止形	意志形	命令形
春木	高(1)	LLH	LLH	LHL	LLHL	LLH[H]	LF<(LHL)>
	中(2)	LLH	LLH	LHL	LLHL	LLH[H]	LF<(LHL)>
	若(2)	LLH	LLH	LHL	LLHL	LLH[H]	LF<(LHL)>
深日	高(3)	LLH	LLH	LHL	LHLL	LLH[H]	LF<(LHL)>
	中(3)	LLH	LLH	LHL	LHLL	LLH[H]	LF<(LHL)>
	若(2)	LLH	LLH	LHL	LHLL	LLH[H]	LF<(LHL)>
恋野	高(3)	LHL	LLH	LHL	LHLL	LLH[H]	LF<(LHL)>
	中(2)	LHL	LLH	LHL	LHLL	LLH[H]	LF<(LHL)>
	若(2)	LHL	LLH	LHL	LHLL	LLH[H]	LF<(LHL)>
加太	高(2)	LLH	LLH	LHL	LHLL	LLH[H]	LF<(LHL)>
	中(1)	LLH	LLH	LHL	LHLL	LLH[H]	LF<(LHL)>
	若(1)	LLH	LLH	LHL	LHLL	LLH[H]	LF<(LHL)>
明石	高(2)	LLH	LLH	LHL	LLHL	LLH[H]	LF<(LHL)>
	中(2)	LLH	LLH	LHL	LLHL	LLH[H]	LF<(LHL)>
	若(2)	LLH	LLH	LHL	(LLHL)	LLH[H]	LF<(LHL)>
岩屋	高(5)	LLH	LLH	LHL	LLHL	LLH[H]	LF<(LHL)>
	中(6)	LLH	LLH	LHL	LLHL	LLH[H]	LF<(LHL)>
	若(3)	LLH	LLH	LHL	LLHL	LLH[H]	LF<(LHL)>
富島	高(2)	LLH	LLH	LHL	(LHLL)	LLH[H]	LF<(LHL)>
	中(2)	LLH	LLH	LHL	LLHL	LLH[H]	LF<(LHL)>
	若(2)	LLH	LLH	LHL	LLHL	LLH[H]	LF<(LHL)>
郡家	高(2)	LLH	LLH	LHL	LHLL	LLH[H]	LF<(LHL)>
	中(2)	LLH	LLH	LHL	LLHL	LLH[H]	LF<(LHL)>
	若(2)	LLH	LLH	LHL	LHLL	LLH[H]	LF<(LHL)>
洲本	高(3)	LLH	LLH	LHL	LHLL	LLH[H]	LF<(LHL)>
	中(3)	LLH	LLH	LHL	LLHL	LLH[H]	LF<(LHL)>
	若(2)	LLH	LLH	LHL	LHLL	LLH[H]	LF<(LHL)>
由良	高(2)	LLH	LLH	LHL	LHLL	LLH[H]	LF<(LHL)>
	中(2)	LLH	LLH	LHL	LHLL	LLH[H]	LF<(LHL)>
	若(2)	LLH	LLH	LHL	LHLL	LLH[H]	LF<(LHL)>
津井	高(2)	LLH	LLH	LHL	LHLL	LLH[H]	LF<(LHL)>
	中(2)	LLH	LLH	LHL	LHLL	LLH[H]	LF<(LHL)>
	若(2)	LLH	LLH	LHL	LHLL	LLH[H]	LF<(LHL)>
福良	高(2)	LLH	LLH	LHL	LHLL	LLH[H]	LF<(LHL)>
	中(2)	LLH	LLH	LHL	LHLL	LLH[H]	LF<(LHL)>
	若(2)	LLH	LLH	LHL	LHLL	LLH[H]	LF<(LHL)>
鳴門	高(2)	LLH	LLH	LHL	LHLL	LLH[H]	LF<(LHL)>
	中(2)	LLH	LLH	LHL	(LLHL)	LLH[H]	LF<(LHL)>
	若(2)	LLH	LLH	LHL	LHLL	LLH[H]	LF<(LHL)>
高知	高(2)	HLL	HLL	LHL	HLLL	HLL[L]	LH<(LHL)>
	中(4)	HLL	HLL	LHL	HLLL	HLL[L]	LH<(LHL)>
	若(5)	HLL・LLH	HLL・LLH	LHL	HLLL・LLHL	HLL[L]・LLH[H]	LH<(LHL)>

表6. 第2類一段活用

合同している地域については、禁止形以外に違いがあらわれず、整った結果であるといえる。高知とその他の地域の命令形に違いがあるようにみえるが、〈 〉内をみると同じものであることがわかる⁴。また、恋野のみ終止形が他の地域と異なるが、第3類と一致するという点では相違ない。

3.3 第3類

第3類（歩くなど）については表にまとめていないが、恋野以外の地域は表2に示したのと同じ型である。また、高知以外では第2類の一段活用と同じ型となるため、特にここで問題となるところはないと考えられる。

4. 変化の原理

4.1 変化後のアクセントについて

三拍動詞第2類五段活用のアクセントは第1類と、第2類一段活用のアクセントは第3類と同一の型となる。調査した春木・深日・恋野・加太においても同じことが観察された。表2に示した現代京都アクセントと合わせて、次のことが言える。

A. 変化した後の姿に地域ごとの違いはほとんどなく、同一のアクセントとなる。

違いがみられるのは禁止形においてのみである。禁止形にみられるアクセント変化は、中世以降に生じた終止形の変化が反映されたものである。時期などについて地域差はあるものの、変化としては古い終止形アクセントから新しい終止形アクセントに置き換わったものと捉えられるから⁵、今問題としている第2類のアクセント変化には直接関係のないものとして取り扱う。

Aをふまえて他の地域についても確認してみると、淡路島などでも同じ傾向がみられることに気がつく。このことから、既に変化が生じている地域については、次のことが言える。

B. 変化には同じ原理が働いている。

明石については3.2.1で判断を保留したところがあった。変化した後であるにせよ春木などと一致しないところがあり（五段活用の否定形・過去形・命令形に違いがある）、そうかといって五段活用の否定形以外は変化する前であるとも言い難い。ただし、一段活用が他の地域と同一であること、五段活用も終止形や意志形などが第1類・2類ともに同じ型であることから、基本的にはこの地域も前述のAとBにはあてはまり、その他の活用形アクセントについては何らかの理由で変化が後れているものと捉えることにする。

4.2 第2類の活用形ごとにみられる変化過程について

変化がさほど進んでいない高知と変化を終えた春木などの地域、そして五段活用に変化していく様子が見える淡路島と鳴門の調査結果を比べて、活用形ごとにどのような変化が生じるのかについて確認してみたい。

4.2.1 終止形・否定形・禁止形・命令形

まず、特に問題とならない活用形についてまとめて述べる。

終止形は、五段活用が HLL から HHH へ、一段活用が HLL から LLH (LHL) へと変化する。例外はみられず、第 1 類あるいは第 3 類と同一の型になるという単純なものであるといえる。禁止形についても同様、五段活用は HLLL から HHLL あるいは HHHL になり、一段活用は HLLL から LHLL あるいは LLHL になる。

また、否定形は五段活用が HHLL から HHHH へ、一段活用が HLL から LLH へ変換し、命令形は五段活用が HLL から HHL へと変換するといえそうである。なお、一段活用の命令形は過去形と同じく変換する必要がなく、特に問題とはならない。

4.2.2 過去形

次に、過去形について述べる。五段活用の過去形は HLLL から一旦 HHLL へ変化するような様子を見せる。ただし、合同した後はおおむね HLLL で安定する。見かけの上ではこの活用形に第 2 類の型が残っているようにもみえるが、第 1 類をみるともともと HHLL であったものが、第 2 類が HHLL へ変化するのとほぼ同時か少し遅れて HLLL へ変わっていくことがわかる。つまり、変化の流れとしては HLLL → (HHLL) → HLLL というふうにまとめられるであろう。前の HLLL と後の HLLL は結果として同じ型となっただけで、後者は第 2 類のアクセントが残ったわけではなく、H2 型から H1 型への変化によるもの⁶であると考えたほうがよさそうである。

一段活用の過去形は LHL のまま変化しない。この活用形がもともと第 3 類と同じ型であるため、変換する必要がなかったのである。

4.2.3 意志形

意志形は、五段活用が HHL[L]から HHH[H]へと変化するが、高知の若年層をみると途中で HLL[L]を経ているようにもみえる。この HLL[L]は一段活用と同一の型であり、一旦は五段活用と一段活用の意志形が同一型になったとも考えられるが、まだ断定できない。仮にそうであるにしても、ごく短い間のことであっただろうということが他の地域の結果から想像できる。

一段活用の意志形は、HLL[L]から LLH[H]へ変化したものと考えて問題なさそうである。

4.2.4 「接続連用形」について

新田 (2004, 2005) で述べられている「接続連用形」について、新田はこれを「付属語接続の音便形」、「付属語接続の非音便形」、「複合動詞前部」、「ヨル形語基」の四つに分けた上で「接続連用形が発達した方言では終止形も無核で現れやすい」(2004: 25) としている。2.1 から 2.3 の調査ではその四つのうち、付属語接続の音便形と付属語接続の非音便形について共通して調査をおこなったが、すべての地域・年齢層で無核化してあらわれた。

また、2.4の調査で調査項目とした複合動詞について、岩屋・福良・深日の全年齢層と高知市の若年層2名（いずれも1990年生、調査結果で第2類に変化後のアクセントがあらわれた話者）には「思い出すHHH-」「動きまわるHHH-」「起き上がるLL-」「受け継ぐLL-」というように、すべて「無核化」した形であらわれた。高知市の高年層および中年層においては「思い出すHLL-」「動きまわるHLL-」となり、五段活用は「無核化」していない。一方、「起きあがるLL-」「受け継ぐLL-」は前部のアクセントが岩屋・福良・深日の全年齢層と高知の若年層2名と同様の型であった。

4.3 先行研究との比較

これまでに述べたことと1.2でまとめた先行研究とを比較すると、次のことが言える。

C. H2型からH1型への統合は、それほど顕著にみられない：変化のきっかけが〈型の統合〉だけにあるとは言いにくい（中井2012の見解と一致する）。

この〈型の統合〉の力は、たとえば三拍名詞などにおいても強くはないと考えられ⁷、中井（2012）でも同様のことが指摘されている。

また、新田（2004、2005）のいう「接続連用形」についても、次のことがいえる。

D. 付属語接続の連用形については、これが無核化してから実際に第2類の変化が生じるまでには時間差が存在し、複合動詞前部の連用形に生じるアクセント変化は、第2類の変化と近い時期に生じている：これによって変化が生じたとまでは言えないのではないか。

先行研究で示されているデータと筆者による調査のデータとで共通しているのは、第2類の一段活用の変化が五段活用のそれより早く完了したという点である。しかし、高知の若年層に聞かれるアクセントを個別に示した表7をみると、第2類の変化は五段活用と一段活用の両方でほとんど同じ時期にはじまるのではないかと考えることができる。この点も含めて、次に述べる。

4.4 高知若年層のアクセントと変化の原理

表7で示した高知若年層の三拍動詞第2類アクセントについて検討する。基本的には、第2類の伝統的なアクセントがまだ残っているといってよい状態である。しかし、その中でも1985年生まれの話者と1990年生まれの2人の話者においては、第2類一段活用の終止形や意志形、否定形に第3類と同一の型があらわれる場合があり、変化の様子がうかがえる。

京都や大阪など、京阪式アクセント地域の中心をなす地域において既に第2類のアクセント変化を終えていることなどを考慮すると、高知では他の地域のアクセントに影響をうけて変化が進んでいるという可能性を考える必要がある。ただし、それが直接的な変化の原因なのであれば、動詞に限らず名詞などにもその影響があらわれてよいはずである。ところが調査した範囲でそのように断定できるものがなかったため、三拍動詞第2類のアクセン

1977生	終止形	否定形	過去形	禁止形	意志形	命令形	
第1類	五段	HHH	HHHH	HHLL	HHLL	HHHH	HHL
	一段	HHH	HHH	HHLL	HHLL	HHHH	HHL
第2類	五段	HLL	HHLL	HLLL	HLLL	HHLL/HLLL	HLL
	一段	HLL	HLL	LHL	HLLL	HLLL	LH
第3類	五段	LLH	LLLH	LHLL	LHLL	LLLH	LHL
1983生	終止形	否定形	過去形	禁止形	意志形	命令形	
第1類	五段	HHH	HHHH	HHLL	HHLL	HHHH	HHL
	一段	HHH	HHH	HHLL	HHLL	HHHH	HHL
第2類	五段	HLL	HHLL	HHLL/HLLL	HLLL	HLL	HLL
	一段	HLL	HLL	LHL	LLHL/HLLL	HLLL/LLLH	LH
第3類	五段	LLH	LLLH	LHLL	LHLL	LLLH	LHL
1985生	終止形	否定形	過去形	禁止形	意志形	命令形	
第1類	五段	HHH	HHHH	HHLL	HHLL	HHHH	HHL
	一段	HHH	HHH	HHLL	HHLL	HHHH	HHL
第2類	五段	HLL	HHLL	HLLL	HLLL	HLL	HLL
	一段	HLL/LLH	HLL	LHL	HLLL	HLLL/LLLH	LH
第3類	五段	LLH	LLLH	LHLL	LHLL	LLLH	LHL
1990生	終止形	否定形	過去形	禁止形	意志形	命令形	
第1類	五段	HHH	HHHH	HHLL	HHLL	HHHH	HHL
	一段	HHH	HHH	HHLL	HHLL	HHHH	HHL
第2類	五段	HLL	HHLL	HLLL/HHLL	HLLL	HHLL/HHHH	HLL
	一段	HLL/LLH	HLL	LHL	HLLL/LLHL	HLLL/LLLH	LH
第3類	五段	LLH	LLLH	LHLL	LHLL	LLLH	LHL
1990生	終止形	否定形	過去形	禁止形	意志形	命令形	
第1類	五段	HHH	HHHH	HHLL	HHLL	HHHH	HHL
	一段	HHH	HHH	HHLL	HHLL	HHHH	HHL
第2類	五段	HLL	HHHH/HHLL	HLLL/HHLL	HLLL/HHHL	HHLL/HHHH	HLL
	一段	HLL/LLH	HLL/LLH	LHL	HLLL/LLHL	HLLL/LLLH	LH
第3類	五段	LLH	LLLH	LHLL	LHLL	LLLH	LHL

表7. 高知市若年層のアクセント

ト変化についても、現段階ではひとまず淡路島などと同様の原理がはたらいっていると考え
ることとする。

それでは、何がきっかけとなって第2類の変化がはじまるのであろうか。前述のA~Dを
ふまえて、また4.2および4.3を合わせて考えると、次の可能性を提示することができる。

- E. 否定形のアクセントは、後ろから3拍目で下がる(-3型)という点で、第2類五段
活用と一段活用とはもともと一致していた⁸。
- F. 第2類五段活用の意志形は、一時的にHHL [L]とHLL [L]との間(H2型とH1型)
でゆれが生じ、それによって第2類一段活用と混同した。また、これにより、過去形
と命令形(と「接続連用形」)以外のアクセント型がほとんど同一になろうとした。
- G. 第2類五段活用の過去形と第1類五段活用の過去形とが、HLLL (H1型)とHHLL (-
3型)との間でゆれはじめた。
- H. 意志形の変化の前に「接続連用形」が無核化していた、あるいは無核化しつつあつ
たため、第2類の五段活用と第1類、第2類の一段活用と第3類には共通するとこ

ろが多くなっていた。

- I. 第2類五段活用と一段活用とは、過去形・命令形・「接続連用形」のアクセントが大きく異なったため、同じ方向へは動くことができなかった。

EFGHは変化が始まる原因になったもの、Iはその背景にあったものである。過去形などにみられる、後ろから数えて3拍目で下がる-3型に落ち着こうとする力は、H2型とH1型の統合と同じく、品詞にかかわらずみられるものである。これも、三拍動詞第2類の変化に関わったであろう。また、第2類五段活用の変化は、たとえば第1章第2節で述べたように、三拍名詞第2類・第4類あるいは第3類・第5類にHHL、HLLからHHHへ変化する語（クルミ、三十路など）がみられるのと同様のものと考えられる。

5. おわりに

本節では、三拍動詞第2類のアクセント変化について考察をおこなった。第4項において、筆者による調査の結果と先行研究とを比較しながら、次の四つの点について指摘した。

- A. 変化した後の姿に地域ごとの違いはほとんどなく、同一のアクセントとなる。
- B. 変化には同じ原理が働いている。
- C. H2型からH1型への統合は、それほど顕著にみられない：変化のきっかけが〈型の統合〉だけにあるとは言いにくい（中井2012の見解と一致する）。
- D. 付属語接続の連用形については、これが無核化してから実際に第2類の変化が生じるまでには時間差が存在し、複合動詞前部の連用形に生じるアクセント変化は、第2類の変化と近い時期に生じている：これによって変化が生じたとまでは言えないのではないか。

そして、これらの点をふまえて、三拍動詞第2類のアクセント変化について、そのきっかけになると考えられるものとして、次のように示した。

- E. 否定形のアクセントは、後ろから三拍目で下がる（-3型）という点で、第2類五段活用と一段活用とはもともと一致していた。
- F. 第2類五段活用の意志形は、一時的にHHL [L]とHLL [L]との間（H2型とH1型）でゆれが生じ、それによって第2類一段活用と混同した。また、これにより、過去形と命令形（と「接続連用形」）以外のアクセント型がほとんど同一になろうとした。
- G. 第2類五段活用の過去形と第1類五段活用の過去形とが、HLLL（H1型）とHHLL（-3型）との間で揺れ始めた。
- H. 意志形の変化の前に「接続連用形」が無核化していた、あるいは無核化しつつあったため、第2類の五段活用と第1類、第2類の一段活用と第3類には共通するところが多くなっていた。
- I. 第2類五段活用と一段活用とは、過去形・命令形・「接続連用形」のアクセントが大きく異なったため、同じ方向へは動くことができなかった。

ただし、これらは筆者の調査結果にあらわれたところから推測したにすぎず、その調査も

極めて限られたものである。高知などの今後の様子にも注目したい。

【注】

- 1 表 1 と次の表 2 は、上野和昭（2011：pp. 317-318、表 1・表 2）から引用した。ただし、活用形の順序を入れ替えた。
- 2 例えば、高く始まる第 2 類五段活用「動く」の連用形に「ます」を接続させる場合は「動きます HHHHH」などというふうになり、低く始まる第 2 類一段活用「起きる」の連用形に「ます」を接続させる場合は「起きます LLHH」などとなる。連用形の部分ではアクセントは下がらず、第 2 類五段活用は第 1 類と、第 2 類一段活用は第 3 類と同一の型で実現する。
- 3 一段活用には、淡路島および春木・恋野などで五段化した形の聞かれることがあるのは、第 1 節で述べたとおりである。ただし、たとえば「開ける」の否定形「アケン」が五段化して「アケラン」となっても、アクセント型には変わらない。また、「アケラン」が使用される地域であっても「アケン」がまったく使用されないというわけではなく、多くは併用される。そのため、ここでは本来の一段活用の拍数でのみ示した。
- 4 佐藤栄作（1989）編でも同様の型である。
- 5 新しい終止形に置き換わったのち、古い終止形が復活したように見える地域も観察されるが、第 2 節で述べたとおり、これは型の安定性によるものと考えられ、時期からみても第 2 類のアクセント変化には影響を与えないものである。
- 6 三拍名詞第 2 類・第 4 類の HHL→HLL という変化や、三拍形容詞第 1 類の終止形における HHL→HLL という変化と同様のものであり、品詞にかかわらずみられる。
- 7 第 1 章第 2 節で述べたとおり、HLL への変化よりも LHL や HHH への変化の目立つ場合がある。
- 8 意志形は短呼形が自然であるから実質 3 拍となり、三拍名詞・三拍形容詞に生じる変化と同質のものであると捉えられる。あるいは 4 拍の場合でも五段活用・一段活用ともに同じ拍数である。一方、否定形は五段と一段とで拍数が異なるためにこの変化が生じなかったのであろう。

第3章 形容詞ならびに形容詞型活用の付属語のアクセント

本章では、まず第1節において三拍形容詞のアクセント変化について述べる。形容詞の各活用形のうち、とくに終止形と連用形（カタ形・テ形・ナル形）のアクセントを筆者の調査結果によって整理したところ、従来言われている第1類が第2類に合同するという変化以外に、連用形においてL型からH型になるという変化が生じていることが明らかとなった。本研究ではその理由について、四拍形容詞の終止形アクセントがHHHLからHHLLに変わることが関連すると考え、すなわちそれによって三拍形容詞と四拍形容詞がいずれも高く始まり、終止形が-3型・カタ形が-4型・テ形が-2型・ナル形がH0型というきわめて整った形になることを指摘する。

つづく第2節においては、形容詞型活用の付属語である「らしい」のアクセントについて論じた。調査結果から、「らしい」は前の自立語とひとまとまりのアクセントとなる場合と、前の自立語から独立したアクセントを示す場合とがあることがわかった。すなわち、ここに地域差や世代差が見出される。本研究ではその理由として、推定をあらわす「らしい」が、中世以降に形容詞を作る接尾語であった「らしい」が転成することによって成立した語であることから、もともとは前の自立語とひとまとまりになろうとする性質をもっていたと推測する。そして、次第にその性質が失われた結果、前の自立語から独立したアクセントをとるようになったと述べる。

この第2節と同様、第3節においても形容詞型の活用をもつ付属語について取り上げる。こちらでは、希望をあらわす「たい」について、特に近世期の京都・大坂アクセントとの比較をおこないながら考察をおこなう。その結果として、やはり「らしい」と同じように、もともとは前の自立語と合わさってひとまとまりのアクセントとなる性質を持っていたが、それが失われつつあることを推測する。また、それと合わせて、鎌倉時代頃から多く用いられるようになったこの語は、南北朝期に起こったとされる「体系変化」の影響も受けた可能性があるということも指摘する。

第1節 三拍形容詞のアクセント変化

1. はじめに

1.1 本節の目的

三拍形容詞¹（「暗い」「寒い」など）はアクセントによる語の類別という観点から2つに分けることができる。第1類（「赤い」「暗い」など）と第2類（「白い」「寒い」など）であり、京阪式アクセントの諸地域における伝統的なアクセントは終止形（基本形）の場合、第1類 HHL・第2類 HLL となる。しかしながら、現代においては第1類が第2類に合同する動きをみせており、そうすると第1類・第2類ともに終止形（基本形）は HLL となる。また、連用形なども含めて、第1類はすべて第2類のアクセントになるというのが大きな流れである。

本節では、まず 1.2 においてそのような三拍形容詞のアクセントについて述べた先行研究を概観する。その後、それをふまえて筆者が調査をおこなった淡路島と大阪府南部および和歌山県北部の結果をもとに、三拍形容詞のアクセント変化について検討する。

1.2 先行研究

類別	語例	終止形	カタ形	テ形	ナル形
第1類	赤い、暗い	HHL	HHLLL	HLL	HHHH/HLLL
第2類	白い、長い	HLL	LHLLL	LHL	LHHH

表1. 田辺における3拍形容詞アクセント

佐藤栄作編（1989）より、両類の区別を残している和歌山県田辺市方言を例として三拍形容詞終止形と連用形²アクセントを表1にまとめる。終止形アクセントは第1類と第2類とで下がり目の位置が異なること、連用形アクセントは第1類が高くはじまり（以下、本節ではこれを「H-型」と呼ぶ）第2類が低くはじまる（以下、「L-型」と呼ぶ）ことがわかる。

ただしこのような区別は、中井幸比古（2002ab）や佐藤（1989）によると現代京都や大阪・徳島方言で既に失われており、表2のように、第1・2類ともに終止形を含む各活用形が第2類アクセントで発音される傾向にある。

類別	語例	終止形	カタ形	テ形	ナル形
第1類	赤い、暗い	HLL	LHLLL	LHLL	LHLLL/LLLH
第2類	白い、長い	HLL	LHLLL	LHLL	LHLLL/LLLH

表2. 京都・大阪における3拍形容詞アクセント

京阪地域における形容詞のアクセントを、終止形以外の各活用形も含んで調査・記述した先行研究は多くないが、山名邦男（1965）の記述によると、淡路島の14～20歳（当時）には両類の区別がなく、終止形・カタ形は第2類アクセントで発音されている。つまり、京都や大阪、徳島、淡路島方言では既に両類の区別が失われ、第2類アクセントへ統一されたと考えてよいであろう。

しかし、徳島市内のアクセントについて中井幸比古（1999）は、三拍形容詞の終止形には第2類アクセントしかあらわれないが、カタ形に第2類アクセントだけでなく第1類的

なH型アクセントも聞かれ、類の区別は関係なく併用していると述べている。佐藤（1989）と中井（1999）の被調査者は生年が20年ほど異なることから、カタ形に両型あらわれることが佐藤（1989）の後で新たに生じた変化であると捉えることもできるし、両者の生育地が同じ徳島市内の違う地域である可能性もあるから、中井（1999）の被調査者は第2類的なL型への統一を経ずにL型・H型の併用へ至ったと捉えることもできる。

また、中井（1999）と同じ傾向にあるものとして神戸市のアクセントについて記述した橋尾直和（1991）があり、ここでも終止形はHLLで第2類的だが、ナル形のアクセントは類に關係なくH型となっており、表2とは異なる様相であることがうかがえる。

これらの先行研究を総合すると、京阪式アクセント地域における三拍形容詞のアクセントは、第1類・第2類が合同していずれも第2類のL型アクセントで発音されるようになったとは言い切ることのできない、複雑な状況であるといえる。以下では、これらの先行研究に示されている結果をふまえて、筆者のおこなった調査結果から考察をおこなう。

2. 使用するデータについて

調査した地域は、淡路島内の岩屋・富島・郡家・洲本・由良・津井・福良と徳島県鳴門市鳴門町の亀浦港近辺、兵庫県明石市の明石港近辺、大阪府岸和田市春木、大阪府岬町深日と和歌山県橋本市恋野・和歌山市加太である。2011年から2013年にかけて調査をおこなった。各調査地域における調査人数は以下のとおりである。

岩屋・富島・郡家・由良・津井・福良：高年層2人・中年層2人・若年層2人

鳴門・明石：高年層2人・中年層2人・若年層2人

洲本：高年層3人・中年層3人・若年層2人

春木：高年層1人・中年層2人・若年層2人

深日：高年層3人・中年層3人・若年層2人

恋野：高年層3人・中年層2人・若年層2人

加太：高年層2人・中年層1人・若年層1人

このうち、岩屋・富島・郡家・洲本・由良・津井・福良と鳴門、明石においては三拍形容詞第1類「赤い・甘い・遅い・軽い・暗い」、第2類「青い・暑い・白い・長い・早い」の合計10語、それぞれの語について終止形とテ形・カタ形・ナル形、連体形と単文の述語となる形の発音を聞き取った。また、それに加えて「遠い（第1類）」の終止形のみ発音についても聞き取りをおこなった。そして、春木・深日・加太・恋野においては、三拍形容詞第1類「赤い・浅い・甘い・薄い・遅い・かたい・軽い・暗い・つらい・遠い」、第2類「青い・痛い・多い・黒い・臭い・寒い・白い・近い・長い・古い」の計20語について、それぞれ終止形とテ形・カタ形・ナル形・連体形と単文の述語となる形の発音を聞き取った。

3. 調査結果

以下、3.1から3.4では「遠い（第1類）」と「多い（第2類）」を除いた結果を示す。この2語についてはオ段長音を含む語であることから、終止形 HHL あるいは連用形 H-型があらわれやすいと考えられるため、3.5において別途取り上げる。

3.1 終止形

まず、終止形のアクセントを表3に示した。

年齢層	高		中		若		高		中		若	
類別	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2
地域(人数)	岩屋(高2・中2・若2)						明石(高2・中2・若2)					
HHL	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	5	4
HLL	10	10	10	10	10	10	10	9	10	10	5	6
地域(人数)	富島(高2・中2・若2)						鳴門(高2・中2・若2)					
HHL	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
HLL	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
地域(人数)	郡家(高2・中2・若2)						春木(高1・中2・若2)					
HHL	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
HLL	10	10	10	10	10	10	9	9	18	18	18	18
地域(人数)	洲本(高3・中3・若2)						深日(高3・中3・若2)					
HHL	-	-	-	-	-	-	12	1	-	-	-	-
HLL	15	15	15	15	10	10	15	26	27	27	18	18
地域(人数)	由良(高2・中2・若2)						恋野(高3・中2・若2)					
HHL	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
HLL	10	10	10	10	10	10	27	27	18	18	18	18
地域(人数)	津井(高2・中2・若2)						加太(高2・中1・若1)					
HHL	-	-	-	-	-	-	18	3	-	-	-	-
HLL	10	10	10	10	10	10	-	15	9	9	9	9
地域(人数)	福良(高2・中2・若2)											
HHL	-	-	-	-	-	-						
HLL	10	10	10	10	10	10						

表3. 三拍形容詞終止形アクセントの調査結果

これをみると、調査したほとんどの地域において、終止形には第2類アクセントであるHLLしか聞かれないということがわかる。第1類と第2類の区別を残しており、第1類HHL・第2類HLLという対立がみられるのは岬町深日と和歌山市加太の高年層のみである。ただし、深日の高年層の結果によると、第1類の語はHLLで発音されるほうが多く、HHLは4割ほどであった。また、伝統的にHLLである第2類の語にもHHLがあらわれる場合があった。それに対して加太の高年層は第1類にHHLが残っている状態であり、一方で第2類の語にもHHLがあらわれた。つまり、深日の高年層はHHLからHLLへの変化の途中段階にあること、加太の高年層は両類の区別をよく保っていることがいえる。ただし、どちらの地域も中年層以下ではHLLしかあられず、他の地域と同様の姿となっている³。

なお、連体形のアクセントについても、ほとんどの地域において第1類・第2類ともに

HLLであった。両類の区別が高年層に残る加太では終止形と同じ結果であり、高年層の結果に変化の途中段階があらわれた深日では、第1類のHHLが11に対してHLLが16、第2類のHHLが1に対してHLLが26という結果であった。

3.2 連用形：カタ形

次にカタ形の結果について述べる。表4に示したが、この形のアクセントにはH型(HHLLL)とL型(LLHLL)の二つがある。終止形に第1類と第2類の区別が残っていた深日・加太の高年層はカタ形にもやはり区別が残存しており、第1類にはH型、第2類にはL型が偏ってあらわれるという結果であった。また、終止形アクセントにはHLLしかあられず、両類の区別がみられなかった岸和田市春木の高年層においても、H型が第1類に多く、L型が第2類に多い。このことから部分的に両類の区別が残存している可能性も考えられるが、これについてはテ形・ナル形の結果を確認した後、第4項において考察をおこなうことにする。その他の地域、年齢層においてはH型とL型が類に関係なくあられ、そこには地域ごと・年齢層ごとの違いがみられる。

まずL型が多いのは、深日の中年層、加太の若・中年層、明石の中・高年層と鳴門の高年層、そして淡路島内岩屋の若・中・高年層と洲本の高年層、津井の中・高年層⁴である。明石の若年層と洲本の若・中年層にはH型が聞かれることがあるが、L型もほぼ同程度聞かれる。一方、H型が多いのは淡路島内の福良と由良の若・中・高年層、津井の若年層、そして岸和田市春木と橋本市恋野の若・中・高年層である。全体的に年齢層が下がるにつれてH型が増えるのがわかる。

上記のH型・L型とは異なるアクセントが、富島の全年齢層と郡家の中・高年層、岩屋の若・中年層の一部に聞かれた。表4でH型・L型の下段にそれぞれ()で示したLLHLLと

年齢層	高	中	若	高	中	若
類別	1	2	1	2	1	2
地域(人数)	岩屋(高2・中2・若2)			明石(高2・中2・若2)		
H型	HHLLL	-	-	1	-	-
(HHHLL)	-	-	1	-	-	-
L型	LHLLL	10	10	9	9	8
(LLHLL)	-	-	-	-	2	2
地域(人数)	富島(高2・中2・若2)			鳴門(高2・中2・若2)		
H型	HHLLL	-	-	-	1	1
(HHHLL)	-	-	-	-	1	-
L型	LHLLL	-	-	-	-	-
(LLHLL)	10	10	10	10	8	9
地域(人数)	郡家(高2・中2・若2)			春木(高1・中2・若2)		
H型	HHLLL	-	-	-	5	5
(HHHLL)	-	-	-	-	-	-
L型	LHLLL	-	-	-	5	5
(LLHLL)	10	10	10	10	-	-
地域(人数)	洲本(高3・中3・若2)			深日(高3・中3・若2)		
H型	HHLLL	-	-	9	10	5
(HHHLL)	-	-	-	-	-	-
L型	LHLLL	15	15	6	5	5
(LLHLL)	-	-	-	-	-	-
地域(人数)	由良(高2・中2・若2)			恋野(高3・中2・若2)		
H型	HHLLL	8	8	10	10	10
(HHHLL)	-	-	-	-	-	-
L型	LHLLL	2	2	-	-	-
(LLHLL)	-	-	-	-	-	-
地域(人数)	津井(高2・中2・若2)			加太(高2・中1・若1)		
H型	HHLLL	3	1	1	5	10
(HHHLL)	-	-	-	-	-	-
L型	LHLLL	7	9	9	5	-
(LLHLL)	-	-	-	-	-	-
地域(人数)	福良(高2・中2・若2)					
H型	HHLLL	10	10	10	10	10
(HHHLL)	-	-	-	-	-	-
L型	LHLLL	-	-	-	-	-
(LLHLL)	-	-	-	-	-	-

表4. 三拍形容詞カタ形アクセントの調査結果

HHHLL である。これらがどのように生じたのかについては明らかでないが、おそらくは LHLLL が変形したものであり、HHHLL はそこから変化したものであろう。そうであるとするならば、LLHLL は LHLLL、HHHLL は HHHLL と同様の性質をもつものであると捉えられる。なお、郡家と富島の中・高年層には LLHLL しか聞かれず、富島では若年層にも LLHLL が多いことのほか、岩屋の若年層にも一部あらわれることがあった。HHHLL は岩屋の中年層と富島の若年層の一部にあらわれる。

3.3 連用形：テ形

テ形の結果を表 5 に示した。先に確認したカタ形と同じく H-型と L-型、さらに HHL (HHLL) や LLH (LLF) の変形であろうと思われる LLH (あるいは LLF:テが下降拍) があらわれる。また、深日と加太の高年層には両類の区別がある点が、カタ形と共通している。その他の地域・年齢層においては H-型と L-型が類に関係なくあらわれるが、カタ形と比べると全体的に L-型が多いという結果であった。以下で、細かくみていくことにする。

L-型が多いのは深日の中年層、恋野の若・中・高年層、加太の若・中年層、明石の中・高年層と岩屋・郡家・洲本・津井・鳴門の全年齢層である。福良の中・高年層はカタ形に比べれば L-型が多いが、それでもやはり H-型が

年齢層	高 中 若						高 中 若					
類別	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2
地域(人数)	岩屋(高2・中2・若2)						明石(高2・中2・若2)					
H-型 HHL/HHLL (HHF)	-	2	-	-	-	-	-	1	-	-	7	9
L-型 LHL/LHLL (LLH/LLF)	10	8	10	10	10	10	10	9	10	10	3	1
地域(人数)	富島(高2・中2・若2)						鳴門(高2・中2・若2)					
H-型 HHL/HHLL (HHF)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
L-型 LHL/LHLL (LLH/LLF)	5	5	4	4	10	9	10	10	10	9	10	9
地域(人数)	郡家(高2・中2・若2)						春木(高1・中2・若2)					
H-型 HHL/HHLL (HHF)	-	-	-	-	2	1	1	-	10	8	13	9
L-型 LHL/LHLL (LLH/LLF)	7	7	10	10	8	9	8	9	8	10	5	9
地域(人数)	洲本(高3・中3・若2)						深日(高3・中3・若2)					
H-型 HHL/HHLL (HHF)	-	-	5	3	-	-	14	1	1	-	18	18
L-型 LHL/LHLL (LLH/LLF)	15	15	10	12	10	10	13	26	26	27	-	-
地域(人数)	由良(高2・中2・若2)						恋野(高3・中2・若2)					
H-型 HHL/HHLL (HHF)	-	-	3	3	7	6	-	3	2	1	7	3
L-型 LHL/LHLL (LLH/LLF)	10	10	7	7	3	4	27	24	16	17	11	15
地域(人数)	津井(高2・中2・若2)						加太(高2・中1・若1)					
H-型 HHL/HHLL (HHF)	-	-	-	1	4	3	18	1	-	-	-	-
L-型 LHL/LHLL (LLH/LLF)	10	10	10	9	6	7	-	17	9	9	9	9
地域(人数)	福良(高2・中2・若2)											
H-型 HHL/HHLL (HHF)	5	5	3	4	8	10						
L-型 LHL/LHLL (LLH/LLF)	5	5	7	6	2	-						

表5. 三拍形容詞テ形アクセントの調査結果

多い傾向にある。一方で H-型が多いのは、春木の若・中年層と深日・明石・由良・福良の若年層である。先述したとおり、カタ形に比べると全体的に L-型が多いが年齢層が下がると H-型も増え、特に由良・福良・深日ではその傾向が顕著である。また、全年齢層に共通して L-型の多い恋野や郡家、津井でも若年層には比較的 H-型があらわれやすくなっているこ

とがわかる。なお、富島には LLH (LLF) というアクセントが聞かれるが、他地域と同じ型もカタ形に比べると多い。

語形についても触れておくと、調査時に「アカクテ」「イタクテ」となったのは加太と明石・鳴門の三つの地域、「アカテ (赤くて)」「イタテ (痛くて)」となったのは春木・深日と淡路島内の地域で、恋野は2拍目のア段音をオ段音で言う傾向にある(「アコテ (赤くて)」「イトテ (痛くて)」)。

3.4 連用形：ナル形

ナル形の結果は表6に示したとおりである。あらわれる語形については、「アカナル (赤くなる)」「イタナル (痛くなる)」となる地域が多いが、その他にも「アコナル」「イトナル」となる地域 (恋野)、「アカクナル」「イタクナル」となる地域 (加太)、「アカンナル」「イタンナル」⁵となる地域 (鳴門) があった。

年齢層	高		中		若		高		中		若	
類別	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2
地域(人数)	岩屋(高2・中2・若2)						明石(高2・中2・若2)					
H型	-	1	-	-	2	1	-	1	-	-	5	4
L型	10	9	10	10	8	9	10	9	10	10	5	6
地域(人数)	富島(高2・中2・若2)						鳴門(高2・中2・若2)					
H型	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
L型	9	10	10	10	10	9	10	10	10	10	10	10
地域(人数)	郡家(高2・中2・若2)						春木(高1・中2・若2)					
H型	3	1	-	-	3	2	6	4	18	18	18	18
L型	7	9	10	10	7	8	3	5	-	-	-	-
地域(人数)	洲本(高3・中3・若2)						深日(高3・中3・若2)					
H型	1	-	-	-	1	1	16	2	9	9	18	18
L型	14	15	15	15	9	9	11	25	18	18	-	-
地域(人数)	由良(高2・中2・若2)						恋野(高3・中2・若2)					
H型	2	2	2	1	1	1	1	-	1	-	6	5
L型	8	8	8	9	9	9	26	27	17	18	12	13
地域(人数)	津井(高2・中2・若2)						加太(高2・中1・若1)					
H型	4	2	-	-	8	6	18	-	-	-	-	-
L型	6	8	10	10	2	4	-	18	9	9	9	9
地域(人数)	福良(高2・中2・若2)											
H型	2	-	-	2	4	3						
L型	8	10	10	8	6	7						

表6. 三拍形容詞ナル形アクセントの調査結果

アクセントを確認してみると、やはり L-型 (アカナル・アコナル LLLH / アカクナル LLLLH / アカンナル LLHLH) と H-型 (アカナル・アコナル HHHH あるいは HHLH / アカクナル HLLLH / アカンナル HHHLH) の両方があらわれるが、L-型が多いのは深日の中年層と加太の若・中年層、恋野・明石・岩屋・富島・郡家・洲本・由良・福良・鳴門の全年齢層であった。つまり、ほとんどの地域においてはL-型のほうがあらわれやすいといえる。一方で、春木の若・中年層と深日の若年層、津井の若年層には H-型のほうが多いという結果であった。また、

L-型のほうが多い地域・年齢層であっても、明石や郡家、福良の若年層には H-型が比較的多く聞かれることから、ナル形もこれまでみてきたカタ形・テ形と同様に、年齢層が下がると H-型が増える傾向にあるということが出来る。

これらの地域・年齢層には両類の区別はほとんどみられないが、深日と加太の高年層にはやはり両類の区別が残っており、春木の高年層にもそのような傾向がみられたほか、郡家・津井・福良の高年層 1 名ずつにも H-型が第 1 類に偏っているという傾向があった。

3.5 「遠い」と「多い」のアクセント

先に述べたように、「遠い (第 1 類)」と「多い (第 2 類)」はオ段長音を含む語であることから、他の語に比べて 1 拍目と 2 拍目が H になりやすいと考えられる。そのため、上記の結果からは除いたのだが、地域や年齢層によってはこれらの語のアクセントに違いがみられたため、ここで取り上げておく。

まず、「遠い」の終止形のみ調査をおこなった明石と岩屋・富島・郡家・由良では他の語との違いは見出されなかった。しかしながら、洲本の高年層と津井・福良・鳴門の全年齢層には HHL というアクセントがあらわれた。これらの地域において、他の語には HLL しかなかったこと、岩屋や富島などではこの語のアクセントが HLL であったことは、無視できない結果であるといえよう。

また、表 7・表 8 に示したように、「遠い」と「多い」を各活用形まで含めて調査したうち深日と加太では、他の語の結果で両類の区別を残していた高年層以外にもこの 2 語に

地域	年齢層・人数	終止形	カタ形	テ形	ナル形
春木	高1	HLL	H-	L-	H-
	中2	HLL	H-	L-/H-	H-
	若2	HLL	H-	L-	H-
深日	高3	HHL/HLL	H-/L-	H-	H-
	中3	HHL	H-	H-	H-
	若2	HHL	H-	H-	H-
恋野	高3	HLL	H-/L-	L-	L-/H-
	中2	HLL	H-	L-	L-
	若2	HLL	H-	H・L-	H-
加太	高2	HHL	H-	H-	H-
	中1	HLL	H-	H-	H-
	若1	HLL	H-	H-	H-

表7. 「遠い」のアクセント

地域	年齢層	終止形	カタ形	テ形	ナル形
春木	高	HLL	H-	L-	H-
	中	HLL	H-	L-/H-	H-
	若	HLL	H-	L-/H-	H-
深日	高	HHL	H-	H-	H-
	中	HHL	H-	H-	H-
	若	HHL	H-	H-	H-
恋野	高	HLL	H-	L-/H-	L-/H-
	中	HLL	H-	L-	L-
	若	HLL	H-	H-	L-/H-
加太	高	HHL/HLL	H-	H-	H-
	中	HLL	H-	H-	H-
	若	HLL	H-	H-	H-

表8. 「多い」のアクセント

は第 1 類のアクセントがあらわれた。このうち、特に終止形が HHL であったこと、全体に L-型アクセントが多かった深日の中年層や加太の若・中年層がこれらの語の連用形を H-型で発音したことには注目すべきであると思われる。

4. 変化の道筋と要因について

第3項で見たように、調査した多くの地域において三拍形容詞の第1類と第2類の区別は既に失われていた。しかしながら、高年層に両類の区別を残している地域、それが疑われる地域、「遠い」「多い」に第1類相当のアクセントがあらわれた地域、また、カタ形・テ形・ナル形で異なる傾向を示す地域があり、三拍形容詞のアクセントは複雑な様相を呈しているといえよう。そこで、ここでは特に連用形アクセントにみられたその複雑さを改めて整理し、三拍形容詞のアクセント変化について考察をおこなう。

4.1 変化の道筋

本節でこれまで述べてきた調査結果から、連用形のアクセント変化には次の二つの道筋が考えられる。

- A. 第1類 (H型) / 第2類 (L型) > 両類の合同 (L型) > H型への移行
- B. 第1類 (H型) / 第2類 (L型) > 両類の合同 (L型・H型の併用)
> H型の増加

Aにあてはまるのは、高年層に両類の区別があり中年層にL型、若年層にH型が多くあらわれた深日と、高年層にL型が多く年齢層が下がるにつれてH型の増加傾向がみられた明石と淡路島北部(岩屋・富島・郡家・洲本)である。淡路島南部の津井は高年層1名のカタ形・ナル形アクセントに類別の名残らしきものがあったが、いずれにせよL型が多い状態からH型へ移行している様子がみられるからAにあてはまると判断する。その他、カタ形にはH型が比較的多いがテ形とナル形にはL型が多かった由良・鳴門と恋野も、ひとまずAに該当すると考えてよいであろう。加太も、まだL型からH型への変化はみられないものの、流れとしてはAのようにみえる。福良は判断しがたいが、先行研究の記述から淡路島は全体的に一旦L型へと合流した(あるいはL型が圧倒的に多くなった)と考えられるから、ひとまずAとしておく。

一方で、春木は高年層の連用形アクセントに第1類と第2類の区別が若干残っているように見え、その後L型が多くなる様子もないことから、Bにあてはまるように思われる。つまり、ほとんどの地域は両類が合同しL型へとほぼ統一された後にH型へ移行したと考えられる結果となったが、春木においてのみL型によって統一された形跡が結果にあらわれなかったということになる。

4.2 変化の要因と地域差

続いて、両類がH型へと移行する要因と移行しない要因について考えておきたい。さまざまなことが要因となっていることは間違いないであろうが、筆者はその一つに四拍形容詞の終止形アクセントにおけるHHHL→HHLLという変化があると考えられる。

例として、変化の道筋 A がわかりやすくみられた岬町深日における四拍形容詞の終止形アクセントについて確認する。調査したのは「悲しい（第 1 類）・嬉しい（第 2 類）・重たい・短い」などで、高年層がすべて HHHL というアクセントで発音したのに対して若年層はすべて HHLL というアクセントで発音した。中年層は語によって異なり、HHHL と HHLL とがどちらもあらわれるという結果であった⁶。また、春木・恋野においてはすべての年齢層において HHLL であり、加太では HHHL であった。淡路島についてはすべて確認することができたわけではないが、高年層を中心に調査したところ HHHL が多いが年齢がさがるにつれて HHLL があらわれる傾向にあるといえそうである。

	語例	終止形	カッタ形	テ形	ナル形
3拍	赤い、暗い	HLL	HHLLL	HHL	HHHH
4拍	悲しい、嬉しい	HHLL	HHHLLL	HHHL	HHHHH

表9. 三拍形容詞と四拍形容詞の変化後のアクセント

これらの四拍形容詞はカッタ形・テ形・ナル形アクセントのいずれもが H-型であり、後ろから数えたときの下がり目が三拍形容詞と同一である（「カッタ」「クテ(テ)」「クナル(ナル)」の前に下がり目がくる）。四拍形容詞の終止形アクセントが変化し、後ろ 2 拍が低くなることによって三拍形容詞の第 2 類的なアクセント（HLL：-3 型）と同一になることと、三拍形容詞の連用形に L-型から H-型という変化が生じることの間には何らかの関わりがあると考えられる。両者の変化が生じる順序については明らかでないが、深日や加太、淡路島における調査結果から、三拍形容詞の終止形アクセントが HLL になるのに後れて四拍形容詞の終止形アクセントが変化して HHLL になり、それと時期的に重なる形で三拍形容詞の連用形に L-型から H-型という変化が進むとみてよいであろう。そして、そうなることによって三拍形容詞と四拍形容詞のアクセントは表 9 のような統一された状態になる⁷。

また、地域によって H-型のあらわれ方に違いがある理由についても、四拍形容詞の終止形アクセントとの関連から説明がつくと考えられる。H-型が多くあらわれた地域・年齢層に共通する点は、「遠い」や「多い」の終止形に HHL というアクセントが聞かれたこと（春木を除く）、高年層に類別の名残があったこと、四拍形容詞の終止形アクセントが HHLL であったことである。つまりこれらの地域は三拍形容詞のアクセントにおける類の合同（第 2 類アクセントへの統一）が遅かった可能性があり、その時期が四拍形容詞のアクセント変化が生じた時期と時間的に近かったことが推測される。それによって、L-型アクセントが定着する前に H-型アクセントへの移行が起こったため、なかには春木のような L-型に統一された形跡がみられない地域があったのだろう。

一方で、H-型がさほど顕著にあらわれなかった地域は、三拍形容詞のアクセントが L-型となった時期と四拍形容詞の終止形アクセントが変化する時期には時間的な隔りがあり、そのために L-型で比較的安定しているのだと考えることができる。

4.3 カッタ形・テ形・ナル形の傾向差

4.3.1 全体の傾向

上記のように考える場合、カッタ形・テ形・ナル形におけるH型とL型のあられ方の違いは無視できるものではない。全体的な傾向としてカッタ形にH型があられやすいのはなぜか、同じ連用形アクセントでもカッタ形・テ形・ナル形は同列に扱ってよいものであるのかということについて、ここで改めて検討することにする。

4.1において変化の道筋をひとまずAとした由良・福良・鳴門・恋野に共通しているのは、カッタ形にH型のあられる割合が高いことである。そして、そのうち由良・鳴門・恋野ではテ形とナル形のH型が少ない。カッタ形とテ形・ナル形とは同じ連用形でも性質の異なるものであるが、淡路島の北部や深日の結果をみるとその違いがアクセントに反映しているとは必ずしもいえない状態である。仮にアクセント型のあられ方がそれぞれの性質によって変わるのであれば、L型のあられ方にも差があつてしかるべきであるのに、実際にはH型への移行がみられる地域・年齢層にしかカッタ形・テ形・ナル形の違いがうかがえないからである。そこで、本節ではこの三つを同列に扱い、4.1でひとまずAとした由良・福良・鳴門と恋野は、やはり一旦第2類的なL型へ統一されてからH型へ変化したと考える。そして、H型アクセントのあられ方に違いがみられる理由を他に求めることにする。

結論から述べれば、カッタ形のL型がテ形やナル形に比べて不安定なものであるためにH型への移行が速いということになる。テ形にみられるL型は三拍動詞第2類の一段活用（「落ちる」など）および第3類（「歩く」など）のテ形（LHL、LHLL）と同一で、カッタ形と違ってそもそも型として安定している。また、ナル形は調査したほとんどの地域において一語的な語形でLLLHとなっており、こちらも安定しているからカッタ形に比べるとHHHHへは変化しにくいのだと考えられる。カッタ形はそういう意味での安定性にいささか欠けるため、四拍形容詞の終止形アクセントが変化したとき、テ形やナル形よりも先にH型へ移行する傾向をみせたのであろう。

4.3.2 明石・岩屋・津井について

一部の地域においてはカッタ形よりもテ形・ナル形にH型があられる傾向をみることができる。具体的には、明石の若年層においてはカッタ形よりもテ形にH型が多くあられ、岩屋の高年層にはテ形、若年層においてはナル形にH型があられ、津井では高年層

活用形	型	明石			岩屋			津井		
		高2	中2	若2	高2	中2	若2	高2	中2	若2
カッタ形	H-型	4	0	10	0	2	0	4	6	20
	L-型	16	20	10	20	18	20	16	14	0
テ形	H-型	1	0	16	2	0	0	0	1	7
	L-型	19	20	4	18	20	20	20	19	13
ナル形	H-型	1	0	9	1	0	3	6	0	14
	L-型	19	20	11	19	20	17	14	20	6

表10. 明石・岩屋・津井における調査結果まとめ

と若年層においてナル形にH型があらわれる。しかしながら、まとめてみると表10のようになり、ここにあらわれる数は4.3.1で述べたことを直ちに否定するものではないと捉えることができる。また、たとえば津井の高年層におけるナル形のH型は、一旦LLLHとなったものがHHHHに変化したというよりは、もともとHHLHのように発音されていたところから一つにまとまってHHHHになったと考えるほうが自然であろう。つまり、これも先に述べたナル形におけるL型の安定性を否定するものではないということになる。

5. おわりに

本節では、三拍形容詞のアクセント変化について、調査結果にみられた地域・活用形ごとの傾向差やその要因について考察をおこなってきた。そして、特に連用形（カタ形・テ形・ナル形）アクセントに地域差と世代差がみられたことから、それを取り上げて述べた。まず、連用形アクセントのあらわれ方から、

- A. 第1類（H型）／第2類（L型）＞ 両類の合同（L型）＞ H型への移行
- B. 第1類（H型）／第2類（L型）＞ 両類の合同（L型・H型の併用）
＞ H型の増加

に分けた上で、その理由について検討した。その結果、三拍形容詞の連用形アクセントにH型とL型があらわれる要因として、四拍形容詞の終止形がHHHLからHHLLへ変わることが関係すると指摘した。また、変化の生じた時期によって、上記A・Bのいずれになるかが異なるのだと述べた。すなわち、Bに分類した春木などにおいては、三拍形容詞のアクセントにおける類の合同（第2類アクセントへの統一）が遅かった可能性があり、その時期が四拍形容詞のアクセント変化が生じた時期と時間的に近かったことを推測した。

さらに、カタ形・テ形・ナル形におけるH型とL型のあらわれ方の違いについても検討を加え、カタ形のL型は不安定なためにH型への変化が速く進行するが、テ形とナル形はそうでないために変化が遅いのだと述べた。

三拍形容詞の連用形アクセントがL型からH型へ変化することによって、そして四拍形容詞の終止形アクセントがHHHLからHHLLへ変化することによって、形容詞のアクセント体系は整った形を取ることになる。本節では、それについて調査結果から確認した。

【注】

- 1 本節では「早稲田語類」（注2参照）において「三拍ク活用形容詞」とされている語のことを「三拍形容詞」と呼ぶ。
- 2 カタ形（「アカカタ」など）、テ形（「アカクテ」、方言形は「アカ（一）テ、アコ（一）テ」など）、ナル形（「アカクナル」、方言形は「アカ（一）ナル、アコ（一）ナル」など）をまとめて連用形アクセントと呼ぶことがある。

- 3 同じ和歌山市内であっても、地域によって HHL のあられ方に違いがある。和歌山北港の北のあたり、加太よりも和歌山市駅に近いところに位置する榎原の若年層には第 1 類の HHL が残っている状態であった。また、調査した年齢層や具体的な地域は不明だが、村内英一 (1982) の記述によれば和歌山市における三拍形容詞のアクセントは第 1 類の終止形に HHL と HLL とが併用されている。
- 4 津井では高年層の 1 名に H-型があらわれ、第 1 類に偏っている。先取りになるが、3.3 で述べるナル形でも同じ傾向がみられた。このことから春木と同様、部分的に両類の区別を残している可能性があるため、後で検討する。
- 5 「赤い」や「白い」のように名詞形をもつ語の場合、ナル形「アカナル」「シロンナル」の撥音は「に」に復元される（「赤になる」「白になる」）可能性が考えられる。あるいは、「遅い」や「長い」のような語においても「オソンナル」「ナガンナル」という語形になることから、もとが「赤くなる」「遅くなる」であるとも考えられ、そうなる则他の語形とは異なることになる。ただし、両者に大きな傾向の違いがみられなかったことから、ここでは特に区別せず、「アカナル」「アコナル」などと同様に扱う。
- 6 四拍形容詞のアクセントには「おいしい LLHL」のようなものも聞かれるが、これについてはごく少数であるため除外しておく。
- 7 四拍形容詞の連用形における語形について、とくにテ形とナル形については地域差がみられるが、ここでは「ウレシテ」と「ウレシナル」の形で示した。また、表 9 に二拍形容詞「無い」「良い (ええ)」を加えても、テ形以外は体系的に整った姿になる。

第2節 付属語「らしい」のアクセント

1. はじめに

現代語で「推定」の意味をあらわす助動詞〈ラシイ〉¹は、湯澤幸吉郎（1936=1982：440-441）、吉田金彦（1971：316-324）、此島正年（1973：413-419）などによれば、江戸期には主として名詞に接続するものであり、現在のように接続する語が多様化して用法が広がるのは、明治期に入ってからであるという。このようなことから、また現代語の〈ラシイ〉が形容詞とほとんど同様の活用をもつことから、古語において「推定」の意味をあらわす無変化型の助動詞〈ラシ〉と直接は結びつかないものであり、近世期に発生したという見方が通説である²。そして、形容詞的な接尾語〈ラシイ〉と深い関係もち、それが転成したものとされる。

本節は、上記のような成立事情をもつ助動詞〈ラシイ〉のアクセントについて述べるものである。この語のアクセントに関しては多くの先行研究に記述がみられるが、そのうち京阪式アクセントに関わるものを、次の第2項において掲げる。そして、それをふまえておこなった筆者の調査結果を第3項で述べ、第4項においては助動詞〈ラシイ〉のアクセントと接尾語〈ラシイ〉のアクセントとの間にどのような関係があり、それが現在どのように変化しているかという点について考察をおこなうことにする。

2. 先行研究

2.1 奥村三雄（1956）

奥村（1956）は京都方言の付属語アクセントについて、「自身の内省と、京都市出身の人に対する観察を中心と」し、それに基づいて分析をおこなったものである。奥村はそれぞれの付属語（辞）を自立語（詞）との続き方から、次の計9種にわけている。

- I 低起式の詞を高起式化しうるもの
 - i 前者の中、自ら核をもちうるもの
- II 有核型の詞を無核化しうるもの
 - ii 前者の中、自ら核をもちうるもの
- III 有核型の詞の核を保つ、辞自ら核をもたない
 - iii 前者の中、場面との関係で、有核型の詞の後でも高くつこうとするもの
- IV 有核型の詞の核を保つ、辞の内部に核をもちうる
- V 有核型の詞の核を保つ、辞の直前に核をもちうる
- v 前者の中、低起式四段動詞に接続する場合のみIIIになるもの

（記号は山岡が付した）

このうち助動詞〈ラシイ〉は、IVの「有核型の詞の核を保つ、辞の内部に核をもちうる」もの、また、iiの「有核型の詞を無核化し」かつ「自ら核をもちうる」ものであると分類がなされている。

2.2 榎垣実 (1963)

奥村 (1956) と同様の傾向を示すものとして、榎垣実 (1963) がある。これは京都方言を例にして音調の差異と法則について述べたものであるが、この中で、榎垣は自立語に付属語が接続した場合の音調を検討している。そして、助動詞〈ラシイ〉を「融着型」に分類する。これは、奥村 (1956) のIVと同じものであると考えられる。さらに榎垣 (1963) は、特に名詞に接続する〈ラシイ〉が「融着型」の中でも特殊なものであるとしており、その例を示す。すなわち、頭高型の語 (アタマなど) に接続すると、a. HLL-HLL、b. HLL-LLL、c. HHH-HLL の三種、尾高型の語 (マツチなど) に接合すると a. LLF-HLL、b. LLH-LLL、c. LLL-HLL の三種のアクセントがあらわれるという。aは「融着型」の特徴をあらわすものであるが、bは前の名詞を強調する音調であり、cのうち高起式につづくものは文節として統一された音調、低起式につづくものは〈ラシイ〉が強調された音調であると分析する。このcは奥村 (1956) のiiと対応するものであるといえよう。

2.3 和田實 (1984)

和田實 (1984) では関西アクセントの例として、神戸アクセントをとりあげる。和田は〈ラシイ〉について、助動詞の〈ラシイ〉については、「雨らしい」LF-HHLや「土らしい」HL-HHLのように発音される場合と、接尾語と同じように「雨らしい」LL-HHLや「土らしい」HH-HHLと発音される場合とがあると述べている。さらに、「男らしい」という表現について、「仮装の人を見つつ」いうのは「やっぱり男らしい」LLHL-HHL-HHLともLLHL-HHH-HHLともなるという。〈ラシイ〉のアクセントが奥村 (1956) や榎垣 (1963) とは異なるが、それ以外の傾向はおおむね一致するといつてよい。

2.4 中井幸比古 (2002ab)

京都アクセントを包括的に記録した中井 (2002ab) において、助動詞〈ラシイ〉および接尾語〈ラシイ〉は「庭らしい」HH-HLLや「針らしい」LL-HLL、「犬らしい」HL-HLLまたはHH-HLLなどのように発音されるという。動詞に助動詞〈ラシイ〉が接続する場合においても前の語と後ろの〈ラシイ〉の関係は名詞と同様であり、「着るらしい」HH-HLL、「見るらしい」LL-HLL、「居る (オル) らしい」HL-HLLまたはHH-HLLなどのような例があげられている。

また、周辺地域においては「庭らしい」HH-HHL、「針らしい」LL-HHLまたはLL-LHL、「犬らしい」HL-HHLまたはHH-HHLなどというふうになるという。京都とは〈ラシイ〉のアクセントが異なっており、和田 (1984) の記述する神戸アクセントと同様であることがわかる。

2.5 田中宣廣 (2005)

上記の先行研究と異なる傾向を述べたものとして、田中宣廣 (2005) がある。これは陸

中宮古・信州大町・東京・京都・鹿児島という五つの地域における付属語のアクセントについて包括的に述べたものである。この中で京都市方言における助動詞〈ラシイ〉のアクセントは、「支配式」に分類されている。つまり、前に接続する語のアクセントに関わりなく、自身がつ型に引きつけてしまう語であるということである。以下に、その例を示す。

【名詞】

血らしい HH-HLL 水らしい HH-HLL さかならしい HHH-HLL

(自立語の単独形はそれぞれ、血 H・水 HH・さかな HHH)

歯らしい HH-HLL 川らしい HH-HLL かがみらしい HHH-HLL

(単独形は、歯 F・川 HL・かがみ HLL)

目らしい HH-HLL 海らしい HH-HLL せなからしい HHH-HLL

(単独形は、目 R・海 LH・背中 LLH)

例外：猿らしい LF-HLL、鯨らしい LHL-HLL (単独形は猿 LF、鯨 LHL)

【動詞】

言うらしい HH-HLL するらしい HH-HLL

(単独形は、言う HH・する HH)

読むらしい HH-HLL 来るらしい HH-HLL

(単独形は、読む LH・来る LH)

【形容詞】

寒いらしい HHH-HLL 暗いらしい HHH-HLL

(単独形は、寒い HLL・暗い HLL)

ええらしい L [L] -HLL³ おいしいらしい L [LLL] -HLL

(単独形は、ええ LH・おいしい LLHL)

つまり、助動詞〈ラシイ〉は前の語がどのような型をもつものであっても、「猿、鯨」の類のような例外は認められるものの、すべて(高く)平らな型にひきつけるという特徴を有しているということである。

先に掲げた先行研究と異なるのは「海」「読む」のような低く始まる語の式を変えることがあるという点であるが、その理由は必ずしも明らかでない。

2.6 先行研究のまとめ

上記の先行研究における助動詞〈ラシイ〉の特徴を、前の語のアクセントから次の四つに分類することができる。

A. ほとんどすべての前接語を高平調にする

(田中 2005)

B. 前接する語が高起式の場合は高平調に、低起式の場合は低平調にする

(奥村 1956、榎垣 1963、和田 1984、中井 2002ab)

- C. 前接する語が単独で発音される際のアクセントをそのまま保つ
(奥村 1956、榎垣 1963、和田 1984、中井 2002ab、田中 2005 の一部)
- D. 前接する語が自身のアクセントを保ち、〈ラシイ〉が低平調で接続する
(榎垣 1963)

本節ではこの分類をふまえて以下の論を進めることにする。その際、仮の名称として A を支配型、B を準支配型、C を独立型、D を被支配型と呼ぶ。次に、筆者の実施した調査結果について述べる。

3. 調査結果

3.1. 使用するデータについて

調査地域は、京阪式アクセント地域に属する大阪府岬町深日・兵庫県淡路市岩屋・兵庫県南あわじ市福良と、高知県高知市とした。2014 年から 2016 年にかけて調査をおこなった。調査人数は次のとおりである。

深日：高年層 2 名、中年層 2 名、若年層 2 名

岩屋：高年層 3 名、中年層 4 名、若年層 3 名

福良：高年層 2 名、中年層 2 名、若年層 2 名

高知：高年層 2 名、中年層 2 名、若年層 2 名

調査は 2015 年 8 月～2016 年 4 月にかけておこない、調査票読み上げ形式をとって〈ラシイ〉を含む次のような文の発音を依頼した。

名詞接続：あれはどうやら（名詞）らしい

（名詞）：魚（サカナ）、鏡、兎（ウサギ）、鮑（アワビ）

動詞接続：あの人がどうやら（動詞）らしい

（動詞）：動く、歌う、開ける（アケル）、歩く、起きる、する、見る、寝る、来る、居る（おる）

形容詞接続：あれはどうやら（形容詞）らしい

（形容詞）：赤い、すごい、長い、白い、暗い、悲しい、四角い

また、〈ラシイ〉の活用形である「らしく（らしゅう）」と「らしかった」についても同様に調査した。そして、上にあげた自立語の単独形についてもそれぞれ調査をおこなった。とくに形容詞については、各活用形も含めて調査した。

上記と合わせて、「推定」の意味をあらわす上記の〈ラシイ〉との違いを明らかにするため、「様態」をあらわす〈ラシイ〉を含む次のような文の発音も依頼した。

名詞接続：とても／いかにも（名詞）らしい

（名詞）：男、女、兎（ウサギ）、鮑（アワビ）、魚

こちらについても基本形のほか、「らしくない」「らしかった」という形式について調査した。

得られた結果は 3.2 以降で表 1～表 6 を示しながら詳説するが、その際、比較対象とし

て調査した京都市の中年層1名のアクセントも表に加える。表は、地域と年齢層別に各語のアクセントを示した。また、同じ地域・年齢層に複数のアクセントがあらわれた場合はそのすべてを表記した。

3.2 単独形のアクセント

名詞の単独形アクセントは表1のとおりである。

地域	京都			深日			高知			
年齢層	中	高	中	若	高	中	若	高	中	若
さかな	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
あわび	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
かがみ	HLL	HHL	LHL	LHL	HHL	HHL	LHL/HLL	HHL	HHL	LHL/HLL
うさぎ	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH

地域	岩屋			福良		
年齢層	高	中	若	高	中	若
さかな	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
あわび	HLL	HLL	LHL	HLL	HLL	HLL
かがみ	HHL	HHL/LHL	HHL	HHL	HHL	HHL
うさぎ	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH

表1. 名詞アクセント

地域	京都			深日			高知			
年齢層	中	高	中	若	高	中	若	高	中	若
寝る	HH	HH	HH	HH	HH	HH	HH	HH	HH	HH
する	HH	HH	HH	HH	HH	HH	HH	HH	HH	HH
みる	LH	LH	LH	LH	LH	LH	LH	LH	LH	LH
来る	LH	LH	LH	LH	LH	LH	LH	LH	LH	LH
おる	HL	HL	HL	HL	HL	HL	HL	HL	HL	HL
歌う	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
開ける	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
動く	HHH	HHH	HHH	HHH	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
起きる	LLH	LLH	LLH	LLH	HLL	HLL	LLH	HLL	HLL	LLH
歩く	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH

地域	岩屋			福良		
年齢層	高	中	若	高	中	若
寝る	HH	HH	HH	HH	HH	HH
する	HH	HH	HH	HH	HH	HH
みる	LH	LH	LH	LH	LH	LH
来る	LH	LH	LH	LH	LH	LH
おる	HL	HL	HL	HL	HL	HL
歌う	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
開ける	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
動く	HHH	HHH	HHH	HLL	HHH	HHH
起きる	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH
歩く	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH

表2. 動詞アクセント

三拍名詞第1類「さかな」のアクセント、第6類「うさぎ」のアクセントには、地域差・世代差が見出されない。第3類「あわび」にもほとんど違いがないが、岩屋の若年層

にLHLが聞かれた。「かがみ」は第4類の語で、伝統的にはHHLであるが、京都の中年層や高知の若年層にHLLがあらわれるほか、深日の中・若年層と高知の若年層、岩屋の中年層に一部LHLがあらわれることがあった。

つづいて、動詞のアクセントは表2のような結果となった。二拍動詞と三拍動詞第1類「歌う」「開ける」には地域差も世代差もみられない。また、第3類「歩く」にも違いはなく、すべての地域・年齢層においてLLHである。第2類「動く」は高知の全年齢層と福良の高年層において伝統的なHLLであられ、その他の地域・年齢層においては第1類と同様のHHHとなっている。同じく第2類「起きる」は高知の高・中年層が伝統的なアクセントであるHLL、高知の若年層と京都・深日・岩屋・福良においては第3類と同様のLLHであられる。

表3は形容詞のアクセントをまとめたものである。三拍形容詞については、第1類「赤い」「暗い」と第2類「白い」「長い」の区別を残しているのが深日の高年層と高知の高・中年層であり、第1類HHL、第2類HLLと発音される。そのほかは両類ともにHLLである。

また、四拍形容詞第1類の「悲しい」は京都・深日・岩屋でHHLL、福良と高知においてはHHHLであった。「四角い」は深日と岩屋・福良において低起式のLLHLが多く、高知においては高起式で「悲しい」と同じHHHLであり、京都ではHHLLがあらわれる。

地域	京都	深日			高知		
年齢層	中	高	中	若	高	中	若
赤い	HLL	HHL	HLL	HLL	HHL	HHL	HLL
暗い	HLL	HHL	HLL	HLL	HHL	HHL	HLL
白い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
長い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
すごい	LHL	HLL	HLL	HLL/LHL	HLL	HLL	HLL
悲しい	HHLL	HHLL	HHLL	HHLL	HHHL	HHHL	HHHL
四角い	HHLL	LLHL	LLHL	LLHL	HHHL	HHHL	HHHL

地域	岩屋			福良		
年齢層	高	中	若	高	中	若
赤い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
暗い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
白い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
長い	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
すごい	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
悲しい	HHHL	HHHL	HHHL	HHHL	HHHL	HHHL
四角い	LLHL/HHLL	LLHL	LLHL	LLHL	LLHL	LLHL

表3. 形容詞アクセント

3.3 助動詞〈ラシイ〉が後接した時のアクセント

次に、3.2で示した単独形に助動詞〈ラシイ〉が接続した際のアクセントについて確認する。なお、「らしかった」「らしゅう」などの各活用形に接続する場合と基本形「らしい」に接続する場合の前接語にあらわれるアクセントは同一であったため、ここでは基本

形における調査結果だけを示す。

3.3.1 名詞+〈ラシイ〉

地域	京都	深日			高知		
年齢層	中	高	中	若	高	中	若
さかな-らしい	HHH-HLL	HHH-HLL	HHH-HLL	HHH-HLL	HHH-HLL	HHH-HLL	HHH-HLL
あわび-らしい	HLL-HLL	HHH-HHL	HLL-HLL HLL-LLL	HLL-HLL	HHH-HLL	HLL-HLL	HLL-HLL
かがみ-らしい	HLL-HLL	HHL-HLL	LHL-HLL LHL-LLL	LHL-HLL	HHH-HLL	HHL-HLL	LHL-HLL HLL-HLL
うさぎ-らしい	LLL-HLL	LLL-LHL	LLL-HLL	LLL-HLL	HHH-HLL	LLL-HLL	LLL-HLL

地域	岩屋			福良		
年齢層	高	中	若	高	中	若
さかな-らしい	HHH-HHL	HHH-HHL	HHH-HLL	HHH-HHL	HHH-HHL	HHH-HHL
あわび-らしい	HLL-LLL HHH-HLL HLL-LHL	HLL-HLL HHH-HHL HLL-LHL	LHL-HLL	HHH-HHL	HHH-HHL	HLL-HHL
かがみ-らしい	HHH-HHL	HHH-HHL LHL-LHL	HHL-HLL	HHH-HHL	HHH-HHL	HHH-HHL
うさぎ-らしい	LLL-LHL	LLL-LHL	LLL-HLL	LLL-LHL	LLL-LHL	LLL-HLL

表4.名詞+〈らしい〉

まず、名詞に〈ラシイ〉が後接した場合にあらわれるアクセントを表4に示した。表1と比較してみると、深日の高年齢層の「あわび」、岩屋の高年齢層と中年層における「かがみ」と「あわび」、福良の全年齢層における「かがみ」と高年齢・中年層の「あわび」、高知の高年齢層の「かがみ」「うさぎ」「あわび」が単独形とは異なるアクセントであるということがわかる。また、低起式の語である「うさぎ」において、高知の高年齢層にHHHがきかれ、式が変わっていると判断できる例である。

3.3.2 動詞+〈ラシイ〉

次に、動詞について表2と表5とを比べてみると、「する」「寝る」「歌う」「開ける」のような語については、とくに問題となるものはないということがわかる。一方で、第3類「居る」は終止形HLであるが、HHとなつてあらわれることがある。具体的には深日の高年齢層、岩屋の高年齢層、福良の高年齢層と中年層、高知の高年齢層と中年層にきかれ、その理由は〈ラシイ〉に接続したためであると考えられる⁴。同じように、高知の高年齢層における「動く」「起きる」のHHHと、中年層の「起きる」のHHH、福良の高年齢層における「動く」のHHHについても、〈ラシイ〉が後接することによって単独形とは異なるアクセントがあらわれたものと判断することができる。

古くから低起式の「見る」「来る」「歩く」はほとんどの地域で問題とならないが、名詞の場合と同じく高知の高年齢層においてはすべて高起式に、中年層においては「見る」と「来る」が高起式であらわれた。

地域	京都	深日			高知		
年齢層	中	高	中	若	高	中	若
寝る-らしい	HH-HLL	HH-HHL HH-HLL	HH-HLL HH-HHL	HH-HHL HH-HLL	HH-HLL	HH-HLL	HH-HLL
する-らしい	HH-HLL	HH-HHL HH-HLL	HH-HLL HH-HHL	HH-HHL HH-HLL	HH-HLL	HH-HLL	HH-HLL
みる-らしい	LL-HLL	LL-LHL	LL-HLL LL-LHL	LL-LHL LL-HLL	HH-HLL	HH-HLL	LL-HLL
来る-らしい	LL-HLL	LL-LHL	LL-HLL LL-LHL	LL-LHL LL-HLL	HH-HLL	HH-HLL	LL-HLL
おる-らしい	HL-HLL	HH-LHL	HL-HLL HL-LHL	HL-LHL HL-HLL	HH-HLL	HH-HLL	HL-HLL
歌う-らしい	HHH-HLL	HHH-HLL	HHH-HHL HHH-HLL	HHH-HLL	HHH-HLL	HHH-HLL	HHH-HLL
開ける-らしい	HHH-HLL	HHH-HLL	HHH-HHL HHH-HLL	HHH-HLL	HHH-HLL	HHH-HLL	HHH-HLL
動く-らしい	HHH-HLL	HHH-HLL	HHH-HHL HHH-HLL	HHH-HLL	HHH-HLL	HLL-HLL	HLL-HLL
起きる-らしい	LLL-HLL	LLL-LHL	LLL-HLL	LLL-HLL	HHH-HLL	HHH-HLL	LLL-HLL
歩く-らしい	LLL-HLL	LLL-LHL	LLL-HLL	LLL-HLL	HHH-HLL	LLL-HLL	LLL-HLL

地域	岩屋			福良		
年齢層	高	中	若	高	中	若
寝る-らしい	HH-HHL HH-HLL	HH-HLL HH-HHL	HH-HHL	HH-HHL	HH-HHL	HH-HLL
する-らしい	HH-HHL HH-HLL	HH-HLL HH-HHL	HH-HHL	HH-HHL	HH-HHL	HH-HLL
みる-らしい	LL-LHL LL-HLL	LL-LHL	LL-LHL	LL-LHL	LL-LHL	LL-HLL
来る-らしい	LL-LHL LL-HLL	LL-LHL	LL-LHL	LL-LHL	LL-LHL	LL-HLL
おる-らしい	HL-LHL HH-HLL HH-LHL	HL-LHL	HL-LHL	HH-LHL	HH-HLL	HL-LHL
歌う-らしい	HHH-HHL HHH-HLL	HHH-HHL	HHH-HLL	HHH-HHL	HHH-HHL	HHH-HHL
開ける-らしい	HHH-HHL HHH-HLL	HHH-HHL	HHH-HLL	HHH-HHL	HHH-HHL	HHH-HHL
動く-らしい	HHH-HHL HHH-HLL	HHH-HHL	HHH-HLL	HHH-HHL	HHH-HHL	HHH-HHL
起きる-らしい	LLL-LHL LLL-HLL	LLL-LHL	LLL-HLL	LLL-LHL	LLL-LHL	LLL-HLL
歩く-らしい	LLL-LHL LLL-HLL	LLL-LHL	LLL-HLL	LLL-LHL	LLL-LHL	LLL-HLL

表5. 動詞+〈らしい〉

3.3.3 形容詞+〈ラシイ〉

形容詞に〈ラシイ〉が接続した場合のアクセントを、表6に示した。このうち、本来の終止形アクセントと異なる型であらわれたのは、深日の高年齢層の「赤い」「暗い」「白い」「長い」「すごい」「悲しい」、岩屋の高年齢層と中年層（一部）の「赤い」「暗い」「白い」「長い」「すごい」「悲しい」「四角い」、福良の高年齢層と中年層の「赤い」「暗い」「白い」「長い」「すごい」「悲しい」、高知の高年齢層の「赤い」「暗い」「白い」「長い」「すごい」「悲しい」「四角い」であった。おおむね、動詞・名詞の場合と同じ分布を示す。

また、「四角い」について、単独形がHHHLとなる地域・年齢層とLLHLとなる地域・年

齡層があることは3.2で述べたとおりであるが、〈ラシイ〉が接続することによって低起式から高起式に変わる地域はみられなかった。

地域	京都	深日			高知		
年齢層	中	高	中	若	高	中	若
赤い-らしい	HLL-HLL	HHH-HLL	HLL-LLL	HLL-HHL HLL-HLL	HHH-HLL	HHL-HLL	HLL-HLL
暗い-らしい	HLL-HLL	HHH-HLL	HLL-LLL	HLL-HHL HLL-HLL	HHH-HLL	HHL-HLL	HLL-HLL
白い-らしい	HLL-HLL	HHH-HLL	HLL-LLL	HLL-HHL HLL-HLL	HHH-HLL	HLL-HLL	HHL-HLL HLL-HLL
長い-らしい	HLL-HLL	HHH-HLL	HLL-LLL	HLL-HHL HLL-HLL	HHH-HLL	HLL-HLL	HLL-HLL
すごい-らしい	LHL-HLL	HHH-HLL	HLL-LLL	HLL-HHL LHL-HLL	HHH-HLL	HHL-HLL	HLL-HLL
悲しい-らしい	HHLL-HLL	HHHH-HLL	HHLL-LLL	HHLL-HHL HHLL-HLL	HHHH-HLL	HHHL-HLL	HHHL-HLL
四角い-らしい	HHLL-HLL	LLLL-HLL	LLHL-LLL	LLHL-HHL LLHL-HLL	HHHH-HLL	HHHL-HLL	HHHL-HLL

地域	岩屋			福良		
年齢層	高	中	若	高	中	若
赤い-らしい	HLL-LLL HHH-HHL	HLL-HLL HHH-HHL HLL-HHL	HHH-HLL HLL-HLL	HHH-HHL	HHH-HHL	HLL-HLL
暗い-らしい	HLL-LLL HHH-HHL	HLL-HLL HHH-HHL HLL-HHL	HHL-HLL	HHH-HHL	HHH-HHL	HLL-HLL
白い-らしい	HLL-LLL HHH-HHL	HLL-HLL HHH-HHL HLL-HHL	HHH-HLL HLL-HLL	HHH-HHL	HHH-HHL	HLL-HLL
長い-らしい	HLL-LLL HHH-HHL	HLL-HLL HHH-HHL HLL-HHL	HHH-HLL HLL-HLL	HHH-HHL	HHH-HHL	HLL-HLL
すごい-らしい	HLL-LLL HHH-HHL	HLL-HLL HHH-HHL	HHH-HLL HLL-HLL	HHH-HHL	HHH-HHL	HLL-HLL
悲しい-らしい	HHLL-LLL HHHH-HHL	HHHL-HLL HHHH-HHL	HHHL-HLL	HHHH-HHL	HHHH-HHL	HHHL-LLL
四角い-らしい	LLHL-LLL HHHH-HHL LLHL-HHL	LLHL-HLL LLLL-HHL	LLHL-HLL	LLLL-HHL	LLLL-HHL	LLLL-HHL

表6. 形容詞+〈らしい〉

3.4 「らしい」のアクセント

「らしい」のアクセントについて、表4から表6をみれば明らかなように、今回の調査では4種があらわれた。すなわち、HLL・HHL・LHL・LLLである。地域別にみると、京都と高知においてはHLLが多い。深日と岩屋・福良においてはHHLとLHLが多くあらわれる傾向にあるが、それでも若年層には比較的HLLが多いようである。中井（2002ab）の周辺地域や和田（1984）では「らしい」のアクセントがHHLだったことも含め、HHLは広い地域に分布しているといえるであろう。

このHHLとLHLのあらわれ方については、調査結果から、前に「寝るHH」「歌うHHH」のような高く終わる語が接続する場合にHHL、低く終わる語が接続する場合にはLHLとなる傾向がみられることがわかるが、たとえば表6の下段に示した福良の結果のように、

「四角い LLLL」という低く終わる語の後ろに HHL があらわれることもあるため、完全ではない。

3.5 接尾語〈ラシイ〉のアクセント

接尾語〈ラシイ〉が高起式の語に後接する場合、その語のアクセントには世代差や地域差はほとんどみられず、次のようになる。

魚らしい HHH-HLL (HHH-HHL)

アワビらしい HHH-HLL (HHH-HHL)

男らしい HHH-HLL (HHH-HHL)

また、「ウサギらしい」のような単独形のアクセントが LLH である語に接続する場合には、HHH-HLL (HHH-HHL) となる場合と LLL-HLL (LLL-LHL/LLL-HHL) となる場合があり、そのあらわれ方は 3.3.1 で示した助動詞〈ラシイ〉に名詞が前接する場合と同様の傾向を示すことが、調査によって明らかとなった。

4. 地域差とアクセントの変遷

4.1 先行研究との比較

第 3 項で述べた調査結果と、第 1 項でまとめた先行研究との比較から、次の六つの点について指摘することができる。

- ア) 支配型のアクセントは、田中 (2005) の調査した京都高年層だけでなくその他の京阪式アクセント地域にもあらわれるものである。今回は高知の高年層 (一部中年層) にあらわれることがあったが、高知でも年齢層がさがると支配型にはなりにくい。
- イ) 準支配型のアクセントは深日・岩屋・福良の高年層や中年層にあらわれやすい。
- ウ) 独立型のアクセントは、京都の中年層をはじめとして広い範囲であらわれる。
- エ) 被支配型のアクセントは上記のイやウに比べると少ないが、年齢層を問わずに聞かれることがある。
- オ) 「らしい」のアクセントは今回の調査結果に 4 種あらわれる。田中 (2005) などでは HLL (-3 型)、和田 (1984) などでは HHL (-2 型) が多いが、今回の調査結果においても、地域や年齢層によって両型があらわれた。
- カ) 接尾語〈ラシイ〉に前接する高起式の名詞は高平調になるが、低起式の名詞は高平調になる場合と低平調になる場合とがあり、その傾向は助動詞〈ラシイ〉に前接するときのものと一致する。

次に、このように複数の傾向が認められることについて、現代語の助動詞〈ラシイ〉の成立と関連付けて述べる。

4.2 助動詞〈ラシイ〉と接尾語〈ラシイ〉

4.2.1 室町から江戸期における接尾語〈ラシイ〉のアクセント

本節のはじめにも述べたように、現代語で「推定」の意味をあらわす助動詞〈ラシイ〉は、形容詞的な接尾語〈ラシイ〉が転成したものである。この接尾語〈ラシイ〉について、『日本国語大辞典 第二版』（オンライン版）では以下のような用例があげられている。抜粋して示す。

*史記抄〔1477〕一七・游侠列伝「上はなんとない様で内心が毒らしうて人を傷害するぞ」

*歌舞伎・万歳丸〔1694〕一『女さへ見ればびろびろと性のわるい、ちと嗜（たしな）ましゃれ』半之丞聞き『はて仔細らしい』

*浄瑠璃・堀川波鼓〔1706頃か〕「夫婦らしうしっぽりと、いつ語らひし夜はもなし」

*浄瑠璃・心中刃は氷の朔日〔1709〕上「あまり気遣ひ切なさにうらみらしい詞つき」

*滑稽本・八笑人〔1820～49〕初・一「狂言の気をはなれていかねへとまじめらしくねへ」

これらが当時どのようなアクセントで発音されていたかについては必ずしも明確でない⁵が、接尾語〈ラシイ〉はウ音便が生じることなども含めて形容詞とまったく同じ活用をもつため、アクセントもこれと同じであると考えられる。

南北朝期に起こったとされる「体系変化」後の形容詞アクセントは、終止形が3拍以上の場合、後ろから数えて2拍目で下がる-2型（3拍 HHL、4拍 HHLH）と後ろから数えて3拍目で下がる-3型（3拍 HLL、4拍 HLLH）の2種類となり、拍数が増えてもこの対応は変わらない。また、形容詞は現在においても一部の例外⁶を除いて低起式ではなく高起式である。このことから、接尾語〈ラシイ〉に名詞が前接した場合のアクセントも、上にあげた-2型と-3型のどちらかの型になったものと考えることができる。すなわち、低起式の語が前接しても、接尾語〈ラシイ〉の「形容詞のようにまとまろうとする力」がはたらき、「ウサギらしい」のような単独形のアクセントが LLH である語に接続する場合にも「ウサギらしい HHH-HLL（HHH-HHL）」のように発音された可能性がある。

しかしながら少なくとも現在は、3.5で述べたように、たとえば「ウサギらしい」のアクセントは HHH-HLL（HHH-HHL）となる場合と LLL-HLL（LLL-LHL/LLL-HHL）となる場合があり、前接する語が必ずしも高平調だけというわけではない。

4.2.2 助動詞〈ラシイ〉のアクセント変化

助動詞〈ラシイ〉が接尾語〈ラシイ〉の転成したものであるとするならば、そのアクセントももともと接尾語と同じであったと考えるのが自然であろう。つまり、助動詞〈ラシイ〉に前接する語も、接尾語〈ラシイ〉に前接する場合と同じく高平調になりやすかった

といえる。ところがこれは、先行研究による記述や筆者のおこなった調査結果と必ずしも一致しない。その理由については、次第に〈ラシイ〉のもつ「前の語と合わさって一語の形容詞になろうとする力」が弱まったことで助動詞〈ラシイ〉として独立性をもつようになり、それによって前接する語が、単独で発音されるときと同一のアクセントを保つようになるためだと考えられる。

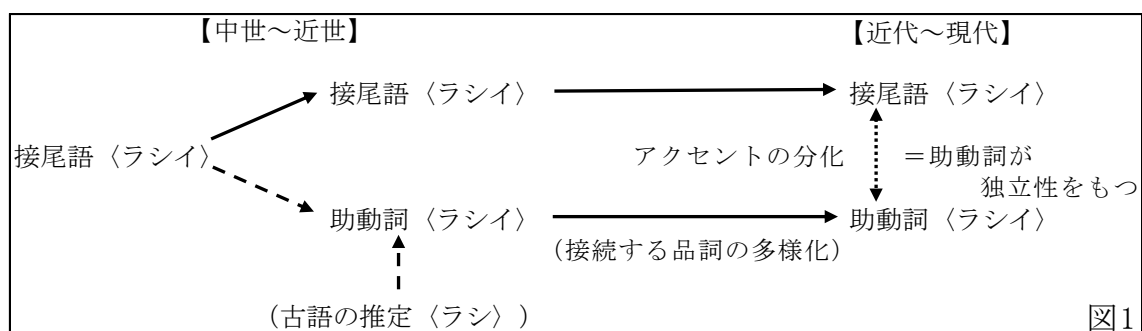
田中（2005）における分類や、高知の高年層における調査結果にあらわれる支配型のアクセントは、一語の形容詞としてまとまろうとする、接尾語〈ラシイ〉がもともと有していた特徴があらわれたものと解釈することができる。また、同じ地域であっても複数のアクセントがあらわれるのは、助動詞〈ラシイ〉がまだもとの接尾語〈ラシイ〉の名残をとどめているためだといえよう。

一方で、中井（2002ab）による記述や、調査結果で京都の中年層をはじめとして広くあらわれる独立型のアクセントは、上記に比べると前に接続する自立語との結合が弱まった段階、すなわち助動詞として独立したことを示すものである。特に京都の中年層においてはこのアクセントが実現しており、その中で前の自立語に付き従う被支配型のアクセントがあらわれるのだと考えることができる。

なお、助動詞〈ラシイ〉に前接する語のアクセントには品詞によって多少の傾向差がみられ、独立型のアクセントは動詞や形容詞に比べると名詞に多くあらわれる。これは、前の語と合わさって一語の形容詞になるという、もとの性質を残しやすい接尾語〈ラシイ〉とアクセントによって区別しようとする力がはたらくためであろう。動詞や形容詞には助動詞〈ラシイ〉しか接続せず、両者の区別をする必要がないために準支配型が比較的あらわれやすいのだといえる。

4.2.3 〈ラシイ〉におけるアクセントの変遷

これまで述べたことをふまえて、接尾語〈ラシイ〉と助動詞〈ラシイ〉との関係を整理すると、図1のようにあらわすことができる。



助動詞〈ラシイ〉のアクセントが変化し、接尾語〈ラシイ〉と区別されるようになる時期については特定することができないものの、接尾語〈ラシイ〉と同じアクセントであった名残をみせるのが田中の調査した京都の高年層であり、筆者がおこなった高知の高年層における調査の結果である。また、4.1でイとして述べた傾向は助動詞〈ラシイ〉のアクセ

セントが徐々に接尾語〈ラシイ〉のアクセントから分化していく様子を示したものであり、ウやエの傾向は二つのアクセントが分化した様子を示したものであると捉えることができよう。そして、このように考えることで、これまで先行研究に述べられてきたことや、今回の調査結果にみられる複数の傾向について説明することが可能になる⁷。

また、4.2.1にも述べたが、接尾語〈ラシイ〉に接続する語は現在において必ずしも高起式にまとまるわけではない。この理由については明らかでないが、現段階では助動詞〈ラシイ〉と分化する中でそのアクセントに影響を受けたものと解釈する。

4.3. -2型と-3型にみる地域差と世代差

3.4で述べたように、また4.1においてオとしてあげたように、「らしい」のアクセントには主に-3型(HLL)と-2型(HHL, LHL)があらわれる。これらのあらわれ方については、おおむね形容詞の終止形アクセントのあらわれ方と一致する傾向にある。現時点では4拍までの形容詞しかまとまった調査をおこなっていないため、ただちに断定することはできないが、「悲しい、嬉しい」などのような四拍形容詞がHHHLで発音される地域や年齢層においては「らしい」にもHHL(-2型)があらわれる傾向にあるといえる。ただし深日の調査結果をみると、「らしい」のアクセントには形容詞のアクセントよりも-2型があらわれやすいようである⁸。

また、低起式の語であっても、たとえば「歩く」LLHに「らしい」が接続する場合にLLL-LHLのようなアクセントがきかれたことについて、これも「おいしい」LLHLなど低く始まる形容詞のアクセントと同じ型であると考えることができる。前接する語が同じようにLLLとなっても、「らしい」のアクセントが-3型のLLL-HLLであった地域・年齢層とは異なるものであるといえよう。LLL-LHLは接尾語的な性質を残したものの、LLL-HLLは助動詞的な性格が強くなったものと捉えるべきである。

5. おわりに

以上、本節では《ラシイ》のアクセントについて、先行研究による記述と筆者がおこなった調査結果とをふまえて述べてきた。

結論として、〈ラシイ〉と前接の語のアクセントにさまざまな傾向が認められるのは、現代語において「推定」の意味をあらわす助動詞〈ラシイ〉が、もともとは形容詞を作る接尾語であった〈ラシイ〉の転成によって成立した点と関係するという点を指摘した。そしてその中で、筆者のおこなった調査結果にあらわれたような地域差や世代差が見出されたといえる。また、「らしい」のアクセントにおけるHLLのような-3型とHHL・LHLのような-2型のあらわれ方には、形容詞の終止形アクセントと関連性が存することも述べた。

ただし、接尾語〈ラシイ〉および助動詞〈ラシイ〉の古いアクセントについてはアクセント資料から知ることがかなわなかったため、形容詞アクセントとの対応から推測せざるを得なかった。また、「らしい」における-3型(HLL)と-2型(HHL, LHL)のあらわれ方

についても、5拍以上の形容詞を調査し、さらに検討する必要がある。これらを今後の課題とする。

【注】

- 1 「助動詞」あるいは「接尾語」という名称の指し示す範囲については論の分かれるところであるが、本節では便宜上、名詞・動詞・形容詞に接続して「推定」の意味をあらわす〈ラシイ〉を「助動詞〈ラシイ〉」、名詞に接続して「様態」をあらわす〈ラシイ〉を「接尾語〈ラシイ〉」と呼ぶことにする。
- 2 ただし、意味の面では古語で推定をあらわす〈ラシ〉が何らかの影響を及ぼしたのではないかと考えられるという指摘もなされている。
- 3 []は漸昇性をあらわす。
- 4 「居る（オル）」を単独で発音する場合のアクセントはいずれの地域・年齢層においてもHLであったことから、この語は二拍動詞第1類（「置く」など）と同一にはなっておらず、〈ラシイ〉が接続したことによってアクセントが変わったと捉える。
- 5 浄瑠璃からの用例について確認したところ、いずれも胡麻章は付されていない（『正本近松全集』）。また、助動詞〈ラシイ〉についても、現時点でアクセントがわかる資料は見つけられていない。
- 6 現代において三拍形容詞「すごい」にLHLがあらわれるほか、4拍以上では「おいしい」「四角い」にLLHLがみとめられるが、これらは形容詞のアクセント体系の中において例外であるといえる。
- 7 中井（2002ab）と田中（2005）で調査されているのは年代のさほど変わらない話者であるが、その結果には違いがみられる。調査方法などの影響もあろうが、〈ラシイ〉のアクセント変化はそれほど古くに生じたものではないと考えられるから、ちょうど境目にあたる年代であるためにこの違いがあらわれたと解釈する。
- 8 本章の第3節に述べるとおり、動詞に接続して「希望」の意味をあらわす助動詞〈タイ〉なども同じ傾向をみせることから、自立語よりも付属語の変化のほうが遅いと考えられる。

第3節 付属語「たい」のアクセント

1. はじめに

現代語で「希望」の意味をあらわす助動詞〈タイ〉は、古典語において同じく「希望」の意味をあらわした助動詞〈タシ〉の連体形イ音便〈タイ〉が、もとの終止形〈タシ〉に置き換わったものである。この語には意味の上でも接続の上でも大きな変化が起こっておらず、活用は現代語においても、不完全ではあるものの形容詞型とされる。なお、古典語〈タシ〉の語源については必ずしも明らかでないが、もとは形容詞である〈イタシ〉から生じたといひ、鎌倉時代頃から次第に多く用いられるようになった（吉田金彦 1971、日本語文法学会編 2014 など）。

本節では、第2項で紹介する先行研究における記述と第3項に述べる筆者のおこなった調査結果とをふまえ、第4項で現代の京阪式アクセント地域において動詞の連用形に接続する助動詞〈タイ〉のアクセントがどのような性質をもつのかという点について考察をおこなう。その中で、近世期の京都・大坂アクセントやそれ以前のアクセントにも注目し、〈タイ〉と前接語のアクセントに変化がみられるかについて論じる。また、第5項では〈タイ〉そのもののアクセントに変化はみられるかといった点について、調査結果と近世期のアクセント変化とを整理して述べることにする。

2. 先行研究

京阪式アクセント地域における助動詞〈タイ〉のアクセントを取り上げたものとして、まず奥村三雄（1956）があげられる。奥村（1956）は京都方言の付属語アクセントについて、「自身の内省と、京都市出身の人に対する観察を中心と」し、それに基づいて分析をおこなったものである。氏はそれぞれの付属語（辞）について、自立語（詞）との続き方から次のような計9種にわけている。前節にも記したが、再掲する。

- I 低起式の詞を高起式化しうるもの
 - i 前者の中、自ら核をもちうるもの
- II 有核型の詞を無核化しうるもの
 - ii 前者の中、自ら核をもちうるもの
- III 有核型の詞の核を保つ、辞自ら核をもたない
 - iii 前者の中、場面との関係で、有核型の詞の後でも高くつこうとするもの
- IV 有核型の詞の核を保つ、辞の内部に核をもちうる
- V 有核型の詞の核を保つ、辞の直前に核をもちうる
- v 前者の中、低起式四段動詞に接続する場合のみCになるもの

（記号は山岡による）

このうち、助動詞〈タイ〉はiの「低起式の詞を高起式化しうるもの」で、かつ「自ら核をもちうるもの」に分類される。例えば低起式の二拍動詞「読む LH」に接続した場合に

は、「読みたい HH-LL」のようになると示されている¹⁾。

また、田中宣廣 (2005) も、奥村 (1956) と同じように助動詞〈タイ〉を捉えている。田中 (2005) は、陸中宮古・信州大町・東京・京都・鹿児島という五つの地域における付属語のアクセントについて包括的に述べたものであり、基本的にすべての付属語を次のような 6 種に分類する。

従接式：前接自立語にそのまま続く。付属語には下がって続くことがある。

声調式：前接自立語の声調が及ぶ。

独立式：前接語からアクセント上独立する。

下接式：前接自立語が平板型なら下がって続き、起伏型なら下がらず続く。

支配式：前接語のアクセントに関わりなく、自身の型に引きつけてしまう。

共下式：その付属語の 1 拍前から下がる。

(田中 2005:96)

京都方言における助動詞〈タイ〉は、上記のうち「支配式」に分類されている。つまり、この語は「アクセント節の相」を決める力をもつということで、〈タイ〉が後ろに続くと前の語はもとのアクセントにかかわらず高平となる。例えば²⁾、「言いたい HH-LL」「したい H-LL」「読みたい HH-LL」「来たい H-LL」などである。

中井幸比古 (2002ab) でも、上にあげた二つの先行研究とおおむね共通する傾向が示されているが、京都方言で「歩く LLH」「入る LLH」に〈たい〉が接続した形である「歩きたい LLH-LL」「入りたい LLH-LL」は低起式を保つ。また、同じく京都方言でも若年層においては「読みたい LH-LL」「建てたい LH-LL」といったアクセントが観察されるとしている。そのほか、周辺地域 (高知、徳島など) においては「読みたい HH-HL (若年層 LL-HL)」や「歩きたい LLL-HL」のように〈タイ〉の内部に下がり目がくるアクセントがあらわれる。

一方、京都方言を例にして音調の差異と法則について述べた榎垣實 (1963) では、〈タイ〉について上記とは異なる捉え方がなされている。榎垣 (1963) によれば、助動詞〈タイ〉は「添着型」の付属語で、前の語に低く続く性質をもつ。榎垣の分類には「添着型」のほかに、「融着型」「吸着型」「融合型」といったものがあるが、そのうち「吸着型」は「尾低型」も「高平型にしてしまう」、あるいは「中高型」を「低平型にしてしまう」ものであると説明される。この特徴から、「吸着型」は奥村 (1956) の分類における I または i、田中 (2005) のいう「支配式」と類似するものと考えられるが、「添着型」に分類された〈タイ〉は、当然のことながらそれらとは異なる性質をもつものであると解釈することができよう。

以上の先行研究をふまえ、次に筆者の実施した調査結果について述べる。

3. 京阪式アクセント地域における調査結果

3.1 使用するデータについて

調査地域は、京阪式アクセント地域に属する大阪府岬町深日・兵庫県淡路市岩屋・兵庫県南あわじ市福良と、高知県高知市とした。各地域における調査人数は次のとおりである。

深日：高年層 2 名、中年層 2 名、若年層 2 名

岩屋：高年層 3 名、中年層 4 名、若年層 2 名

福良：高年層 2 名、中年層 2 名、若年層 2 名

高知：高年層 2 名、中年層 2 名、若年層 2 名

調査は 2015 年 8 月に現地を訪れておこなった。そして、二拍動詞第 1 類「する・寝る」、第 2 類「来る・見る」、三拍動詞第 1 類「歌う・開ける」と第 2 類「動く・起きる」、および第 3 類「歩く」の連用形に〈タイ〉を接続した形での発音を依頼した。

また、それぞれの動詞について、終止形（基本形）をはじめとした各活用形のアクセントも調査をおこなった³。

得られた結果は次の 3.2 で詳説するが、その際、比較対象として調査した京都市の中年層 1 名のアクセントもともに掲げる。

3.2 調査結果

3.2.1 動詞のアクセント

拍	類別	語例	京都	深日	岩屋	福良	高知
2拍	第1類	する・寝る	HH	HH	HH	HH	HH
	第2類	来る・見る	LH	LH	LH	LH	LH
3拍	第1類5段	歌う	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
	第1類1段	開ける	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
	第2類5段	動く	HHH	HHH	HHH	HLL(HHH)	HLL(HHH)
	第2類1段	起きる	LLH	LLH	LLH	LLH	HLL(LLH)
	第3類	歩く	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH

表1. 動詞終止形のアクセント

拍	類別	語例	京都	深日	岩屋	福良	高知
2拍	第1類	言った・した	HHL・HL	HHL・HL	HHL・HL	HHL・HL	HHL・HL
	第2類	読んだ・来た	LLH・HL	LLH・HL	LLH・HL	LLH・HL	LLH・HL
3拍	第1類5段	歌った	HLLL	HLLL	HLLL	HHLL(HLLL)	HHLL
	第1類1段	開けた	HLL	HLL	HLL	HLL	HLL
	第2類5段	動いた	HLLL	HLLL	HLLL(HHLL)	HLLL(HHLL)	HLLL(HHLL)
	第2類1段	起きた	LHL	LHL	LHL	LHL	LHL
	第3類	歩いた	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL	LHLL

表2. 動詞過去形のアクセント

まず、調査をおこなった二拍動詞・三拍動詞の終止形（基本形）アクセントについて確認する。それぞれのアクセントを類別・地域ごとに調査結果をまとめたのが表 1 である。

表 1 のうち、() 内に入れたのは中年層・若年層に聞かれるアクセントである。すべての地域に共通して、二拍動詞第 2 類と三拍動詞第 3 類および第 2 類の 1 段活用が低起式であることがわかる。

次に、二拍動詞・三拍動詞の連用形に過去をあらわす助動詞〈タ〉が接続した形、いわゆる過去形のアクセントを表 2 に示す。

表 1 と同じく、() 内には中年層・若年層に聞かれるアクセントを示した。二拍動詞第 2 類、三拍動詞第 2 類の一段活用と第 3 類がそれぞれ低起式であることがわかる。

この結果をもとにして、次に二拍動詞および三拍動詞の連用形に助動詞〈タイ〉が後接したときのアクセントを確認する。

3.2.2 〈タイ〉接続形のアクセント

	地域	京都			高知			
	年齢層	中	高	中	若	高	中	若
連用形+ 〈タイ〉	し たい	H-LL	H-HL	H-HL	H-HL	H-HL	H-HL	H-LL
	寝 たい	H-LL	H-HL	H-HL	H-HL	H-HL	H-HL	H-LL
	見 たい	H-LL	H-HL	H-HL	H-HL	H-HL	H-HL	H-LL
	来 たい	H-LL	H-HL	H-LL	H-HL	H-HL	H-HL	H-HL
	歌い たい	HHH-LL	HHH-HL	HHH-HL	HHH-HL	HHH-HL	HHH-LL	HHH-LL
	開け たい	HH-LL	HH-HL	HH-HL	HH-HL	HH-HL	HH-HL	HH-HL
	動き たい	HHH-LL	HHH-HL	HHH-HL	HHH-HL	HHH-HL	HHH-LL	HHH-LL
	起き たい	LH-LL	LL-HL	LL-HL	LL-HL	HH-HL	HH-HL	HH-HL
歩き たい	LLH-LL	LLL-HL	LLL-HL	LLL-HL	LLH-LL	LLH-LL	LLH-LL	
	地域	岩屋			福良			
	年齢層	高	中	若	高	中	若	
連用形+ 〈タイ〉	し たい	H-HL	H-HL	H-HL	H-HL	H-HL	H-HL	
	寝 たい	H-HL	H-HL	H-HL	H-HL	H-HL	H-HL	
	見 たい	H-HL	H-HL	H-HL	H-HL	H-HL	H-HL	
	来 たい	H-HL	H-HL	H-HL	H-HL	H-HL	H-HL	
	歌い たい	HHH-HL	HHH-HL	HHH-HL	HHH-HL	HHH-HL	HHH-HL	
	開け たい	HH-HL	HH-HL	HH-HL	HH-HL	HH-HL	HH-HL	
	動き たい	HHH-HL・HHH-LL	HHH-HL	HHH-HL	HHH-HL	HHH-HL	HHH-HL	
	起き たい	LL-HL	LL-HL	LL-HL	LL-HL	LL-HL	LL-HL	
歩き たい	HHH-HL・LLH-LL・LLL-HL	LLL-HL	LLL-HL	LLL-HL	LLL-HL	LLL-HL		

表3. 動詞連用形+〈タイ〉のアクセント

二拍動詞および三拍動詞の連用形に助動詞〈タイ〉を後接した形のアクセントを地域・年齢層別に示したのが表3である。ここでは、聞かれたアクセントをすべてあらわした。

表3から、ほとんどの場合に〈タイ〉の前接語がもとの式を保つということがいえる。岩屋の高年齢層においては低起式の語である三拍動詞第3類「歩く」が高起式になっている話者がいる⁴が、これについてはひとまず例外として取り扱う。高知においては全年齢層において三拍動詞第2類一段活用の「起きる」が高起式となっており、4.1で過去形の場合を例にあげて示した連用形とは式が異なるが、「歩く」は低起式が保たれるという結果であった。

また、「たい」そのもののアクセントは、中井(2002ab)にあげられている分布とおおよそ重なる様子を見せ、京都においてはLL、深日・岩屋・福良・高知ではHLであるが、深日の中年層や高知の若年齢層において京都と同じ型が聞かれることがあった。

4. 〈タイ〉と前接語との関係

4.1 先行研究との比較

ここでは、第2項にあげた主に現代の京都方言における〈タイ〉のアクセントについて述べた先行研究と、第3項でまとめた筆者の調査結果とを比較して、助動詞〈タイ〉の性質について考えたい。

両者を比較した結果、まず、京都の中年層は先行研究でいう榎垣(1963)と同様の傾向を示し、奥村(1956)や田中(2005)などとは異なっているということがわかる。この榎垣(1963)

は、中井 (2002ab) であげられている若い世代のアクセントと一致する。また、深日や岩屋・福良などにおいて「起きる LLH」は「起きたい LH-LL (あるいは LL-HL)」と発音されており、「起きたい HH-LL (あるいは HH-HL)」のような高起式にはならない。奥村 (1956)・田中 (2005) とは違う地域ではあるが、同じ京阪式アクセント地域であっても両氏による〈タイ〉の分類と相違する場合があるということになる。

一方で、高知において「起きたい」に HH-LL があらわれる点は、田中 (2005) による分類や中井 (2002ab) の記述と一致するといえる。ただし、岩屋の高年層以外では「歩く LLH」に〈たい〉が接続しても高起式とはならない。奥村 (1956) や田中 (2005) においては「歩く」のような三拍動詞第 3 類の語に〈たい〉が後接する場合のアクセントについてはふれられていないが、このように無視できない例外があるとすれば、奥村 (1956) による i という分類、また田中 (2005) による「支配式」という分類が必ずしも適切とはいえないということになる。

これらをふまえ、ひとまず以下のように仮定して 4.2 へうつる。

《古く、〈タイ〉は三拍動詞第 3 類「歩く LLH」に後接する場合も「歩きたい HHH-LL」のように前の語を高起式とする力をもっていたが、次第にそれが弱まった》

4.2 アクセント史資料との比較

上に述べた点についてさらに検討するため、ここでは近世期の京都・大坂アクセントを反映しているとされる二つの資料、『平家正節』⁵と『近松世話物浄瑠璃』⁶において、〈タイ〉

本活用	連用形	まゐらせたくおもは	(××上上コ×ー)	8下六斬15-1口説
		帰りたくは	(上上上×××)	15上内女7-3口説
		保ちたふ候	(上上上コ×ー)	8下戒文23-5口説
		承り度うは	(××××上上コ××)	5下千寿43-1口説
		したふは	(上コ××)	8下戒文13-2口説
		奉りたふは	(××上上上コ××)	7下重斬13-2口説
		上ぼりたふは	(上上上上××)	2上足摺15-2白声
		申度うは	(上上上コ××)	9下三草5-4口説
		まゐらせたふは	(××××上××)	2下征夷16-1白声
	連体形	入り度よし	(上上コ×ー)	7下重斬9-2口説
		蒙り度き事	(上上上コ××ー)	7下重斬7-1口説
		かうむり度き事	(上上上上上上上×)	15上内女35-4白声
	已然形	参りたけれと	(××上上コ××)	10下六乞17-5口説
見たけれ共 ^ゞ		(上上上×××)	11上妓王55-5素声	
見たけれ共 ^ゞ		(上上コ×××)	11上妓王52-5口説	
とらせたけれども		(上上上上××××)	1上無文10-3素声	
カリ活用	連用形	死 ^二 たからず	(上上コ×××)	4下老馬13-3口説
		入りたかりつるは	(上上上×××××)	5上巖幸23-2素声
		入りたかりつれ共 ^ゞ	(上上コ××××××)	9下惟出33-4口説
		入りたかりつれども	(上上コ××××××)	7下重斬15-1口説
		入りたかりつれども	(上上上××××××)	15上内女39-5白声

資料1. 『平家正節』の〈タイ〉

(古形〈タシ〉、以降は〈タイ〉で統一する)に前接した際の動詞が高起式であるのか低起式であるのかを確認することにする。

資料1に示した例のうち、「まゐる」と「とる」の2語が連用形も含めて低起式である。二拍動詞第2類五段活用の「とる」は、その派生形「とらす」に〈タイ〉が接続することによって始まりが高くなったものと解釈される。その一方で、「まゐる(まゐらす)」は低く始まると解釈することができる⁷。この語については、4.1で問題となった「歩く」と同じ三拍動詞第3類の語であるという点に注目したい。

次に、資料2「近松世話物浄瑠璃」について確認する。

あひたい	(UU××)	冥三四ウ7 ほか
あひたい	(ウ×××)	氷二十オ4
あひたいは	(×ウ×××)	経二三ウ6
あひたかつた	(UU××××)	小十八ウ2
いひたい	(U×××)	生五ウ4 ほか
いひたき	(UU××)	念三一ウ3
いひたけれ共	(D××D××)	油十一ウ4
しにたい	(UU××)	氷二五オ4
しにたい	([ハム]U××)	経三六ウ4
取たい	(U××)	今十二ウ3
はしりたい	(ウ××××)	紅十五ウ4
参りたし	(D×××)	万十八ウ1
見せたい	(UU××)	丹二三ウ2
見せたし	(UU中×)	夕十三オ6
見たし	(U××)	宵二三ウ6
見たし	(UU×)	網三七オ4

資料2. 「近松世話物浄瑠璃」〈タイ〉

上にあげた語のうち、「あふ」「取る」「参る」「見す」の4語が低起式である。二拍動詞第2類の「あふ」「取る」と三拍動詞第2類「見す」⁸に〈タイ〉が接続した形のアクセントは、胡麻章の付き方からそのほとんどが高起式であると解釈でき⁹、資料1の『平家正節』の場合と同じく〈タイ〉が後接することによって高起式になったと考えられる。その一方で、三拍動詞第3類「参る」に〈タイ〉が接続した「参りたし」は、胡麻章の付き方から低起式であると解釈することができる。

これらの資料で確認することのできる例は限られたものではあるが、近世期の京都・大坂における〈タイ〉と前接語との関係は、中井(2002ab)に示されている傾向や筆者の調査結果のうち高知にあらわれた傾向と同一である、あるいは類似すると考えてよいであろう。つまり、4.1の最後にあげた《古く、〈タイ〉は三拍動詞第3類「歩くLLH」に後接する場合も「歩きたいHHH-LL」のように前の語を高起式とする力をもっていたが、次第にそれが弱まった》という仮定は成り立たないことになる。

4.3 助動詞〈タイ〉と形容詞

それでは、〈タイ〉が後接することで、もとは同じ低起式であっても「取りたい」などの

ように高起式へ変じるものと、「参りたい」などのように低起式を保つものに分かれるのは、なぜであろうか。この点について、本項では形容詞アクセントと関連づけて考察をおこなう。

第1項に述べたように、〈タイ〉は古くから形容詞型活用の助動詞である。奥村三雄(1981:486)はこの〈タイ〉の性質について、古くから「ク活用形容詞の活用語尾に準ずるものだったはずである」と指摘する。また、金田一春彦(1964:80)では、同じく形容詞型活用の助動詞〈ベシ〉について、〈ベシ〉が後接した場合には「全体が形容詞のようなアクセントをもつ」のだと述べられている。これらの記述から、形容詞アクセントの変遷も合わせて確認する必要があると考えられる。

品詞	拍数	類別	語例	終止形	連体形	連用形
形容詞	3拍	1	赤し	HHF	HHF	HHL
		2	白し	LLF	LLF	LHL
	4拍	-	尊し	HHHF	HHHF	HHHL
		-	少なし	LLLF	LLLF	LLHL
動詞	2拍	1	咲く・着る	HL(HH)	HH	HL・HL/F/H (HH・H)
		2	切る・見る	LF(LL)	LH	LF・LH/R/H (LL・L)
	3拍	1	暮す・明く	HHL・HL (HHH・HH)	HHH	HHL・HL (HHH・HH)
		2	思ふ・起く	LLF・LF (LLL・LL)	LLH	LLF・LF (LLL・LL)
		3	隠す	LHL (LLL?)	LHL/LHH	LHL?/LHH? (LLL?)

表4. 院政・鎌倉期のアクセント

表4は、院政・鎌倉期における三拍および四拍形容詞ク活用と二拍および三拍動詞の、終止形・連体形・連用形アクセントを並べたものである¹⁰。表4を見ると、形容詞の終止形と連体形アクセントとして推定された型はH…HFとL…LFの2種類に分かれていることがわかる。奥村(1981:486)の推定によれば、中世初期における助動詞〈タイ〉のアクセントは「第1類+HF」「第2類+LF」であったという。

また、助動詞〈ベシ〉が動詞の終止形に接続するときにはH…HF型とL…LF型で実現したであろうと推定される(金田一1964:481など)。それと同様に、動詞の連用形に助動詞〈タイ〉が後接した際のアクセントもH…HF型かL…LF型になったであろう。つまり、例えば二拍動詞第2類「読む」に〈タイ〉が接続した場合のアクセントはLL-LFとなり、三拍動詞第2類「起く」に〈タイ〉が接続したアクセントはLL-LFとなる。

これらの形容詞アクセントのうち、低起式のもの南北朝期に起こったいわゆる「体系変化」によってLLFやLLLFから高起式のHLLやHHLLへ変化したと推定される(上野2011:401など)。〈タイ〉が接続した形についても同じようにL-LFからH-LLへ、LL-LFからHH-LLへ変化したと考えると、連用形が低起式である二拍動詞第2類や三拍動詞第2類一段活用の

語が、〈タイ〉に前接する場合に高起式であられることの説明がつく。

しかしながら、問題となるものが残る。表4に示した三拍動詞第3類がそれで、上記のことをあてはめて考えると、院政・鎌倉期には〈タイ〉が続いてLLL-LFのような型であったらうから、これも「体系変化」を経てHHH-LLになったはずである。ところが、この型は4.2にあげた近世期の資料にあられるものと対応しない。

これについては、次の二つの解釈が可能性としてあげられる。

1. 三拍動詞第3類「歩く」のような語に〈タイ〉が続く形のアクセントは、院政・鎌倉期において形容詞にみられる2種のアクセントとは別の、「体系変化」の影響を受けない低起式であった。
2. 他の語と異なり、三拍動詞第3類「歩く」に後接する〈タイ〉は早い段階で独立性をもつようになった。その結果、「歩く」が低起式であられるようになった。

1について、「体系変化」の影響を受けないとすれば、その型はLHH-HFであったらうと推測される。奥村(1981:367)は、「体系的観点から」考えても、三拍動詞第3類の特殊形アクセントはLLLではなくLHHであったらうと述べているし、また、例えば4.2にあげた中で〈タイ〉接続形が低起式であった5拍動詞「奉る」のような語のアクセントは、秋永(1991)においてLHHHHと推定されている。近世期の資料と対応をなすのは、三拍動詞第3類に〈タイ〉が接続した形のアクセントが院政・鎌倉期においてLHH-HFであり、「体系変化」の影響を受けずに低起式を保ったという捉え方である。そして、上がる位置が一つ後ろに動いたことによって現代のようなLLH-LLあるいはLLH-HLが聞かれるようになったとすれば、〈タイ〉に前接する語がもともと低起式である場合に、高起式と低起式の2種に分かれることの説明がつくであろう。

しかしながら、金田一(1964)や秋永(1991)の資料にはそもそも〈タイ〉の使用例がみられず、また三拍動詞第3類の語の使用例も多くない。そのため、LHH-HF型が実際に存在したと考えられるのかという点について、現段階では明らかにすることができない。2の可能性も含め、今後さらに検討したい。

4.4 現代における変化

〈タイ〉はもともと〈ベシ〉などと同じく、前接する語とまとまって一つの形容詞になるうとするものである。その中で、近世期や中井(2002ab)、高知における筆者の調査結果にみられるようなアクセントがあらわれるのだと考えることができる。

ただし、榎垣(1963)による分類や中井(2002ab)に示された若年層のアクセント、また筆者の調査結果のうち京都、深日、岩屋、福良にみられるアクセントをふまえると、現代では必ずしも形容詞的なアクセントとなるわけではない点を指摘することができる。前接する動詞の連用形がもとの式や型を保つということは、〈タイ〉と一語にまとまろうとする力

が弱まったということで、言い換えれば、助動詞〈タイ〉は独立性をもつようになった。形容詞の中には「おいしい LLHL」のような低起式のものも存在するが、このアクセントと「起きたい LH-LL (LH-HL)」とは必ずしも一致するわけではないことから、〈タイ〉の独立性を垣間見ることができる。

しかしながら、「歌いたい HHH-LL (HHH-HL)」のようなアクセントの場合には、形容詞に「美しい HHHLL (HHHHL)」というアクセントがあらわれることを考えると、この〈タイ〉が一語にまとまろうとする性質をもつものであるのか、それとも独立性をもつものであるのかについて判断することは難しい¹¹。両者の境界については、他の形容詞型活用の付属語（〈ラシイ〉など）や動詞の連用形アクセントとの関連などもふまえた上で検討する必要がある。

4.5 〈タイ〉の性質

〈タイ〉と前接語との関係について、これまで述べてきたことをまとめると次に示すようになる。

- ① 〈タイ〉はもともと前接する語とまとまって一語の形容詞のようになろうとする性質をもつ。
- ② 近世期のアクセント資料および現代の中井（2002ab）や高知の調査結果においては、前接語の連用形が低起式である場合、(A)「起きたい HH-LL (HH-HL)」などのように高起式になるものと (B)「歩きたい LLH-LL (LLH-HL)」などのように低起式を保つものの2種があらわれる。
- ③ 上記② (A) の原因は、南北朝期に起こった「体系変化」であるという可能性を指摘することができる。
- ④ 金田一（1964）や秋永（1991）による院政・鎌倉期の推定アクセントと上記② (B) とは必ずしも対応しない。ただし、三拍動詞第3類の特殊形が LHH であったと考えると説明がつく。
- ⑤ 現代においては、①に述べた〈タイ〉の性質が弱まりつつあるといえ、例えば「起きたい LH-LL」のようなアクセントは〈タイ〉が独立性をもつようになったことをあらわすと考えられる。

5. 「たい」のアクセント

「たい」そのもののアクセントについて、調査結果ではおおそ京都において LL、深日・岩屋・福良・高知で HL があらわれ、地域差が存在することを 3.2 で述べた。中井（2002ab）においても同様の傾向が示されていることから、京都においては LL が多く、周辺地域では HL が多いと考えることができる。本項では、このような地域差がなぜ生じるのか、その原因について考えてみたい。

4.2 にあげた近世期のアクセントを反映する資料のうち、「近松世話物浄瑠璃」を今一度

みると、「あひたい (UU〇〇)」「しにたい (UU〇〇)」のように〈タイ〉の部分が LL であろうと解釈できるものが多い。HL と解釈できるのは「見たし (UU〇)」の一例だけであった。この「見たし」については、資料 2 にあげたとおり「見たし (U〇〇)」という例もあるため、両方のアクセントが存在したとも考えられる。

しかしながら、第 4 項で述べたように形容詞アクセントと対応するのであれば、第 1 類の語である「言う」などの語に〈タイ〉が後接した場合には HH-HL となり、第 2 類の語である「あふ」のような語に〈タイ〉が接続する場合には HH-LL となることが期待される。「近松世話物浄瑠璃」の例からはそのような区別を読み取ることはできないし、筆者の調査結果においてもそのような違いはあらわれなかった。また、「見たし」のように同じ語形に対して別のアクセントがあらわれる理由を説明する必要もある。

上記の問題を考えるにあたって、形容詞のアクセントについて改めて整理したい。形容詞の終止形アクセントは「体系変化」後、三拍の第 1 類 (赤い) が HHL (H2 型)、第 2 類 (白い) が HLL (H1 型) であり、四拍は第 1 類相当 (優しい) が HHHL (H3 型)、第 2 類 (嬉しい) 相当が HHLL (H2 型) であったと考えられる。現代においては、三拍は HLL に統一され、四拍も HHLL へ統一されるという動きがみられる。この変化の進み方には地域差が存在するが、筆者の調査結果では京都においてすでに三拍 HLL と四拍 HHLL となっている (佐藤栄作編 1989 などでも同様)。深日においても京都とおおよそ同じ状態で、とくに中年層ではすでに変化を終えているとあってよい。一方、岩屋・福良・高知では四拍形容詞における HHHL から HHLL への移行がまだ起こっていないか、または進行途中である。

上野 (2011: 402) は室町期から江戸中期頃までの形容詞アクセントについて、「きわめて複雑な様相を呈している」としたうえで、特に室町後期以降の様相について、「二度にわたるアクセント型の統合」と「形容詞アクセント体系の強制」という 2 点から解釈している。そのうち〈型の統合〉については、京都において四拍形容詞の H3 型から H2 型への統合が室町期から江戸中期頃までに起こったという。また、三拍形容詞の H1 型への統合は江戸後期以降に起こったものであると述べる。「近松世話物浄瑠璃」において「見たし」に HHL と HLL との両方があらわれるのは、ちょうど混同が生じていた (生じようとしていた) 時期であるためであると考えてよさそうである。岩屋や福良、高知といった四拍形容詞に HHHL を残す地域 (上野 2011 のいう「A 体系」に近い体系をもつ地域) において「たい」に HL があらわれる点についても、京都に比べて形容詞の変化が遅いためだと考えれば説明がつくであろう。

ただし、三拍形容詞がすでに HLL となっているにもかかわらず、岩屋などの地域においては「見たい」に H-HL が聞かれるため、形容詞のアクセント変化と「たい」のアクセント変化とはその時期が完全に一致しているわけではないといえる¹²。深日においても、中年層や若年層は三拍・四拍形容詞ともに変化を終えているが、「たい」には HL のほうがあらわれやすいという結果であった。これについては、第 4 項で述べた〈タイ〉が独立性をもつようになりつつあることとの関連性も合わせて考える必要があるだろうし、また、深日の中年層や高知

の若年層において京都と同じ LL が聞かれることがあったという調査結果についても考慮する必要がある。

6. おわりに

本節では、現代語で「希望」の意味をあらわす助動詞〈タイ〉のアクセントについて述べた。

〈タイ〉の前接語が高起式であられるか低起式であられるかという点について、まず筆者の調査結果と先行研究の記述とを比較し、奥村（1956）や田中（2005）の分類などをふまえた上で次のような仮定を示した。

《古く、〈タイ〉は三拍動詞第3類「歩く LLH」に後接する場合も「歩きたい HHH-LL」のように前の語を高起式とする力をもっていたが、次第にそれが弱まった》

次に、それを検証するため、近世期の京都・大坂アクセントを反映するとされる資料の用例を使い、そこにあらわれる〈タイ〉と前接語のアクセントが中井（2002ab）や高知における調査結果と一致することを確認した。そのうえで、上記の仮定が成り立たないことを示した。そして、その理由として、南北朝期に起こったとされる「体系変化」が関係するという可能性を指摘した。

また、「たい」のアクセントに HL と LL の2種があらわれ地域差をなすことについては、室町期から江戸期に起こった形容詞アクセント体系の変化との関連性から説明を試みた。形容詞アクセントが H3 型から H2 型、また H2 型から H1 型へ統合されることによって、京都では「たい」のアクセントが LL になったのだと捉えることができ、その一方で、統合が完了していない地域においては「たい」に HL があらわれるのだといえる。ただし、時期が完全に一致するわけではない点については注意が必要である。

助動詞〈タイ〉と前接語にあらわれるアクセントは、特に形容詞のアクセントが変遷する中で、それに付随して変化してきたものである。これは、前接語と一つの形容詞にまとまろうとする〈タイ〉本来の性質が強くはたらいっていたためと解釈できる。しかしながら、現代においてはその性質を徐々に失いつつあり、一つの助動詞として独立性をもつ方へ向かっていると解される例もみられた。第2項にあげた先行研究にみられる捉え方の相違や、筆者のおこなった調査結果にあらわれる地域差・世代差は、その一端を示すものであるといえる。

【注】

- 1 「読みたい HH-LL」となる場合、「たい」に「核」は存在せず、「核をもちうる」という表現は不適切であると考えられる。ただし、奥村（1956）ではほかの例があげられておらず、説明もなされていないため、ここでは氏の分類と例を引用するに留める。
- 2 本文中にあげられている例は4語だが、調査項目には「歌いたい」「建てたい」のような

三拍動詞も含まれていると考えられる（本書の中にあげられている調査例文は「陸中宮古方言用」のみである）。ただし、三拍動詞第3類「歩く」のような語が含まれているかは明らかでない。

- 3 上記のほか、二拍動詞第1類「言う」、第2類「読む、書く」、第3類「居る」および三拍動詞第1類「あがる、負ける」、第2類「恨む、思う、落ちる、建てる」などについても調査をおこなった。3.2.1の表1・表2はこれらの語の調査結果をもとに作成した。
- 4 他の高年層話者にはあられなかったことから、他の高起式の語に引きつけられたとも考えられるが、二度目の発音も同じ型であった。ただし、後に述べる〈タイ〉の性質から考えるに、「歩く」のような語が高起式になることは、本来なかったことであろう。
- 5 上野和昭編（2001:360-361）「たし」の項より抜粋し、資料1では活用形を付して示した。資料中（）内の「上」「コ」が高く発音される拍をあらわす。上野和昭（2011:18）によれば、「口説」は江戸前期、「白声」は江戸中期の京都アクセントを反映するという。なお、ここでは前接語のアクセントについて確認するため、〈タイ〉そのもののアクセントが活用形によって異なる点については言及しない。また、出現箇所については上野編（2001）にあげられているとおりに引用した。
- 6 坂本清恵編（1988）より〈タイ〉の例を五十音順に掲出したのが資料2である。「近松浄瑠璃譜本」はおおむね17世紀末から18世紀中頃の大坂アクセントを反映するという（坂本清恵1983など）。もとの資料には胡麻章・文字譜などがそれぞれの文字の横に記されているが、本節では高く発音されると解される胡麻章をU、低く発音されると解される胡麻章をDとして語の後の（）内に示した。また、（）内の「ウ」「中」は文字譜の「ウ」「中」が付いていることを、[]は同じ字に付されていることを示し、何も付されていない字を「×」であらわした。なお、出現箇所については坂本編（1988）にあげられている略称のまま引用した。
- 7 「口説」にあらわれる例については、いわゆる「特殊低起式表記」を考慮する必要がある（上野2011:67など）ため注意が必要であるが、少なくとも「白声」にあらわれる「まゐらせたふは」は低起式であると判断できる。また、「奉る」については秋永（1991）で特殊形アクセントがLHHHHと推定されているから、それと合わせて考えると資料1にあらわれる〈タイ〉接続形が低起式であると解釈することもできるだろう。
- 8 終止形が二拍で連体形が三拍となる語であるため、〈早稲田語類〉などでは、「2・三拍動詞」とされるが、本節では現代語の拍数を基準に「三拍動詞」呼ぶことにする。以下でも同様である。
- 9 資料2にあげた用例のうち、「あひたいは」のみ低起式であると解釈できる。ただし、このセリフを発した登場人物が岡崎出身の者であることなどを考慮し、ここでは例外とする。
- 10 秋永一枝（1991）をもとに、金田一春彦（1964）も参照しながら筆者が作成した。表中、「終止形」および「連用形」の（）内に示したのは特殊形アクセントで、助動詞〈ベシ〉

や助動詞〈キ〉の連体形〈シ〉などに続く際にあらわれるものである。三拍動詞第3類の「？」は秋永(1991)に付されたものをそのままに引用した。なお、二拍動詞第3類「居り(をり)」については省略した。

- 11 現段階では、先行研究における分類や筆者の調査結果から〈タイ〉が独立性をもつようになる過程として、A「起きたい LH-LL (LH-HL)」「歩きたい LLH-LL (LLL-HL)」のように前接する語の連用形がもともと低起式である場合にその式を保つようになる、B〈タイ〉が必ず低く続くようになるという二つがあると考えたい。その意味では、京都の中年層にあらわれるアクセントは〈タイ〉が独立性をもったものと捉えてよいか。
- 12 同様のことは助動詞〈ラシイ〉についても指摘できる。これについては本章の第2節で詳しく述べたが、形容詞に比べるとH··HL型があらわれやすいという結果であった。やはり、自立語だけの形よりも付属語の付いた形における変化のほうが遅いといえる。

終章 京阪式アクセントの展開

1. はじめに

本研究では、第1章第1節で二拍名詞第4類・第5類の合同傾向について、第2節で三拍名詞第2類・第4類のアクセント変化について述べた。また、第2章第1節から第3節においては一段動詞の五段化現象とアクセントとの関連、二拍動詞・三拍動詞の禁止形アクセント、三拍動詞第2類のアクセント変化についてそれぞれ述べ、第3章においては第1節で三拍形容詞のアクセント変化について、また、第2節および第3節で付属語「らしい」「たい」のアクセントについて取り上げた。筆者のおこなった調査の結果をもとにしたため、地域や人数に偏りはあったが、それぞれのアクセントにみられる変化の一端を明らかにしたといえるであろう。

終章においては、これまで述べきいた内容を改めてまとめながら、主に「地域差」という観点と「アクセント型の統合」、「アクセント体系」という観点から考察をおこなう。そして、京阪式アクセントに生じる変化の全体的傾向について考えてみたい。

2. それぞれにみられるアクセント変化

まず、各論の内容をまとめる。以下では、「名詞のアクセント」「動詞のアクセント」「形容詞のアクセント」と「付属語のアクセント」の四つに分け、本研究の第1章から第3章で述べたことについて、主としてその結論部分を再提示することにする。

2.1 名詞のアクセント

2.1.1 二拍名詞第4類と第5類の合同傾向

第1章の第1節では、淡路島（岩屋・富島・郡家・洲本・由良・津井・福良）と明石、鳴門における二拍名詞第4類と第5類の合同傾向について述べた。その中で、とくに〈第4類+助詞〉〈第5類単独形〉〈第5類+高起式〉〈第5類+低起式〉のアクセントに注目し、それぞれの変化の様相を明らかにした。そして、田原広史・村中淑子（2000）にあげられている「統合の道筋」、すなわち「〈第5類+低起式〉 > 〈第5類単独形〉 > 〈第5類+高起式〉 > 〈第4類+助詞〉」の順で変化するという考えをもとに、地域ごとの比較をおこない、その変化過程について考察をおこなった。そうすると、次のような六つの変化過程を示すことがわかった。

- A1. 〈第5類+低起式〉 > 〈第5類単独形〉 > 〈第5類+高起式〉 > 〈第4類+助詞〉
- A2. 〈第5類+低起式〉 > 〈第5類単独形〉 > 〈第4類+助詞〉 > 〈第5類+高起式〉
- A3. 〈第5類+低起式〉 > 〈第4類+助詞〉 > 〈第5類単独形〉 > 〈第5類+高起式〉
- B1. 〈第5類+低起式〉 > 〈第5類+高起式〉 > 〈第5類単独形〉 > 〈第4類+助詞〉
- B2. 〈第5類+低起式〉 > 〈第5類+高起式〉 > 〈第4類+助詞〉 > 〈第5類単独形〉
- C. 〈第5類+高起式〉 > 〈第5類+低起式〉 > 〈第5類単独形〉 > 〈第4類+助詞〉

この理由については必ずしも明確でないが、岸江信介・村田真実（2012）などの記述と合わせて、中央部から伝わって変化が生じた可能性があるとして述べた。ただし、鳴門のように一部の地域においては両類の変化の時期が連続しているとは言いがたい様相であった点には注意が必要であるとした。

2.1.2 三拍名詞第2類・第4類のアクセント変化

第1章の第2節では、淡路島（岩屋・富島・郡家・洲本・由良・津井・福良）、明石、鳴門、大阪府南部（春木・深日）、和歌山県北部（加太・恋野）、高知における三拍名詞第2類と第4類のアクセント変化について取り上げた。これらの語のアクセントが、榎垣実（1957）や村中淑子（2005）で示されているHLLやLHLのほか、榎垣（1957）や都染直也（1987）、田原広史・中上愛（1999）で示されているようにHHLからHHHやLLHに変化する語がみられること、その変化には地域差のあらわれる場合があることを指摘した。また、地域や世代のほかに、たとえば、ハサミやカガミなどにはLHLが多く、イクスやクルミなどにはHHHが多いなど、語によって変化する先のアクセントが異なることを述べた。その理由については明確に述べることができなかったが、様々な要素が複合的にはたらいっていることを考慮する必要があると指摘した。その様々な要素というのは、たとえば〈型の統合〉（HLLへの変化）や、語を構成する子音と母音の影響（LHLへの変化）、「語の馴染み度」（低い場合、HHHへの変化）などである。

また、第2類・第4類のほか、従来HLLで発音されていた第3類や第5類の語にもHHHやLLHへの変化のみられる場合があることから、全体として典型的な高起式であるHHHになろうとする力がはたらいっている可能性を指摘した。

2.2 動詞活用形のアクセント

2.2.1 一段動詞の五段化とアクセント

第2章第1節では、淡路島（岩屋・富島・郡家・洲本・由良・津井・福良）、明石、鳴門、大阪府南部（春木・深日）、和歌山県北部（加太・恋野）における一段動詞の五段化について述べた。まずは筆者のおこなった調査で得られた結果を概観し、五段化傾向に地域差のあることを確認した。そして、そのうち五段化傾向の弱い地域について、小林隆（1996）と照らし合わせながらその要因を考察した。すなわち、否定形・命令形の語形が「オキン（起きない）」「オキロ（起きろ）」ではないことによって五段化が生じない地域があること（深日、鳴門）、また、かつて否定形や使役形は五段化していたが、「オキラン（起きない）」が「オキヤン」になり、「オキラス（起きさせる）」が「オキヤス」となったため、五段化の要因となる語形が存在しなくなったために現在五段化傾向がみられない地域があること（加太）を述べた。

さらに、五段化と近い時期に生じたと考えられる三拍動詞第2類のアクセント変化との関係についても考察をおこなった。そして、五段化がアクセントの式に影響を与えること

はないことを確認した上で、五段化がすべての活用形に生じたとしても、三拍動詞第2類のアクセント変化が妨げられることはなかったと結論づけた。つまり、このような文法上の現象がアクセント変化には影響を及ぼさないことを明らかにした。

2.2.2 禁止形のアクセント変化

第2章第2節では、淡路島（岩屋・富島・郡家・洲本・由良・津井・福良）、明石、鳴門、大阪府南部（春木・深日）、和歌山県北部（加太・恋野）、高知における動詞の禁止形（終止形+助詞ナ）のアクセントについて述べた。

今、再びまとめの部分を掲げると次のようである。

- (1) 禁止形アクセントの変化は〈古い終止形〉から〈新しい終止形〉へ置き換わることによって生じたものであるが、地域によって現在でもその様相には差があり、大きく「変化している地域」と「変化していない地域」とに分けることができる。
- (2) 「変化している地域」のうち、中年層と若年層を比べた時、若年層に〈古い終止形〉を留めた型と同じアクセントのあらわれる地域が存在する。
- (3) 「変化している地域」であっても、禁止形アクセントの変化の時期は、それぞれの地域によって異なることがある。
- (4) 三拍動詞第2類一段活用の禁止形アクセントの変化が、他より少しばかり早く生じる傾向がみられ、それには三拍動詞第2類のアクセント変化が関係している可能性がある。
- (5) 禁止形アクセントの変化の原因として、近世後期に生じた連用命令禁止形（連用形+助詞ナ、起きなLHLなど）のアクセントの影響が考えられる。
- (6) 品詞にかかわらずみられる〈型の統合〉が、「変化していない地域」と(2)の地域が存在する理由の一つであると考えられる。

2.2.3 三拍動詞第2類のアクセント変化

第2章第3節では、淡路島（岩屋・富島・郡家・洲本・由良・津井・福良）、明石、鳴門、大阪府南部（春木・深日）、和歌山県北部（加太・恋野）、高知における三拍動詞第2類のアクセント変化について、調査結果を報告し、それをもとにアクセント変化の原理を検討した。その中で、先行研究で言われているようなH2型のH1型への統合がさほど顕著にみられないことや、「接続連用形」の無核化と第2類のアクセント変化が必ずしも連続していないことを述べた。これをまとめると、次のようになる。

- A. 変化した後の姿に地域ごとの違いはほとんどなく、同一のアクセントとなる。
- B. 変化には同じ原理が働いている。
- C. H2型からH1型への統合は、それほど顕著にみられない：変化のきっかけが〈型の統合〉だけにあるとは言いにくい（中井2012の見解と一致する）。
- D. 付属語接続の連用形については、これが無核化してから実際に第2類の変化が生じ

るまでには時間差が存在し、複合動詞前部の連用形に生じるアクセント変化は、第2類の変化と近い時期に生じている：これによって変化が生じたとまでは言えないのではないか。

そして、これらの点をふまえたうえで、三拍動詞第2類のアクセント変化について、そのきっかけになると考えられるものとして、次のように提示した。

- E. 否定形のアクセントは、後ろから三拍目で下がる(-3型)という点で、第2類五段活用と一段活用とはもともと一致していた。
- F. 第2類五段活用の意志形は、一時的にHHL [L]とHLL [L]との間(H2型とH1型)でゆれが生じ、それによって第2類一段活用と混同した。また、これにより、過去形と命令形(と「接続連用形」)以外のアクセント型がほとんど同一になろうとした。
- G. 第2類五段活用の過去形と第1類五段活用の過去形とが、HLLL (H1型)とHHLL (-3型)との間で揺れ始めた。
- H. 意志形の変化の前に「接続連用形」が無核化していた、あるいは無核化しつつあったため、第2類の五段活用と第1類、第2類の一段活用と第3類には共通するところが多くなっていた。
- I. 第2類五段活用と一段活用とは、過去形・命令形・「接続連用形」のアクセントが大きく異なったため、同じ方向へは動くことができなかった。

2.3 形容詞のアクセント

第3章第1節では、淡路島(岩屋・富島・郡家・洲本・由良・津井・福良)、明石、鳴門、大阪府南部(春木・深日)、和歌山県北部(加太・恋野)における三拍形容詞のアクセント変化について取り上げた。

三拍形容詞の各活用形のうち、ここではとくに終止形と連用形(カッタ形・テ形・ナル形)のアクセントを整理した。そうすると、従来言われている第1類が第2類に合同するという変化のほかに、連用形においてL型からH型になるという変化が生じていることが明らかとなった。本研究ではその理由について、四拍形容詞の終止形アクセントがHHHLからHHLLに変わることが関連すると考え、すなわちそれによって三拍形容詞と四拍形容詞がいずれも高く始まり、終止形が-3型・カッタ形が-4型・テ形が-2型・ナル形がH0型というきわめて整った形になることを指摘した。さらに、カッタ形・テ形・ナル形におけるH型とL型のあらわれ方の違いについても検討を加え、カッタ形のL型は不安定なためにH型への変化が速く進行するが、テ形とナル形はそうでないために変化が遅いのだと述べた。

2.4 付属語のアクセント

2.4.1 「らしい(推定)」のアクセント

第3章第2節では、深日、岩屋・福良、高知における調査の結果から、形容詞型の活用

をもつ助動詞〈ラシイ〉のアクセントについて述べた。〈ラシイ〉と前接の語のアクセントにはさまざまな傾向が認められたが、これは現代語において「推定」の意味をあらわす助動詞〈ラシイ〉が、もともとは形容詞を作る接尾語であった〈ラシイ〉の転成によって成立したことと関係するという点を指摘した。そして、接尾語〈ラシイ〉と区別するために、助動詞〈ラシイ〉のアクセントが変化したのだと指摘した。

また、「らしい」のアクセントには HLL のような-3 型と HHL・LHL のような-2 型があらわれたが、そのあらわれ方には形容詞の終止形アクセントと関連性が存することも述べた。すなわち、「悲しい、嬉しい」などのような四拍形容詞が HHHL で発音される地域や年齢層においては「らしい」にも HHL (-2 型) があらわれる傾向にあるということであるが、深日の調査結果から、「らしい」のアクセントには形容詞のアクセントよりも-2 型があらわれやすいと考えた。

2.4.2 「たい (希望)」のアクセント

第3章第3節では、深日、岩屋・福良、高知における調査の結果から、同じく形容詞型の活用をもつ助動詞〈タイ〉のアクセントについて述べた。〈ラシイ〉と同様、〈タイ〉と前接語のアクセントにもいくつかの傾向があらわれた。その理由について、近世期の京都・大坂アクセントを反映するとされる資料の用例を使い、そこにあらわれる〈タイ〉と前接語のアクセントが中井幸比古 (2002ab) などと一致することを確認した上で、南北朝期に起こったとされる「体系変化」が関係するという可能性を指摘した。

また、「たい」のアクセントに HL と LL の 2 種があらわれ地域差をなすことについては、室町期から江戸期に起こった形容詞アクセント体系の変化との関連性から説明を試みた。形容詞アクセントが H3 型から H2 型、また H2 型から H1 型へ統合されることによって、京都では「たい」のアクセントが LL になったのだと捉えることができ、その一方で、統合が完了していない地域においては「たい」に HL があらわれるのだとした。ただし、時期が完全に一致するわけではない点については注意が必要であり、「らしい」と合わせて考えると、これらの付属語における変化の進行は自立語だけの形よりも遅いということを指摘した。

3. 京都アクセントにおける変化

序章では、京阪式アクセント地域の中心をなす京都アクセントについて、先行研究を参照しながら、近世期と現代とを比較する形で概観した。そのうち、現代の京都アクセントについては佐藤栄作編 (1989)、中井幸比古 (2002ab)、田中宣廣 (2005) などを参照したが、これらはいずれも高年層のアクセントを記したものである。ここではその京都高年層におけるアクセントと、筆者が調査をおこなった京都中年層 1 名のアクセントを比較することで、そこに何らかの変化がみられないかどうか改めて確認する。

表 1 に示したのは、先行研究をもとにまとめた京都高年層と、筆者が調査をおこなった京都中年層における名詞・動詞・形容詞の各アクセントである。表中、() に入れて示

したアクセントは少数だがあらわれるというものであり、・で区切って示したのは同程度あらわれる複数のアクセントである。表には入れなかった二拍動詞第2類禁止形や三拍動詞第2類一段活用のアクセントなどは、京都以外の地域において変化がみられない、またはすでにほとんどの調査地域で変化を終えているため、ここでは省略した。

この表1をみると、二拍名詞第5類、三拍名詞第2類・第4類、三拍形容詞の連用形アクセントにおいて年齢層による違いがみられることがわかる。また、二拍動詞および三拍動詞の禁止形、三拍動詞第2類五段活用、三拍形容詞終止形のアクセントはすでに変化を終えて久しいことが改めて確認できる。

		高年層	中年層
二拍名詞	第4類+助詞 第5類単独形 第5類+低起式 第5類+高起式	LL-H(LH-L) LF(LH) LF-L(LH-L) LF-H(LL-H)	LL-H(LH-L) LH(LF) LH-L(LF-L) LL-H(LF-H)
三拍名詞	第2類・第4類	HLL(LHL・HHH・LLH)	HLL・LHL・HHH・LLH
二拍動詞	第1類禁止 第3類禁止	HHL HLL	HHL HLL
三拍動詞	第1類・第2類五段禁止 第3類・第2類一段禁止	HHHL LLHL	HHHL LLHL
	第2類五段終止	HHH	HHH
	第2類五段否定	HHHH	HHHH
	第2類五段禁止	HHHL	HHHL
	第2類五段意志	HHH[H]	HHH[H]
	第2類五段命令	HHL	HHL
三拍形容詞	第1類終止形 連用形	HLL L-	HLL H-(L-)

表1. 京都アクセントにおける変化

なお、一段動詞の五段化傾向は京都市で生じておらず、小林隆(1996)で示されている『方言文法全国地図』(JAJ)を用いた分布図においても、筆者の調査においても、五段化した形はまったくあらわれなかった。付属語「らしい」および「たい」については、第3章第2節・第3節で述べたように複数の先行研究で異なる傾向が示されていたが、筆者の調査した中年層においては「鏡らしい HLL-HLL・HLL-LLL」「兎らしい LLL-HLL」「寝るらしい HH-HLL」「読むらしい LL-HLL」「赤いらしい HLL-HLL・HLL-LLL」「開けたい HH-LL」「起きたい LH-LL」「歩きたい LLH-LL」であり、一つの助動詞として独立性をもつといえる状態であった。

4. 地域による進行速度の違い

第2項と第3項でまとめたことをふまえて、それぞれのアクセントを地域差という観点からまとめ直す。具体的には、第1章第1節で用いた「進行率」をそれぞれの調査結果から算出して、地域ごとに示すことにする。

ただし、第2章第1節で述べた一段活用の五段化傾向は、アクセントの変化と直接は関

係しないためここでは除外し、第3章第2節で述べた付属語「らしい」のアクセント、同じく第3章の第3節で述べた付属語「たい」のアクセントについても、五段化と同じく文法に関わる問題があるため除外する。これらについては、第6項で取り上げる。

4.1 名詞のアクセント

4.1.1 二拍名詞のアクセント

第1章の第1節では、二拍名詞第4類と第5類の合同傾向について述べた。その中で、とくに〈第4類+助詞〉〈第5類単独形〉〈第5類+高起式〉〈第5類+低起式〉のアクセントに注目し、それぞれの変化の様相を明らかにした。そして、田原・村中（2000）にあげられている「統合の道筋」、すなわち「〈第5類+低起式〉 > 〈第5類単独形〉 > 〈第5類+高起式〉 > 〈第4類+助詞〉」の順で変化するという考えをもとに、地域ごとの比較をおこない、その変化過程について考察をおこなった。今ふたたび、これらのアクセントについてまとめると、表2のようになる。

	明石	岩屋	富島	郡家	洲本	由良	津井	福良	鳴門
第4類+助詞	61%	24%	11%	35%	51%	25%	19%	1%	19%
第5類単独形	42%	36%	38%	43%	59%	22%	24%	25%	97%
第5類+低起式	94%	72%	72%	94%	96%	83%	89%	44%	100%
第5類+高起式	33%	39%	28%	28%	37%	39%	50%	56%	100%

表2. 二拍名詞アクセントの進行率

表2（第1章第1節 p.27〈表7〉の再掲）は、変化した後のアクセントがどの程度あらわれるかについて、パーセンテージ（進行率）を示したものである。

このようにしてみると、改めて進行率には地域差の存在することがわかる。ただしそれぞれの形のうちでも、〈第4類+助詞〉〈第5類単独形〉〈第5類+高起式〉よりも〈第5類+低起式〉の変化が福良を除いては進んでいるという傾向がみられ、〈第4類+助詞〉のアクセント変化の進み方が明石・洲本以外の地域においては比較的ゆるやかであるといえる。

4.1.2 三拍名詞のアクセント

第1章の第2節では、三拍名詞第2類と第4類のアクセント変化について取り上げた。これらの語のアクセントが、楳垣（1957）や村中（2005）で示されているHLLやLHLのほか、楳垣（1957）や都染（1987）、田原・中上（1999）で示されているようにHHLからHHHやLLHに変化する語がみられること、その変化には地域差のあらわれる場合があることを

	明石	岩屋	富島	郡家	洲本	由良	津井	福良	鳴門
HLL・LHL・HHH・LLH	36%	66%	44%	69%	31%	22%	25%	55%	36%
	春木	深日	恋野	加太	高知				
HLL・LHL・HHH・LLH	83%	66%	100%	25%	55%				

表3. 三拍名詞アクセントの進行率

指摘した。また、地域や世代のほかに、語によって変化する先のアクセントが異なることを述べた。その理由については明確に述べるができなかったが、様々な要素が複合的にはたらいっていることを考慮する必要があると指摘した。

HHL以外のアクセント型を変化した後のものとみて、それを進行率としてパーセンテージで示すと表3ようになる。春木・恋野の進行率が比較的高く、明石・洲本・由良・津井・鳴門・加太の進行率が比較的低いということがわかる。ただし、第1章第2節で述べたように、調査する語が増えると進行率が上昇する傾向にあるため、明石などのように進行率が低い地域であっても、調査語を増やせば岩屋・福良・深日・高知のようになる可能性がある。

4.2 動詞のアクセント変化

4.2.1 禁止形アクセント

第2章第2節では、動詞の禁止形（終止形+助詞ナ）のアクセントについて述べた。禁止形にみられるアクセント変化は〈古い終止形〉から〈新しい終止形〉への置き換わりによるものであるが、地域によってその様相に違いがあること、現在この変化が生じるのには連用命令禁止形（連用形+助詞ナ）のアクセントが関係する可能性のあることなどを指摘した。また、一旦変化したものの若年層に〈古い終止形〉のアクセントと見かけ上は同じものが増えることなどを明らかにし、それにはアクセント型の安定性などが関係することを述べた。

	明石	岩屋	富島	郡家	洲本	由良	津井	福良	鳴門
二拍動詞	60%	67%	50%	35%	31%	4%	10%	8%	58%
三拍動詞	61%	77%	37%	41%	33%	7%	7%	11%	48%
	春木	深日	恋野	加太	高知				
二拍動詞	88%	0%	88%	0%	64%				
三拍動詞	97%	0%	69%	0%	45%				

表4. 禁止形アクセントの進行率

このなかで、〈新しい終止形〉に置き換わったものを変化後とみて、進行率を示すと表4ようになる。なお、本来は一旦〈新しい終止形〉に置き換わる様子を見せつつも、若年層で〈古い終止形〉のアクセントと見かけ上は同じものが増える場合も変化後となるが、判断が困難であるため、〈新しい終止形〉に置き換わったものだけを変化後とした。また、表4からは変化することのない二拍動詞第2類（「読むなLHL」など）を除いた。

表4をみると、深日・加太では変化する様子がみられず、由良・津井・福良においても進行率が比較的低いことがわかる。一方、春木・恋野においては進行率が8割を超える傾向にあり、他の地域に比べて高いといえる。また、全体的に三拍動詞の進行率が二拍動詞よりも低い傾向がみられる（明石・岩屋・郡家・春木以外）。

4.2.2 三拍動詞第2類のアクセント

第2章第3節では、三拍動詞第2類のアクセント変化について、調査結果を報告し、それをもとにアクセント変化の原理を検討した。その中で、先行研究で言われているようなH2型のH1型への統合がさほど顕著にみられないことや、「接続連用形」の無核化と第2類のアクセント変化が必ずしも連続していないことを述べた。そして、とくに高知の若年層におけるアクセントを詳細に確認した上で、いくつかの可能性を提示した。

表5は、三拍動詞第2類五段活用のアクセントについて、その進行率をまとめたものである。第2類の五段活用（「動く」「余る」など）は第1類（「上がる」「洗う」など）に合同するのだが、過去形についてはもとのHLLL（「動いた」「余った」など）が残る傾向にあり、むしろ第1類（「上がった」「洗った」など）がHHLLからHLLLになる様子を見せるため、ここでは省くことにした。なお、第2類一段活用（「起きる」「落ちる」など）には第3類（「歩く」など）に合同するという変化がみられるが、高知以外の地域ではすべて完了したと考えられるため、ここでは表に示していない。

	明石	岩屋	富島	郡家	洲本	由良	津井	福良	鳴門
終止形	100%	96%	88%	83%	97%	75%	71%	63%	50%
否定形	17%	100%	96%	96%	100%	63%	83%	33%	42%
禁止形	92%	100%	100%	100%	100%	67%	83%	67%	67%
意志形	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
命令形	56%	100%	89%	89%	100%	78%	83%	78%	33%
	春木	深日	恋野	加太	高知				
終止形	100%	100%	100%	100%	0%				
否定形	100%	100%	100%	100%	6%				
禁止形	90%	100%	100%	100%	6%				
意志形	100%	100%	100%	100%	9%				
命令形	100%	100%	100%	100%	0%				

表5. 三拍動詞第2類五段活用のアクセントの進行率

表5をみると、淡路島の北部（岩屋・富島・郡家・洲本）と春木・深日・恋野・加太においてはずでに変化がほとんど完了していることがわかり、淡路島南部（由良・津井・福良）と明石、鳴門においてもかなり進行していることがわかる。一方で、高知においてはまだそれほど変化が進んでおらず、ここに明確な地域差を見出すことができる。また、各活用形のうちでも意志形の変化がはやいということがいえる。

4.3 形容詞のアクセント変化

第3章第1節では、三拍形容詞のアクセント変化について取り上げた。終止形と連用形（カッタ形・テ形・ナル形）のアクセントを整理したところ、従来言われている第1類が第2類に合同するという変化のほか、連用形においてL型からH型になるという変化が生じていることが明らかとなった。本研究ではその理由について、四拍形容詞の終止形アクセントがHHHLからHHLLに変わることが関連すると考え、すなわちそれによって三拍形容詞と四拍形容詞がいずれも高く始まり、終止形が-3型・カッタ形が-4型・テ形が-2

型・ナル形がH0型というきわめて整った形になることを指摘した。

この三拍形容詞アクセントの進行率をまとめたのが表6である。終止形については、第1類（「赤い」「暗い」など）のアクセントにおける進行率を示した。これらの語はもとのアクセントがHHLであり、そこから第2類（「白い」「長い」）のHLLに合同することはすでに述べたとおりである。また、同じく表5に示した連用形（カッタ形・テ形・ナル形）については、一旦はすべてが第2類的なL型になった（なろうとした）ものが四拍形容詞アクセントなどの影響によってH型になるという変化をみせるため、もともとL型である第2類の語にH型があらわれた場合を「変化した」とみなして示した。

	明石	岩屋	富島	郡家	洲本	由良	津井	福良	鳴門
第1類終止形	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
第2類連用形	19%	6%	2%	10%	16%	46%	31%	60%	27%
	春木	深日	恋野	加太					
第1類終止形	100%	83%	100%	50%					
第2類連用形	70%	31%	38%	6%					

表6. 三拍形容詞アクセントの進行率

表6をみると、第1類の終止形アクセントはほとんどの地域で変化が完了しており、全体的に進行率の高いことがわかる。また、第2類の連用形アクセントの進行率について、由良・福良と春木において比較的高いが、その一方で岩屋・富島・加太などでは連用形の進行率が他に比べて低く、変化がそれほど進んでいないといえる。

4.4 アクセント変化の地域差

4.4.1 概略

ここまでの進行率をまとめると、表7のようになる。表7は、先に掲げた表2から表6の進行率について、それが10%以下である場合はA、50%以下である場合はB、90%以下である場合はC、それ以上をDというように四つの段階に分けて示したものである。各論で触れなかった地域の進行率については、省略もしくは表中に「-」を入れた。「全体」の欄に記したのは、表7に示した範囲の進行率を平均したもので、明石などでは二拍名詞・三拍名詞・二拍動詞・三拍動詞・三拍形容詞を「全体」とし、春木などでは三拍名詞・二拍動詞・三拍動詞・三拍形容詞を「全体」とした。この表7をもとに、アクセント変化の地域差について検討したい。

表7から、全体的にアクセント変化が進行している最中であることがわかり、品詞によって、あるいはそれぞれの形（活用形）や類によって進行の度合いに違いがみられることがわかる。

地域別にみると、高知の変化が他の地域よりも遅いように見えるが、それは三拍動詞第2類の変化がほとんど進行していないからであり、三拍名詞の変化や二拍動詞の禁止形における変化には他の地域との違いがあまりない。ここに二拍名詞のアクセント変化を加えたとしても、高知は第4類がB、第5類がCとなるため、動詞に比べて名詞の変化がはや

くに生じているということになる。すなわち、一貫して変化の遅い地域というものが存在しないということがいえるであろう。

		明石	岩屋	富島	郡家	洲本	由良	津井	福良	鳴門
二拍名詞	第4類+助詞	C	B	B	B	C	B	B	A	B
	第5類単独形	B	B	B	B	C	B	B	B	D
	第5類+低起式	D	C	C	D	D	C	C	B	D
	第5類+高起式	B	B	B	B	B	B	C	C	D
三拍名詞	第2類・第4類	B	C	B	C	B	B	B	C	B
二拍動詞	禁止形	C	C	B	B	B	A	A	A	C
		C	C	B	B	B	A	A	B	B
三拍動詞	第2類五段終止	D	D	C	C	D	C	C	C	B
	第2類五段否定	B	D	D	D	D	C	C	C	C
	第2類五段禁止	D	D	D	D	D	C	C	C	C
	第2類五段意志	D	D	D	D	D	D	D	D	D
	第2類五段命令	C	D	C	C	D	C	C	C	B
三拍形容詞	第1類終止形	D	D	D	D	D	D	D	D	D
	第2類連用形	B	A	A	A	B	B	B	C	B
	全体	C	C	C	C	C	C	C	B	C
		春木	深日	恋野	加太	高知				
三拍名詞	第2類・第4類	C	C	D	B	C				
二拍動詞	禁止形	C	A	C	A	C				
		D	A	C	A	B				
三拍動詞	第2類五段終止	D	D	D	D	A				
	第2類五段否定	D	D	D	D	A				
	第2類五段禁止	D	D	D	D	A				
	第2類五段意志	D	D	D	D	A				
	第2類五段命令	D	D	D	D	A				
三拍形容詞	第1類終止形	D	C	D	B	—				
	第2類連用形	C	B	B	A	—				
	全体	C	C	C	C	B				

表7. 進行率のまとめ

アクセント史においては、中央部のアクセントがいかに変遷したのかについて考えるときの間接的な手段の一つとして、周辺部の（特に高年層における）アクセントを観察することをしばしばおこなう。本研究で取り上げたうち、淡路島（岩屋・富島・郡家・洲本・由良・津井・福良）や鳴門、高知は「古いアクセントを残す」ところとして扱われることのある地域である。しかしながら、表7をみれば明らかであるように、若年層まで含んで調査をおこなった場合には、すべてにおいて古いアクセントを残す地域、あるいは変化の遅い地域がほとんどなくなるということになる。また、同じ地域であっても、品詞や形（活用形）などによってアクセント変化の進行の度合が異なるという点も、特徴であるといえるだろう。

次に、品詞に注目してみると、岩屋・富島・郡家・洲本・由良・津井・福良と深日・加太においては三拍動詞第2類のアクセント変化がほかのものよりはやい傾向にあるという

ことがわかる。ただし、これらの地域でも、動詞の禁止形アクセントの変化は岩屋を除いて明らかに遅い。一方、春木・恋野ではそのような差がみられず、全体として変化が進んでいるとみることができる（恋野の形容詞連用形が例外となる）。また、明石・鳴門も全体的に変化が進んでいるが、春木や恋野に比べるとゆるやかであるということがいえそうである。形容詞については、第2類連用形のアクセント変化が第1類終止形のアクセント変化に後れて生じるという点が共通しており、表に含めなかった高知においてもそれは同様であった。

このように、アクセント変化には地域差が存在すること、そのほか品詞や形（活用形）によって明らかに違いがあることを改めて確認した。品詞や形（活用形）によってアクセント変化の進み方が違うのは、それが生じた時期に差があるからであると考えられる。たとえば、三拍形容詞第2類の連用形に起こるL型からH型への変化は比較的近年に始まったものであり、一方で三拍形容詞第1類の終止形に起こる変化は時期的にはやく生じたものである。ただし、そこに地域差がみられる原因については、さまざまな要素が関係すると考えられる。ここでそれぞれについて明確にすることは困難であるが、表7とこれまで述べきったことをふまえて、地域差が生じる理由について一考を加えておきたい。

4.4.2 地域差の原因

4.4.2.1 外的要因

地域差について考えるに際して、まずは中央部（京都・大阪）との地理的な距離が影響を及ぼすのではないかという可能性をあげる必要がある。たとえば、調査をおこなった中では地理的に中央部からもっとも遠い高知での変化が遅く、地理的にもっとも近い春木における変化がはやいというようなことであるが、表7を見る限りでは、おおむねそのように考えて問題なさそうである。

ただし、先にも述べたように、地理的には遠い高知であっても、名詞のアクセント変化と動詞の禁止形におけるアクセント変化は、淡路島などと同程度進んでいる。そのため、当然のことながら、すべてが地理的な距離によって説明しおおせるわけではない。また、地理的には中央部と比較的近い深日や加太において、形容詞のとくに第1類終止形のアクセント変化がほかよりも後れて生じていることから、距離の遠さ・近さがアクセント変化の遅速に必ずしも影響を及ぼすのではないことがわかる。

筆者は、第1章第1節において、淡路島と明石・鳴門における二拍名詞第4類・第5類の合同傾向について述べたが、その際に先行研究に倣って「中央部において変化がある程度進んだところでその影響をうけたために、変化する順序に地域差が生じたのだ」という可能性について言及した（pp. 27-28）。また、そのほか「心理的距離」がアクセント変化に影響するという点についても指摘した。これは「心理的距離」が近づけばその方言に影響を受けやすく、遠ければ受けにくいという社会言語学における考え方であるが、たとえば岩屋は明石との関わりが深く、調査時には「言語意識」についても合わせて質問する

ことがあったが、そのなかで「高校は明石まで通っていた」「明石によく遊びに行く」といった話を聞くことも少なくなかった。この場合、単に地理的に近いだけでなく、「心理的距離」も近くなると考えられ、アクセントにも何らかの影響があらわれる可能性を考えなければならない。

以上のような「外的要因」については常に注意しなければならないが、それがどの程度の影響力をもつのかという点については、地域ごとの歴史的背景なども含めてさらに検討する必要がある。

4.4.2.2 内的要因

調査をおこなった地域において、全体的に中央部とされる京都・大阪よりもアクセント変化が後れて生じていることは、各論でみてきたとおりである。このことから、各地域におけるアクセント変化には上に述べたような外的要因が関係しているのだと考えることができる。

ただし、第2章第3節で述べた三拍動詞第2類のアクセント変化などのように、変化の始まりに遅速がみられても、変化そのものには地域にかかわらず同じ原理がはたらいているとするならば、そこには必ず内的な要因が存在する（地域内部に原因が存在する）ことになる。すなわちそれは、各論で言及した範囲でいうのであれば「型の安定性」や「語の馴染み度」などを指すことになるであろう。これについては村中淑子（2005）などで触れられており、本研究でも第1章、第2章第2節・第3節、第3章において言及した。そのうち、とくに第1章第2節で説明を加えたが、H0型（HHHなど）やL2型（LHLなど）のようなアクセントは、他のアクセント型に変化しにくいという傾向が地域にかかわらずみられることから、安定したアクセント型であると考えられる。そして、これは本研究で取り上げてきたアクセント変化のほとんどに関係するといえる。

また、同じく村中（2005）などでいわれる「語の馴染み度」についても「型の安定性」と同様、一概にはいえないことであるが、「よく口にする語のアクセントは変わりにくい」あるいは「あまり使用せず、耳慣れない語は、語数の多いアクセントで発音する」など、「語の馴染み度」によってアクセントの変わる可能性があり、本研究で述べてきたアクセント変化にも関与すると考えられる。

このような点をふまえた上で、第5項においてはそれぞれのアクセントがどのような方向へ変化するのか、なぜそうなるのかという点について、改めて述べることにする。

5. 変化の方向

第3項でまとめた京都アクセント、そして第2項・第4項で整理した調査地域におけるアクセントをふまえたうえで、アクセント変化に地域差があることを考慮せずに変化の方向をあらわすと、次の表8のようになる。

二拍名詞の〈第4類+助詞〉はLL-HからLH-Lに、〈第5類単独形〉〈第5類+低起式〉

〈第5類+高起式〉はそれぞれ拍内下降を失った形に、三拍名詞は第2類・第4類はHLLからHLL・LHL・HHH・LLHのいずれかになり、二拍動詞の禁止形は第1類がHLLからHHL、第3類がHLLからHHL、三拍動詞の禁止形は第1類（と第2類の五段活用）がHHLLからHHHL、第3類（と第2類の一段活用）がLHLLからLLHLになる。また、三拍動詞第2類の五段活用は終止形から順にHLLからHHH、否定形HLLLからHHHH、禁止形HLLLからHHLL・HHHL、意志形HHLLからHHHH、命令形HLLからHHLへ変化する。そして、三拍形容詞第1類の終止形はHHLからHLLになり（付属語「らしい」のアクセントも同様の傾向を示す）、第2類の連用形はL-型からH-型へと変化する。

		元のアクセント	変化後のアクセント
二拍名詞	第4類+助詞	LL-H	→ LH-L
	第5類単独形	LF	→ LH
	第5類+低起式	LF-L	→ LH-L
	第5類+高起式	LF-H	→ LL-H
三拍名詞	第2類・第4類	HHL	→ HLL・LHL・HHH・LLH
二拍動詞	禁止形	HLL/HLL	→ HHL/HHL
		HHLL/(HLLL)/LHLL	→ HHHL/LLHL
三拍動詞	第2類五段終止	HLL	→ HHH
	第2類五段否定	HLLL	→ HHHH
	第2類五段禁止	HLLL	→ HHLL・HHHL
	第2類五段意志	HHL[L]	→ HHH[H]
	第2類五段命令	HLL	→ HHL
三拍形容詞	第1類終止形	HHL	→ HLL
	第2類連用形	L-	→ H-

表8. 変化の方向まとめ

5.1 アクセント型の統合

このように変化の方向をまとめた上で、まずアクセント型という観点から変化の方向を整理すると、三拍名詞第2類・第4類や三拍形容詞第1類終止形などにはH1型があらわれる傾向にあることがわかる。これらの変化前のアクセントがH2型であることから、各論においても、それがH2型のH1型への統合によるものであると述べた。また、同じようにH3型のH2型への統合がみられることについては、第3章第1節で三拍形容詞の連用形におけるアクセント変化を論じる際に、それに関わるものとしてあげた四拍形容詞の終止形アクセントのHHHLからHHLLへの変化などが該当する。

両者の変化について、上野和昭（2011：508-509）によれば、H3型→H2型の統合のあとにH2型→H1型の統合が生じたとされているが、筆者の調査結果からはその順序を明らかにすることまではできなかった。また、このようなアクセント型の統合は品詞を問わずに生じる「きわめて影響力の大きなもの」である（上野2011：509）とされたとおり、たしかに調査結果においてもある程度はみられるものであった。二拍動詞第1類の禁止形にはHLLからHHLへ変化した後に、ふたたびHLLが増えるというような傾向がみられたことも、〈型の統合〉に関係すると考えられる。

しかしながら、たとえば三拍名詞第2類・第4類のアクセントについて取り上げた際に指摘したとおり、HLLではなく、むしろLHLやHHHに変わる傾向が強くなっているといえる状況をみせるものもあった。また、三拍動詞第1類五段活用（「上がる」など）と第2類五段活用の命令形におけるHHLや、二拍動詞の禁止形にみられるHHLや三拍動詞の禁止系にみられるHHHLというアクセントも、〈型の統合〉とは異なる原理の変化によって生じたものであるといえる。

上野（2011）で取り上げられているのは、アクセント史における「近世」であり、そこから「近代（現代）」へ至るところまでを含めて述べられている。この「近世」から「近代（現代）」の間には、たしかに〈型の統合〉がきわめて強くはたらいたのだと考えられるが、本研究で取り上げてきた「現代」に至るまでの間に、次第にそれが弱まったのだと捉えることができるであろう。

5.2 類の合同とアクセント体系

上記の〈型の統合〉と同様にはたらくのが、体系からの力（類推）である。ここで、先に掲げた表8も参照しながら、改めて各論で述べてきたアクセント変化が完了したあとの体系を想定して示すことにする。

まず、二拍名詞については表9のようになる。この表は、本研究の序章（pp. 10-13）において京都アクセントをまとめた際に示した表を利用して、各論で述べた内容を反映した上で作成したものである（以下同様）。

表9をみると、第1類がHH（HH-H）、第2類・第3類がHL（HL-L）、第4類・第5類がLH（LH-L）であることがわかる。二拍名詞のアクセントが三種類にまとまるということは、東京アクセントにおける二拍名詞と同じ分け方ができるといことになる。

次に、三拍名詞のアクセントについて整理すると、表10のようになる。現段階では第2類・第4類がすべて同じ方向に動く様子がみられないため、表中のアクセントも複数あらわすことになったが、仮にこのまま変化が進むとすれば、第2類・第4類の語はそれぞれの語の性質によって第1類・第3類と第5類・第6類・第7類の各アクセントに分散されることになるであろう。また、第1章第2節で述べたように、HHHへの置き換わりは第3類や第5類などにおいてもある程度みられるものであった。これが三拍名詞のアクセント体系にど

類別	語例	単独	助詞接続
1	風	HH	HH-H
2	石	HL	HL-L
3	山	HL	HL-L
4	海	LH	LH-L
5	雨	LH	LH-L

表9. 変化後の二拍名詞のアクセント

類別	語例	単独	助詞接続
1	魚	HHH	HHH-H
2	小豆	HLL・LHL・ HHH・LLH	HLL-L・LHL-L・ HHH-H・LLL-H
3	力	HLL	HLL-L
4	光	HLL・LHL・ HHH・LLH	HLL-L・LHL-L・ HHH-H・LLL-H
5	命	HLL	HLL-L
6	鳥	LLH	LLL-H
7	薬	LHL	LHL-L

表10. 変化後の三拍名詞アクセント

のような影響を及ぼすのかという点については、今後の動きを観察する必要がある。

表 11 には、二拍動詞のアクセントを示した。第 2 章で取り上げたのは第 1 類の禁止形アクセントのみであったが、このアクセントは一旦〈新しい終止形〉に置き換わった HHL から HLL へ戻る地域がみられた。いずれほとんどすべてが HLL になるのかという点については不明であるが、ひとまず () 内に入れて記した (表 12 でも同様)。また、本論では取り上げなかったが、大阪府南部、淡路島などの若年層において第 3 類「居る (おる)」の否定形・意志形などが第 1 類に合同する動きをみせる点についても反映した。第 3 類の終止形は HL から変化していないため表にもそのまま記したが、もし第 1 類と第 3 類が合同するのであれば、二拍動詞は二種類のアクセントにまでまとまることになる。

類別	活用	語例	終止形	否定形	過去形	禁止形	意志形	命令形
1	五段	置く	HH	HHH	HLL	HHL(HLL)	HHH	HL
	一段	着る	HH	HH	HLL	HHL(HLL)	HHH	F
2	五段	書く	LH	LLH	LLH	LHL	LLH	LH
	一段	見る	LH	LH	HL	LHL	LLH	F
3	五段	居る(おる)	HL	HHH	HLL	HLL	HHH	HL

表11. 変化後の二拍動詞アクセント

類別	活用	語例	終止形	否定形	過去形	禁止形	意志形	命令形
1	五段	上がる	HHH	HHHH	HLLL	HHHL(HHLL)	HHHH	HHL
	一段	開ける	HHH	HHH	HLL	HHHL(HHLL)	HHHH	HF
2	五段	動く	HHH	HHHH	HLLL	HHHL	HHHH	HHL
	一段	起きる	LLH	LLH	LHL	LLHL(LHLL)	LLLH	LF
3	五段	歩く	LLH	LLLH	LHLL	LLHL(LHLL)	LLLH	LHL

表12. 変化後の三拍動詞アクセント

これは、表 12 に示した三拍動詞のアクセント体系と同一であるといえる。三拍動詞の場合は、第 1 類と第 2 類の五段活用が合同し、第 3 類と第 2 類の一段活用が合同する動きをみせており、調査した範囲ではすでに高知以外の地域でその変化をほとんど終えている。禁止形には二拍動詞と同様、まだ判然としないところがあるものの、表 11 をみるとこの体系が整った形であることがわかる。

最後に、三拍形容詞のアクセントを表 13 としてまとめた。「連用形」「カリ活用」とわけたのは、第 3 章第 1 節で述べたところのテ形とカタ形を指すものであるが、すべてが H-型になるとすれば、三拍形容詞のアクセント体系からは低起式が消えることになる。これは、ナル形を含めても同様である。そして、四拍形容詞のアクセント体系と合わせても (p. 91)、きわめて整った形に統一されることになるといえる。

類別	語例	終止形	連体形	連用形	カリ活用形
1	赤い	HLL	HLL	HHL	HHLL
2	白い	HLL	HLL	HHL	HHLL

表13. 変化後の三拍形容詞アクセント

このようにしてみると、アクセント変化においては、整った体系になろうとする動きがすべてにおいてみられるのだということを改めて指摘することができる。その際、H2 型から H1 型になろうとするというような〈型の統合〉はもちろんみられるが、他の活用形が高起式であるか低起式であるか、あるいは同じ高起式であってもより安定する型や典型的

な（語数の多い）型はどれかなどといった点に左右されることのほうが多いと考えられる。たとえば、三拍動詞第1類五段活用と第2類五段活用の語の命令形はHHLから動く様子がなく、ここには〈型の統合〉がはたらいっていないと考えられるが、これは第1類の一段活用の命令形がHFであることや第3類の命令形がLHLであること、第2類一段活用の命令形がLFであることと無関係ではないということである。

6. 一段動詞の五段化と付属語アクセント

ここまでは、アクセント変化という点に注目して、名詞・動詞・形容詞のアクセントについて改めてまとめ、考察をおこなった。第6項では、文法上の現象である一段動詞の五段化と、文法にかかわる付属語「らしい」と「たい」のアクセントについて述べることにする。

6.1 五段化の進行率

一段動詞の五段化は、動詞活用の歴史的な変化の一部として取り上げられる現象である。第2章第1節で述べたとおり、現段階では方言の一事象にとどまっているが、もし五段化が進めば動詞活用のなかから一段活用と呼ばれるものが消えることになり、動詞の活用の種類が「五段活用・カ行変格活用・サ行変格活用」の三つにまで減ることになる。このような変化の原理は、アクセント変化の大きな流れである、整った体系になろうとする動きと同じものであると考えられるであろう。そこで、五段化した形があらわれた場合を「変化した」とみなして、アクセントと同様に進行率を示すと、表14のようになる。

	明石	岩屋	富島	郡家	洲本	由良	津井	福良	鳴門
二拍動詞	25%	11%	100%	72%	100%	72%	38%	33%	0%
三拍動詞	13%	29%	100%	75%	100%	74%	48%	33%	2%
	春木	深日	加太	恋野					
二拍動詞	82%	0%	0%	62%					
三拍動詞	68%	0%	0%	61%					

表14. 五段化の進行率

4.4.1の表7に示したアクセントの「進行率のまとめ」のように、表14に示したパーセンテージのうち、10%以下である場合をA、50%以下である場合をB、90%以下である場合をC、それ以上をDというように四つの段階に分けて示すと、鳴門・深日・加太がA、明石・岩屋・津井・福良がB、郡家・由良・春木・恋野がC、富島・洲本がDとなる。この進行率が、たとえば動詞アクセントの進行率と比較した場合に、必ずしも一致するわけではないことから、やはりこれがアクセント変化とは関係の薄い文法上の現象であることは明らかである。

6.2 付属語〈ラシイ〉と〈タイ〉の進行率

次に、名詞と動詞・形容詞の終止形に接続して推定をあらわす〈ラシイ〉と、動詞の連用形に接続して希望をあらわす〈タイ〉のアクセントについて、その進行率を表15に示

した。

推定の〈ラシイ〉は、もともと接尾語と同一のアクセントをもっていたものが次第に分化し、異なるアクセントをもつようになったと考えられる語である。たとえば、「白いHLL」に〈ラシイ〉が接続した場合

	岩屋	福良	深日	高知
名詞+ラシイ	60%	25%	83%	67%
動詞+ラシイ	80%	33%	67%	33%
形容詞+ラシイ	57%	43%	71%	83%
動詞連用形+タイ	2%	0%	0%	23%

表15. 〈ラシイ〉〈タイ〉アクセントの進行率

に「白いらしいHHH-HLL」となれば接尾語の性格を残したもの、「白いらしいHLL-HLL」となれば助動詞としての独立性を強めたものと判断し、後者を変化した後のものとみなして進行率を算出した。名詞は単独形がHLL・HHL・LHLである「鮑・鏡」が〈ラシイ〉に前接してもそのままあらわれた場合を、動詞は終止形がHLである二拍動詞第3類「居る（オル）」がそのままのアクセントであらわれた場合を、形容詞は三拍形容詞のうち終止形がHHL・HLL・LHLとなる「赤い・暗い・白い・長い・すごい」と、同じく終止形がHHHL・HHLL・LLHLとなる四拍形容詞「悲しい」「四角い」が単独のアクセントと同じ型であらわれた場合を示した。四段階に分けると、岩屋・深日がC、福良がBとなり、高知は名詞と形容詞がC、動詞がBとなる。

同じく表15に示した希望をあらわす〈タイ〉は、特に形容詞のアクセントが変遷する中で、それに付随して変化してきたと考えられるもので、「たい」にはHL（「したいH-HL」など）とLL（「したいH-LL」など）の2種があらわれる。このうち、LLが京都にあらわれることなどから、こちらを変化した後のものとみなした。全体的に進行率は低いが、四段階に分けると岩屋・福良・深日がA、高知がBとなる。〈タイ〉も〈ラシイ〉と同様、次第に独立性をもつようになると考えられるが、第3章第3節で述べたとおり、どの段階で独立性をもったと判断できるのかについて明確にすることは難しい。ただし、独立する過程の一つとしてLLがあらわれると考えられる（p. 125、注11）ことをふまえると、この変化が重要なものであるということになる。この〈タイ〉のアクセント変化は4.4.1で取り上げた三拍形容詞アクセントと比較すると明らかに遅く、ここに自立語と付属語のアクセント変化における違いを見出すことができる。あるいは、アクセント体系の内部で生じる変化と文法上の問題が関わる変化との間における違いであるとも考えられる。本研究では形容詞型活用の付属語を取り上げたが、そうでない活用をもつ付属語のアクセントも合わせて、今後さらに検討する必要がある。

7. おわりに

終章では、これまでの内容をもとに、「地域差」という観点と「アクセント型の統合」「アクセント体系」という観点から京阪式アクセントの展開について考察をおこなった。まず、第2項で第1章から第3章までに述べた内容をまとめ、第3項で京都アクセントの変化について触れた。それをふまえて、第4項では「地域差」について取り上げ、すべてにおいて古いアクセントを残す地域がもはや存在しないこと、中央部からの地理的な距離

が変化の遅速に影響を及ぼすことはあってもそれがすべてではないこと、品詞や形（活用形）によって変化の進行度合が異なり、そこに地域差があらわれることなどを述べた。

つづく第5項では、表9から表13にまとめたとおり、アクセント体系は全体的に整然とした形になろうとしているのだということを改めて確認した。そして、その整然とした体系にまとまろうとする中で、「アクセント型の統合」や「体系からの力」がはたらくのだということを述べた。ただし、「アクセント型の統合」の力はアクセント史における「近世」などよりも弱まっており、むしろ「体系からの力」や、三拍名詞アクセントに顕著であった別の型に置き換わろうとする力などが強まる傾向にあり、それによって類の合同が引き起こされるのだということを指摘した。また、東京アクセントのような他のアクセント体系との対応関係についても注意が必要であることを確認した。すなわち、これらが現代京阪式アクセントのもつ特徴であるということになる。

また、第6項では文法に関わる事柄についてもふれ、一段動詞の五段化のような文法上の現象がアクセントとは関係の薄い変化であること、付属語〈ラシイ〉〈タイ〉のアクセント変化には文法上の問題が関わっており、名詞・動詞・形容詞にみられるアクセント変化とは異なる点がみられることを改めて確認した。

各論でもその都度触れてきたように、本研究に残された課題は多い。しかしながら、現代の京阪式アクセントについて、そこにあらわれたアクセントの変化を整理し、アクセント史の上に位置づけるという本研究の目的はある程度、達せられたといえよう。

【謝辞】

本研究で用いた調査データの収集にあたっては、以下にあげる組合・機関、個人の方々の
お世話になった。

明石浦漁業協同組合

富島漁業協同組合

一宮町漁業協同組合

福良漁業協同組合

春木漁業協同組合

深日漁業協同組合

加太漁業協同組合

JF 鳴門町

納水産（福良）

岩屋公民館

洲本市役所由良支所

早稲田大学校友会高知県支部（土佐塾）

檜原頼三郎氏（明石）

花野裕章氏（由良）

久保田ヒロ子氏（洲本）

登里康生氏（津井）

森脇淳代氏（恋野）

調査協力者の紹介、調査を実施する場所の提供など、さまざまに便宜をはかってくださっ
た。この場を借りて御礼申し上げます。

【参考文献】

- 秋永一枝（1957）「アクセントから文法へ—品詞の弁別について—」『国文学研究』31
- 秋永一枝（1991）『古今和歌集声点本の研究<研究篇 下>』校倉書房
- 秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木豊（1998）編『日本語アクセント史総合資料 研究篇』東京堂出版
- 岩本孝之（2013）『じょろりでいこか！淡路ことば辞典』神戸新聞総合出版センター
- 上野和昭（1993）「京都方言アクセントの遡行—近世後期以降の3拍動詞類推変化についての考察—」『国語学』172
- 上野和昭・仙波光明（1993）「徳島市における三拍動詞アクセントの変化の実態」
『徳島大学国語国文学』6
- 上野和昭編（2000、2001）『平家正節 声譜付語彙索引』アクセント史資料研究会
- 上野和昭（2011）『平曲譜本による近世京都アクセントの史的研究』早稲田大学出版部
- 榎垣実（1957）「大阪方言アクセント変化の傾向」『近畿方言双書 方言論文集2』
- 榎垣実（1962）「兵庫県方言 南部」 榎垣実編『近畿方言の総合的研究』三省堂
- 榎垣実（1963）「音調差異とその法則—京都市方言を例として—」『国語研究』15
- 上野善道（1984）「類の統合と式保存—隠岐の複合名詞アクセント」『国語研究』47
- 上野善道（1997）「複合名詞から見た日本語諸方言のアクセント」『日本語音声2 アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂
- 上野善道（2003）「アクセントの体系と仕組み」『朝倉日本語講座3 音声・音韻』第4章 朝倉書店
- 興津憲作（1990）『淡路方言 特徴・語法・アクセント・語彙』淡路文化会館
- 奥村三雄（1956）「辞の形態論的性格」『國語國文』25-9
- 奥村三雄（1981）『平曲譜本の研究』桜楓社
- 奥村三雄（1990）『方言国語史研究』東京堂出版
- 鏡味明克（1989）「アクセント体系の境界における地名のアクセント：三重愛知岐阜県境の場合」『三重大学教育学部研究紀要. 人文・社会科学』40
- 加藤望・中井幸比古（2009）「高知市方言・徳島市南部方言における動詞活用形のアクセント資料」『方言・音声研究』3
- 川上夔（1953）「「花高し」と「鼻高し」—東京アクセント段階観の限界」
『音声学会会報』82
- 川上夔（2003）「アクセント観のいろいろ」『国語研究』67
- 岸江信介（1990）「大阪市若年層における二拍名詞アクセント」徳川宗賢編『方言音調の諸相(1)』文部科学省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に

- 関する総合的研究（研究代表者：杉藤美代子）」1989 年度研究成果報告書 大阪大学文学部
- 岸江信介（1997）「大阪市若年層にみられるアクセント変化」『西日本におけるネオ方言の実態に関する調査研究』基盤研究（A）（1）研究成果報告書
- 岸江信介・村田真実（2012）「京阪式アクセントにおける2拍名詞の類の統合状況と低起無核型の消失傾向—大阪・奈良・三重・徳島方言を中心に—」『音声研究』16-3
- 木部暢子（2008）「内的変化による方言の誕生」シリーズ方言学1『方言の形成』第2章 岩波書店
- 金田一春彦（1955）「近畿中央部のアクセント覚え書き」『近畿方言叢書』1（『日本語方言の研究』1977 東京堂出版において訂正・再録されたものを参照）
- 金田一春彦（1964）『四座講式の研究』三省堂
- 金田一春彦（1974）『国語アクセントの史的研究 原理と方法』塙書房
- 言語編集部（1995）「共通語との心理的距離」『言語』24-12
- 郡史郎（2011）「大阪市方言若年層の二拍名詞第4・5類のアクセントについての一考察」杉藤美代子編『音声文法』くろしお出版
- 郡史郎・杉藤美代子（1989）「大阪アクセントの世代差」『音声言語』Ⅱ
- 国語学会編（1980）『国語学大辞典』東京堂出版
- 国立国語研究所（1991、1993）『方言文法全国地図』2・3集「活用編」
- 此島正年（1973）『国語助動詞の研究—体系と歴史—』桜楓社
- 小林隆（1996）「動詞活用におけるラ行五段化傾向の地理的分布」
『東北大学文学部研究年報』45
- 坂本清恵（1983）「近松浄瑠璃譜本に反映した十七世紀末大阪アクセント」
『国語学』135集
- 坂本清恵編（1988）『近松世話物浄瑠璃胡麻章付語彙索引 用言篇』
アクセント史資料研究会
- 坂本清恵・秋永一枝・上野和昭・佐藤栄作・鈴木豊（1998）編『「早稲田語類」「金田一語類」
対照資料』アクセント史資料研究会
- 佐久間鼎（1963）『日本音声学』東京：風間書房（1929年刊行の復刻版）
- 佐藤栄作（1989）編『アクセント史関係方言録音資料』アクセント史資料研究会
- 佐藤栄作（1998）「語構造とアクセント型」秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木豊編『日本語アクセント史総合資料 研究篇』東京堂出版
- 真田信治（1987）「ことばの変化のダイナミズム—関西圏における neo-dialect について」
『言語生活』429
- 真田信治・津染直也・大和シゲミ（1993）「大阪—和歌山間アクセントグロットグラム」『日本語音声における韻律的特徴：西日本における音声の収集と研究』平成4年度研究成果
刊行書

- 杉藤美代子・奥田恵子（1980）「中河内および南河内における近畿アクセント〇〇（\）型発話の実態」『大阪樟蔭女子大学論集』17
- 杉藤美代子・田原広史（1989）「統計的観点から見た大阪アクセント」『音声言語』III
- 高木千恵（1999）「若年層の関西方言における否定辞ン・ヘンについて 談話から見た使用実態」『日本語科学』16
- 高橋顕志（1982）「淡路島の方言」講座方言学7『近畿地方の方言』国書刊行会
- 田附敏尚（2004）「青森県五所川原市方言の一段・ラ行五段動詞の活用」
『言語科学論集』8
- 田中宣廣（2005）『付属語アクセントからみた日本語アクセントの構造』おうふう
- 田中萬兵衛（1950）「兵庫県淡路方言地図」『近畿方言』7
- 田原広史・中上愛（1999）「大阪の3拍語アクセントの世代差—外来語および和語について—」『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告』7
- 田原広史・村中淑子（2000）「大阪における二拍名詞IV類・V類の統合について—20代から60代までの実態—」『20世紀フィールド言語学の軌跡』
- 都染直也（1987）「姫路市の形町方言のアクセント—老年層の3拍体言とその世代差について—」『学苑』575
- 中井幸比古（1990）「大学生のアクセント(1)—近畿地方の中央式諸方言について(1)—」『香川大学一般教育研究』38
- 中井幸比古（1998）「中央式諸方言における複合名詞のアクセントについて」『神戸外大論叢』49-3
- 中井幸比古（1999）「徳島市南部地域のアクセントについて—旧勝占村方上出身の高田豊輝氏のアクセント」中井幸比古・高田豊輝・大和シゲミ編『徳島市方言アクセント小辞典』
- 中井幸比古（2002a）『京阪系アクセント辞典』 勉誠出版
- 中井幸比古（2002b）『京阪系アクセント辞典』CD-ROM版 勉誠出版
- 中井幸比古（2012）「書評 上野和昭著『平曲譜本による近世京都アクセントの史的研究』」
『国語と国文学』89-8
- 中澤光平（2011）「淡路島方言における動詞のアクセント体系の地域差」
東京大学言語学論集 31
- 中澤光平（2014）「地域差に基づく淡路方言の下位区分の試み」東京大学言語学論集 35
- 新田哲夫（2004）「京阪式アクセントにおける動詞の類推変化について」『国語学』55-1
- 新田哲夫（2005）「動詞アクセントの類推変化と式保存」『日本語の研究』1-2
- 日本語文法学会編（2014）『日本語文法事典』大修館書店
- 禰宜田龍昇（1986）『淡路方言の研究』神戸新聞出版センター
- 橋尾直和（1991）「神戸市須磨（青年層）方言のアクセント」
『日本語研究（東京都立大学）』12
- 服部四郎（1931）「国語諸方言アクセント概観（三）」『方言』1-4

- 服部敬之（1962）「淡路方言における一事象—洲本市近辺における一段活用動詞の五段化傾向—」『国文学攷』27
- 平田秀（2010）「三重県鈴鹿市方言の後部3拍複合名詞のアクセントについて」『東京大学言語学論集』30
- 平田秀（2011）「三重県鈴鹿市方言の後部3拍複合名詞のアクセントについて（2）」『東京大学言語学論集』31
- 村内英一（1955）「否定表現の語法—和歌山方言について—」『東條操先生古稀祝賀論文集』
- 村内英一（1962）「和歌山県方言」 榎垣実編『近畿方言の総合的研究』三省堂
- 村内英一（1982）「和歌山県の方言」講座方言学7『近畿地方の方言』国書刊行会
- 村上謙（2003）「近世後期上方における連用形禁止法の出現について」
『国語と国文学』80（12）
- 村中淑子（2005）「大阪における三拍名詞のアクセント—東大阪市100人調査の結果より—」
『姫路独協大学外国語学部紀要』18
- 山名邦男（1965）「淡路のアクセント」『音声の研究』11
- 山本俊治（1962）「大阪府方言」 榎垣実編『近畿方言の総合的研究』三省堂
- 山本俊治（1982）「大阪府の方言」 講座方言学7『近畿地方の方言』国書刊行会
- 湯澤幸吉郎（1936）『徳川時代言語の研究. 上方篇』刀江書院（本研究では1982 風間書房版を参照）
- 吉田金彦（1971）『現代語助動詞の史的研究』明治書院
- 和田實（1942）「近畿アクセントに於ける名詞の複合形態」『音声学協会会報』71
- 和田實（1984）「辞アクセントの記号化」『金田一春彦博士古稀記念論集』第2巻

【本研究と既発表論文との関係】

序章 研究対象と京都アクセント (書き下ろし)

第一章 名詞のアクセント

第一節 二拍名詞第4類と第5類の合同傾向

(「淡路島方言アクセントにおける二拍名詞第4・5類の合同傾向」『早稲田日本語研究』第23号、2014.3:24-35 / 口頭発表「淡路島のアクセントについて—アクセントの変化傾向と進度の違い—」2012年11月2日 日本方言研究会第95回研究発表会)

第二節 三拍名詞第2類・第4類のアクセント変化

(口頭発表「淡路島のアクセントについて—アクセントの変化傾向と進度の違い—」2012年11月2日 日本方言研究会第95回研究発表会 / 口頭発表「京阪式アクセント地域における3拍名詞のアクセント——第2類・第4類を中心に——」2016年7月2日 早稲田大学日本語学会2016年度前期研究会)

第二章 動詞活用形のアクセント

第一節 一段動詞の五段化とアクセント

(「京阪地域における一段動詞の五段可傾向とアクセント—淡路島とその周辺地域を中心に—」『国文学研究』第180集、2016.10:掲載予定 / 口頭発表「淡路島のアクセントについて—アクセントの変化傾向と進度の違い—」2012年11月2日 日本方言研究会第95回研究発表会 / 口頭発表「京阪地域における一段動詞の五段化傾向とアクセント」2013年12月7日 早稲田大学日本語学会2013年度後期研究会)

第二節 二拍および三拍動詞の禁止形アクセント

(「京阪式アクセント地域における動詞の禁止形アクセント」『論集』X アクセント史資料研究会、2015.2:137-149 / 口頭発表「京阪式アクセント地域における動詞の禁止形アクセント」2014年9月13日 第13回アクセント史資料研究会)

第三節 三拍動詞第2類のアクセント変化

(口頭発表「淡路島のアクセントについて—アクセントの変化傾向と進度の違い—」2012年11月2日 日本方言研究会第95回研究発表会 / 口頭発表「京阪式アクセント地域における3拍動詞第2類のアクセント変化に

ついて」2014年12月5日 早稲田大学国文学会2014年度秋季大会)

第三章 形容詞ならびに形容詞型活用の付属語のアクセント

第一節 三拍形容詞のアクセント変化

(「京阪式アクセント地域における3拍形容詞のアクセント—淡路島・大阪府南部を中心に—」『国文学研究』第172集、2014.3:37-47 / 口頭発表「淡路島のアクセントについて—アクセントの変化傾向と進度の違い—」2012年11月2日 日本方言研究会第95回研究発表会 / 口頭発表「京阪式アクセント地域における3拍形容詞のアクセント—淡路島・大阪府南部を中心に—」2013年9月7日 第12回アクセント史資料研究会)

第二節 付属語「らしい」のアクセント

(口頭発表「京阪式アクセント地域における付属語『らしい』のアクセント」2015年9月6日 第14回アクセント史資料研究会)

第三節 付属語「たい」のアクセント

(「京阪式アクセント地域における助動詞「たい」のアクセント」『論集』XI、2016.2:161-176)

終章 京阪式アクセントの展開 (書き下ろし)